

# 長岡市立科学博物館研究報告

第 9 号

BULLETIN OF THE  
NAGAOKA MUNICIPAL SCIENCE MUSEUM

Number 9

1974

長岡市立科学博物館  
Nagaoka Municipal Science Museum  
Yukyuzan Park, Nagaoka, Japan



長岡市立科学博物館研究報告 第9号

目 次

1. 吉原正秀・西山邦夫・関省吾：苗場山の植物……………	1～ 25
2. 樋熊清治：屋久島のアマミナフシ……………	27～ 30
3. 樋熊清治：長岡市立科学博物館に寄贈された放土田繁也氏蒐集の 鱗翅類日録（I．外国産チョウ類）……………	31～ 48
4. 柿沢亮三：オオヨシキリ（ <i>Acrocephalus arundinaceus</i> ）の成鳥と 幼鳥の渡りの時期について……………	49～ 54
5. 鈴木昭英：越後警女組織拾遺……………	55～104

CONTENTS

1. † YOSIHARA, Masahide · NISIYAMA, Kunio and SEKI, Shogo: A List of plants of Mt. NAIBA……………	1～ 25
2. HIGUMA, Seiji: Notes on a male specimen of the walking-stick, <i>Entoria amamensis</i> YASUMATSU, from Yakushima Island……………	27～ 30
3. HIGUMA, Seiji: A list of the butterflies (Lepidoptera) collected by late Mr. S. Tsuchida, whose specimens are deposited in the Nagaoka City Museum. (I. The exotic butterflies)……………	31～ 48
4. KAKIZAWA, Ryozo: Migratory Season of Eastern Great Reed-warbler <i>Acrocephalus arundinaceus</i> in Niigata Prefecture……………	49～ 54
5. SUZUKI, Shōei: Gleanings of Companys on Echigo-Goze (Blind touring-singers in Echigo Province)……………	55～104



# 苗場山の植物

著者 吉原 正秀・西田 邦夫・関 省彦\*

A List of plants of Mt. NAIBA

By

† Masahide YOSIHARA, Kunio NISHIYAMA and Shogo SEKI

## はじめに

苗場山は、三向山脈の一部で長野・新潟の両県にまたがり標高2,145メートル。登山路は、新潟県側の八木沢(はきさわ)沢道、(2)赤湯道、(3)津南道、長野県側からの(4)小赤沢道、(5)上ノ原道、が主なもので、その女性的なたたらかな山容は親しみやすく、夏はいうまでもなく、秋の紅葉、冬のスキーと全年を通じて登山者でにぎわっている。

筆者らは、1963年7月29日～8月2日、1965年8月5日～8日の2回にわたり、最も登山者の多い新潟県側の八木沢道(八木沢～祓川～和田小屋～神楽峰～お花畑～山頂)のフロラ調査を行なった。しかし、近年この山にも例外なく開発の手がのび、祓川から和田小屋周辺にかけて相当広範囲にわたりブナ林の伐採が進み、昔の姿をしのぶすかもない程植生は大きく変貌した。そこで、ただ2回だけの調査では極めて不十分で調査もれや誤謬も多いと思われるが、近年開発に共なり植生の変貌が急速なので、この際一応調査の記録を整理し今後遷移の把握などを知る手掛かりにと考えて、ここに植生の一部とフロラの概要を纏めることにした。

稿を進めるにあたり、一部文献をお見せ下さった当館昆虫研究室穂熊清治氏、植生リストについてご教示下さった新潟大学理学部石沢進先生、種々のご指導と原稿の校閲を賜わった同大学理学部池上義信先生に厚くお礼申し上げます。

## 植生の概要

当八木沢登山路は、国鉄上越線越後湯沢駅より苗場山行きバスで八木沢から清津川を渡り、バス終点から山道にかかり、祓川、和田小屋を経て神楽峰に登り、尾根を伝って山頂に至るが、この間順を追って植生の概要を述べる(第1図)。

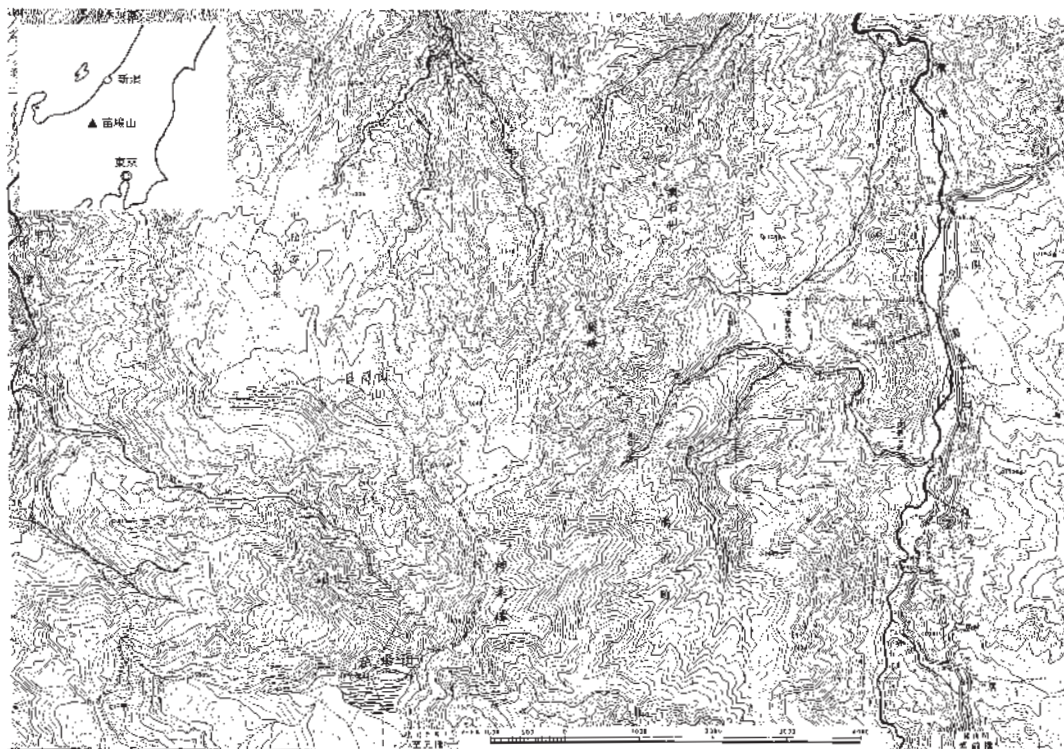
### 1. 和田小屋(標高1,350m)まで

バス終点(標高1,100m)から祓川の左岸をたどる登山路は数年前に隘道になり、いまでは造林地の中に巾広い林道が和田小屋直下まで切られている。このあたりは、かつてはウダイカンパをまじえたブナの密林で昼なお暗い林床には、ノリウツギ、エゾユズリハ、ヒメモチなどの低木と、ヒロハエキザサ、スミレサイシン、ユケシ

\* 元長岡市立科学博物館植物研究室

\*\* 長岡市立科学博物館植物研究室

\*\*\* 県立小千谷西高等学校

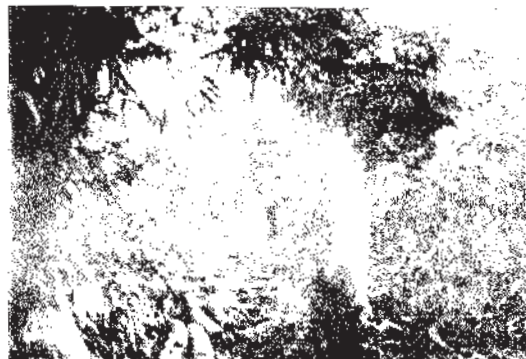


第1図 苗場山の地形（国土地理院：5万分の1；苗場山・越後湯沢）

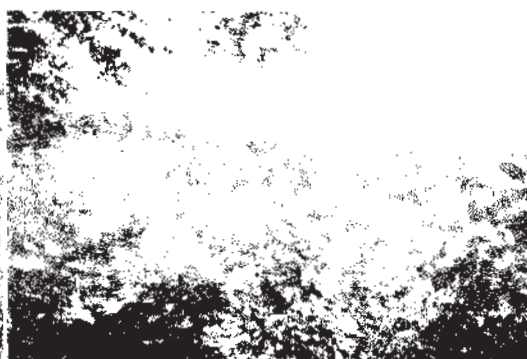
ノブなどの草本が生育していた。しかし、現在、和田小屋までの間は広くカラマツなどが植林され、北西の山腹は大規模に伐採されている（第2図）。

## 2. 神楽峰（標高2,028m）まで

和田小屋の上は標高1,400メートル付近までブナ林が続き、落葉樹のミズナラ、ムシカリ、ミズキをまじえ、下草には、ツバメオモト、ゴゼンタチバナ、アリドオンラン、ヤマソテツなどが目立つ。ブナ帯の上限付近には



第2図 和田小屋直上の登山路  
（1963年7月30日撮影）

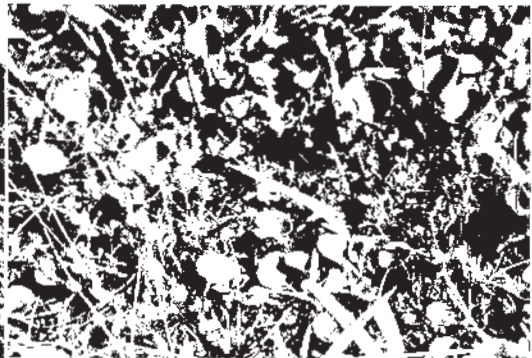


第3図 標高1,400m付近からコメツガ、オオシラビソが出現（1963年7月30日）





第4図 下ノ芝周辺のクロベ、コマツガ  
(1963年7月30日)

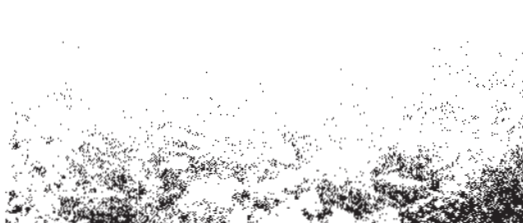


第5図 芝の中に見られるヒメイワカガミ、  
モウセンゴケ (1963年7月30日)

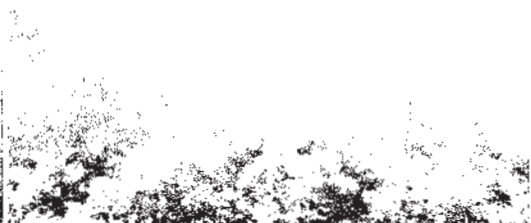
ダケカンパが点在し、ミネカエデ、オガラバナ、カラシキミ、ツルシキミ、チマキザサ、オニシオガマ、ハクサンボウフウ、コゼンタチバナ、ウメバチソウなどが生育する。

標高1,400メートルを越えると、コマツガ、オオシラビソが出現しはじめ(第3図)、標高1,500メートルからはオオシラビソが優占し、所によってはクロベが小群落をつくる(第4図)。このオオシラビソの優占する針葉樹帯の中に、下ノ芝(標高1,600m)、中ノ芝(標高1,700m)、上ノ芝(標高1,800m)の三か所の高層混原があり、中ノ芝が一番広く、混生植物に富む(第5図)、これらは、いずれも暗い樹林の中にゆるい傾斜面の明るく展開した美しい草原で、芝とよぶのは、単子葉のメマガヤ、ミヤマイヌノハナヒゲ、ミタケスゲ、ミカズキグサ、キンコウカ、イワショウブ、コバノトンボソウなどイネ科、カヤツリグサ科等の草本が広くひきつめ遠くからは芝生のように見えるからである。芝の中には所々にニッコウキスゲが群生し、これに伴なってウラゲコバイケイソウ(第9図)、ワタスゲ、ミネハリイ、タテヤマリンドウ、イワイキョウ、ツルコケモモ、カラクサイノヂ、モウセンゴケなど数多くの小草本が生育する。周辺に見られる低木は、ベニサラサドウダン、ツシマナナカマド、ミネヤナギ、ハクサンシャクナゲ、クロマメノキなどである。

標高1,800メートル付近にある上ノ芝には、チマキザサが進入し、乾性への遷移が進んでいる。ここから神楽峠の頂上までは(第6図、第7図)、芝をとりまいてオオシラビソの優占する林が続き、林縁にはミヤマハシロキ、アカミノイヌツゲ、ウラジロハナヒリノキなどの混生する低木叢が続く。



第6図 神楽峰東斜面の草原  
(1963年7月30日)



第7図 神楽峰の北肩の景観  
(1963年7月30日)



第8図 オオシラビソの球果  
(1963年7月30日)



第9図 湿地で見られるウラゲコバイケイソウ  
(1965年8月7日)

### 3. 神楽峰から山頂周辺(標高2,145m)

道は神楽峰より尾根すじで丈低いオオシラビソ(第8図)の林中を100メートル程下って本山との鞍部に出るが、鞍部手前に清水があり、腎清水とよび、まわりにクロクモソウ、メタカラコウなどの湿生植物が多い。この鞍部付近のややなだらかな所にお花畑が展開しミヤマアキノキリンソウ、ミヤマダイコンソウ、オノニラン、イワオウギ、シラネニンジン、イブキゼリ、ヤマハハコ、ウスユキソウ、ミヤマシヤシソ、オヤマリントウ、ミヤマトギリ、コキンレイカ、ホソバコゴメタサ、タカネナゲシコ、ネバリノギリラン、ミヤマトウキ、シラネアサミ、ハクサンフウロ、タチヤマウツボ、ハナイカリ、エゾシオガマ、イワノガリヤス、ウサギシダ、ミヤマメシダなどが生育する。ここからは急な登りとなり、続く丈低いオオシラビソの林中にイチイが点在し、ネコンチ、ミネザクラ、ツシマナカマドなど誕生する下草にツガザクラ、ウスユキソウ、イワカガミ、ヒメイワカガミなどが生育し、斜面の積み重なった岩のすきまには、所々ヒカリゴケが黄緑に美しく光る。

山頂は(第10図)、広く低平で西南に向ってなだらかに大湿原が展開し、大小無数の池塘が散在するが(第11図、第12図)、その間にオオシラビソ、ハイマツ、チシマザサをまじえた木本が随所に小群落をつくっている。湿原には、ヌマガヤ、ワタスゲ、ミヤマイヌノハナヒゲ、イワイチョウ、キンコウカ、チングルマが多く、池塘には、ミヤマハタルイ、ヤチスゲなどが生えあたかも苗代のような景観で、苗場山の名はこれに由来するとか。池の周辺は、ミズゴケに厚く縁どられ、そこにモウセンゴケ、ヒメシキクナゲ、キンコウカ、ミネハライが生育し、典型的な高層湿原を形成している。

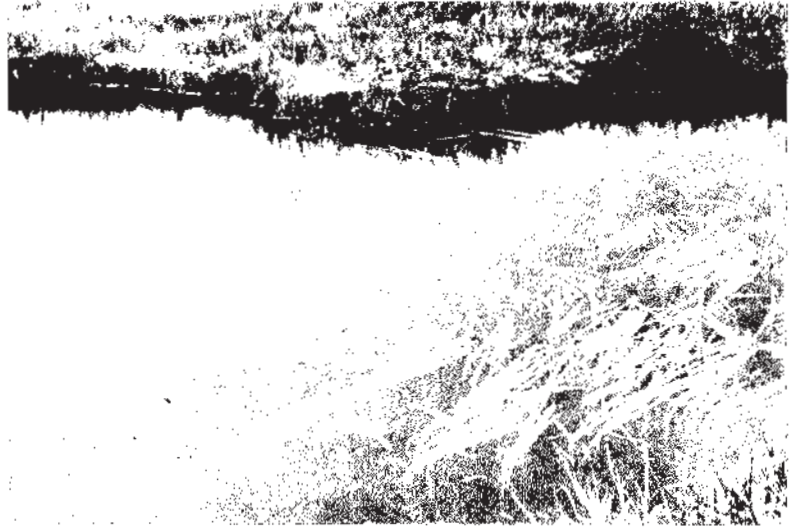


第10図 山頂の景観  
(1965年8月7日)



第11図 山頂に散在する池塘  
(1965年8月7日)





第12図 池塘の一つに見られる水生植物Sparganium sp?  
(1965年8月7日)

#### 参 考 文 献

- 1) 中村正雄(1925), 新潟県天産誌, P P 1~330.
- 2) 奥山春季(1937), 越後苗場山採集植物日録, 自然科学と博物館第94号10月号, 科学博物館事業後援会, P P 19~28.
- 3) 横内斎(1956), 苗場山植物採集紀行, 長野林友7月号, P P 92~98.
- 4) 伊藤栄子(1958), 苗場山の植物について, 自然科学と博物館第25巻第11~12号, 国立科学博物館, P P 1~7.
- 5) 水島正美・横内斎(1959), 苗場山植物日録(予報), 苗場山調査中間報告第1号, 下水内教育会, P P 1~10.
- 6) 横内斎(1962), 下水内郡植物地理, 下水内教育会, P P 1~167.
- 7) 菊地勘左エ門(1964), 苗場山植物調査報告, 苗場山緊急調査報告書, 新潟県教育委員会, P P 7~9.
- 8) 山崎林治・羽田健三・樋口志保美(1964), 苗場山の植生, 苗場山予備調査報告書, 長野県教育委員会, P P 29~69.
- 9) 野田光蔵(1968~1971), 越後の植物誌 I~IV, 新潟大学理学部生物学教室植物分類形態学研究室, P P 1~376.
- 10) 田村良三(1971), 苗場山ミズゴケ湿原産のツヅミモ類, 新潟県生物教育研究会誌第7号, 新潟県生物教育研究会, P P 33~35.

## 苗場山(八木沢~菰川~和田小屋~神楽峰~お花畑~山頂)

## 産植物目録

## PTERIDOPHYTA シダ植物門

## Hymenophyllaceae コケシノブ科

1. *Mecodium Wrightii* COPELAND コケシノブ

## Plagiogyriaceae キシノオシダ科

2. *Plagiogyria euphlebia* METTENIUS オオキジノオ  
3. *P. japonica* NAKAI キシノオ  
4. *P. Matsumureana* MAKINO ヤマソラツ

## Aspidiaceae オシダ科

5. *Athyrium deltoideifrons* MAKINO サトメシダ  
6. *A. melanolepis* CHRIST ミヤマメシダ  
7. *A. niponicum* HANCE イスワラビ  
8. *A. pycnosorum* CHRIST ミヤマシケンダ  
9. *A. rupestre* KODAMA ミヤマヘビノネゴザ  
10. *A. Vidalii* NAKAI ヤマニスワラヒ  
11. *A. yokoscense* CHRIST ヘビノネゴザ  
12. var. *alpicola* HIYAMA タカネヘビノネゴザ  
13. *Cornopteris crenulato-serrulata* NAKAI イッポンワラビ  
14. *C. opaca* TAGAWA シケンシタ  
15. *Diplazium oshimense* ITO シケンシダ  
16. *D. squamigerum* MATSUMURA キヨタキシダ  
17. *Dryopteris austriaca* WOYNAR, SCHINZ et THELLVNG シラネワラビ  
18. *D. crassirhizoma* NAKAI オシダ  
19. *D. lacera* O. KUNTZE タマワラビ  
20. *D. uniformis* MAKINO オタマワラビ  
21. *D. varia* O. KUNTZE イタキシタ  
22. *Gymnocarpium Dryopteris* NEWMAN ウサギシダ  
23. *Lastrea japonica* COPELAND ハリガネワラビ  
24. *L. oligophlebia* COPELAND ヒメワラビ  
25. *L. quelpaertensis* COPELAND オオバシユリマ  
26. *L. Thelypteris* BORY var. *pubescens* LAWSON ヒメシダ  
27. *Leptogramma totta* J. SMITH ミノシダ  
28. *Leptorumohra Miqueliana* H. ITO ナライシダ  
29. *Phegopteris decursive-pinnata* FÉE ゲンケジシダ  
30. *P. polypodioides* FÉE ミヤマワラビ  
31. *Polystichum microclamys* MATSUMURA カラクサイノデ  
32. *P. polyblepharum* PRESL var. *intermedium* KURATA アイアスカイノデ  
33. *P. retro-paleaceum* TAGAWA サカゲイノデ  
34. *P. tripterum* PRESL ジュウモンジシダ

- |                      |  |            |
|----------------------|--|------------|
| 35.                  | <i>Rumohra mutica</i> NAKAI  | シノブカグマ     |
| 36.                  | <i>R. Standishii</i> NAKAI   | リュウメンシダ    |
| 37.                  | <i>Woodsia polystichoides</i> EATON                                  | イワテシダ      |
| <b>Aspleniaceae</b>  |  | チャセンシダ科    |
| 38.                  | <i>Asplenium incisum</i> THUNBERG                                    | トラノオシダ     |
| 39.                  | <i>Phyllitis scolopendrium</i> NEWMAN                                | コタエワタリ     |
| <b>Polypodiaceae</b> |  | ウラボシ科      |
| 40.                  | <i>Lepisorus annuifrons</i> CHING                                    | ホテイシダ      |
| 41.                  | <i>L. Thunbergianus</i> CHING  | ノキシノブ      |
| 42.                  | <i>L. ussuriensis</i> CHING var. <i>distans</i> TAGAWA               | ミヤマノキシノブ   |
| 43.                  | <i>Polypodium Fauriei</i> CHRIST                                     | オシダクシシダ    |
| <b>Pteridaceae</b>   |  | ワラビ科       |
| 44.                  | <i>Adiantum pedatum</i> LINNAEUS                                     | クジャクシダ     |
| 45.                  | <i>Coniogramme intermedia</i> HIERONYMUS                             | イワガネセンマイ   |
| 46.                  | <i>Pteridium aquilinum</i> KUHN var. <i>latiusculum</i> UNDERWOOD    | ワラビ        |
| 47.                  | <i>Pteris cretica</i> LINNAEUS                                       | オオバノイノモトソウ |
| <b>Onocleaceae</b>   |  | コウヤワラビ科    |
| 48.                  | <i>Onoclea sensibilis</i> LINNAEUS var. <i>interrupta</i> MAXIMOWICZ | コウヤワラビ     |
| 49.                  | <i>Pentarrhizidium japonicum</i> HAYATA                              | イスガンソク     |
| <b>Blechnaceae</b>   |  | シシガンソク科    |
| 50.                  | <i>Struthiopteris amabilis</i> TAGAWA                                | オセシダ       |
| 51.                  | <i>S. castanea</i> NAKAI   | ミヤマシシガンソク  |
| 52.                  | <i>S. niponica</i> NAKAI   | シシガンソク     |
| <b>Osmundaceae</b>   |  | センマイ科      |
| 53.                  | <i>Osmunda cinnamomea</i> LINNAEUS var. <i>fokiensis</i> COPELAND    | ヤマドリセンマイ   |
| 54.                  | <i>O. japonica</i> THUNBERG  | センマイ       |
| <b>Equisetaceae</b>  |  | トクサ科       |
| 55.                  | <i>Equisetum arvense</i> LINNAEUS                                    | スギナ        |
| <b>Lycopodiaceae</b> |  | ヒカゲノカズラ科   |
| 56.                  | <i>Lycopodium chinense</i> CHRIST                                    | ヒメスギラン     |
| 57.                  | <i>L. clavatum</i> LINNAEUS var. <i>nipponicum</i> NAKAI             | ヒカゲノカズラ    |
| 58.                  | <i>L. obscurum</i> LINNAEUS  | マンネンスギ     |
| 59.                  | form. <i>flabellatum</i> TAKEDA                                      | ウチワマンネンスギ  |
| 60.                  | form. <i>strictum</i> NAKAI  | タチマンネンスギ   |
| 61.                  | <i>L. serratum</i> THUNBERG  | コウゲヒバ      |
| 62.                  | <i>L. sitchense</i> RUPRECHT var. <i>nikoense</i> TAKEDA             | タカネヒカゲノカズラ |

**SPERMATOPHYTA** 種子植物門**GYMNOSPERMAE** 裸子植物亜門**Taxaceae** イチイ科

63. *Taxus cuspidata* SIEBOLD et ZUCCARINI イチイ  
64. var. *nana* REHDER キヤラボク

**Cephalotaxaceae** イヌガヤ科

65. *Cephalotaxus Harringtonia* K. KOCH var. *nana* REHDER ハイイスガヤ

**Abietaceae** モミ科

66. *Abies Mariesii* MASTERS オオシラビン  
67. *Tsuga diversifolia* MASTERS コメツガ

**Pinaceae** マツ科

68. *Pinus pumila* REGEL ハイマツ

**Cupressaceae** ヒノキ科

69. *Thuya Standishii* CARRIÈRE クロベ

**ANGIOSPERMAE** 被子植物亜門**DICOTYLEDONEAE** 双子葉植物綱**ARCHICHLAMYDEAE** 古生花被植物亜綱**Saururaceae** ドクダミ科

70. *Houtuynia cordata* THUNBERG ドクダミ

**Chloranthaceae** センリョウ科

71. *Chloranthus serratus* ROEMER et SCHULTES フタリシズカ

**Salicaceae** ヤナギ科

72. *Populus Sieboldi* MIQUEL ヤマナラシ  
73. *Salix Bakko* KIMURA バッコヤナギ  
74. *S. futura* SEEMEN オオネコヤナギ  
75. *S. gracilistyla* MIQUEL ネコヤナギ  
76. *S. integra* THUNBERG イヌコリヤナギ  
77. *S. Reinii* FRANCHET et SAVATIER ミネヤナギ  
78. *S. sachalinensis* FR. SCHMIDT オノエヤナギ

**Juglandaceae** クルミ科

79. *Pterocarya rhoifolia* SIEBOLD et ZUCCARINI サワグルミ

**Betulaceae** カバノキ科

80. *Alnus crispa* PURSH subsp. *Maximowiczii* HULTÉN ミヤマハンノキ  
81. *A. Fauriei* LÉVEILLÉ et VANIOT ミヤマカワラハンノキ  
82. *A. hirsuta* TURCZANINOW ケヤマハンノキ

- |     |   |         |
|-----|---|---------|
| 83. | var. <i>sibirica</i> C. K. SCHNEIDER          | ヤマハンノキ  |
| 84. | <i>A. Matsumurae</i> CALLIER                  | ヤハズハンノキ |
| 85. | <i>A. pendula</i> MATSUMURA                   | ヒメヤシャブシ |
| 86. | <i>Betula corylifolia</i> REGEL et MAXIMOWICZ | ネコシデ    |
| 87. | <i>B. Ermani</i> CHAMISSE                     | ダケカンバ   |
| 88. | <i>B. grossa</i> SIEBOLD et ZUCCARINI         | ヨグソミネバリ |
| 89. | <i>B. Maximowicziana</i> REGEL                | ウダイカンバ  |

**Corylaceae** ハシバミ科

- |     |                                  |        |
|-----|----------------------------------|--------|
| 90. | <i>Carpinus cordata</i> BLUME    | サツシバ   |
| 91. | <i>C. japonica</i> BLUME         | クマシデ   |
| 92. | <i>Corylus Sieboldiana</i> BLUME | ツノハシバミ |

**Fagaceae** ブナ科

- |     |   |   |     |
|-----|---|---|-----|
| 93. | <i>Castanea crenata</i> SIEBOLD et ZUCCARINI                                | ク | リ   |
| 94. | <i>Fagus crenata</i> BLUME  | ブ | ナ   |
| 95. | <i>Quercus mongolica</i> FISCHER var. <i>grosseserrata</i> REHDER et WILSON | ミ | ズナラ |
| 96. | <i>Q. serrata</i> THUNBERG  | コ | ナラ  |

**Ulmaceae** ニレ科

- |     |                                 |   |     |
|-----|---------------------------------|---|-----|
|     | <i>Ulmus Davidiana</i> PLANCHON |   |     |
| 97. | var. <i>japonica</i> NAKAI      | ハ | ルニレ |
| 98. | form. <i>suberosa</i> NAKAI     | コ | ブニレ |

**Urticaceae** イラクサ科

- |      |  |   |        |
|------|--|---|--------|
| 99.  | <i>Boehmeria tricuspis</i> MAKINO                    | ア | カソ     |
| 100. | <i>Elatostema involucreatum</i> FRANCHET et SAVATIER | ウ | ワバミソウ  |
| 101. | <i>Laportea macrostachya</i> OHWI                    | ミ | ヤマイラクサ |

**Santalaceae** ビヤクダン科

- |      |                                     |   |       |
|------|-------------------------------------|---|-------|
| 102. | <i>Thesium chinense</i> TURCZANINOW | カ | ナビキソウ |
|------|-------------------------------------|---|-------|

**Asaraceae** コンアオイ科

- |      |                                      |   |        |
|------|--------------------------------------|---|--------|
| 103. | <i>Asiasarum Sieboldi</i> F. MAEKAWA | ウ | スバサイシン |
| 104. | <i>Heterotropa</i> sp                |   |        |

**Polygonaceae** タデ科

- |      |   |   |          |
|------|---|---|----------|
| 105. | <i>Bistorta vivipara</i> S. F. GRAY                     | ム | カゴトラノオ   |
| 106. | <i>Persicaria conspicua</i> NAKAI                       | サ | クラタデ     |
| 107. | <i>P. longiseta</i> KITAGAWA                            | イ | ズタデ      |
| 108. | <i>P. nepalensis</i> GROSS                              | タ | ニソバ      |
| 109. | <i>P. nipponensis</i> GROSS                             | ヤ | ノネグサ     |
| 110. | <i>P. sagittata</i> H. GROSS var. <i>Sieboldi</i> NAKAI | ア | キノウナギツカミ |
| 111. | <i>P. Thunbergii</i> H. GROSS                           | ミ | ソソバ      |
| 112. | <i>Polygonum aviculare</i> LINNAEUS                     | ミ | チヤナギ     |
| 113. | <i>Reynoutria japonica</i> HOUTTUYN                     | イ | タドリ      |
| 114. | <i>R. sachalinensis</i> NAKAI                           | オ | オイタドリ    |
| 115. | <i>Rumex Acetosa</i> LINNAEUS                           | ス | イバ       |

- |                       |   |               |
|-----------------------|---|---------------|
| 116.                  | <i>R. japonicus</i> HOUTTUYN  | ギ シ ギ シ       |
| 117.                  | <i>Tovara filiformis</i> NAKAI  | ミ ズ ヒ キ       |
| <b>Alsiniaceae</b>    |   | ナ デ シ コ 科     |
| 118.                  | <i>Cerastium caespitosum</i> GILIBERT var. <i>ianthes</i> HARA                    | ミ ミ ナ グ サ     |
| 119.                  | <i>Dianthus superbus</i> LINNAEUS var. <i>speciosus</i> REICHHENBACH              | タ カ ネ ナ デ シ コ |
| 120.                  | <i>Lychnis gracillima</i> MAKINO  | セ ン ジ ュ ガ ン ビ |
| 121.                  | <i>Sagina japonica</i> OHWI   | ツ メ ク サ       |
| 122.                  | <i>Stellaria Alsine</i> GRIMM   | ノ ミ ノ フ ス マ   |
| 123.                  | <i>S. aquatica</i> SCOPOLI  | ウ シ ハ コ ベ     |
| 124.                  | <i>S. neglecta</i> WEIHE  | ハ コ ベ         |
| <b>Ranunculaceae</b>  |   | キンボウゲ科        |
| 125.                  | <i>Clematis japonica</i> THUNBERG var. <i>brevipedicellata</i> MAKINO             | アズマハンショウズル    |
| 126.                  | <i>C. stans</i> SIEBOLD et ZUCCARINI  | ク サ ボ タ ン     |
| 127.                  | <i>Hepatica nobilis</i> SCHREBER var. <i>japonica</i> NAKAI                       | ミ ス ミ ソ ウ     |
| 128.                  | <i>Ranunculus japonicus</i> THUNBERG  | ウ マ ノ ア ン ガ タ |
| 129.                  | <i>R. quelpaertensis</i> NAKAI  | キ ツ ネ ノ ボ タ ン |
| 130.                  | <i>Thalictrum aquilegifolium</i> LINNAEUS   | カ ラ マ ツ ソ ウ   |
| 131.                  | <i>T. minus</i> LINNAEUS  | ア キ カ ラ マ ツ   |
| 132.                  | <i>Troutvetteria japonica</i> SIEBOLD et ZUCCARINI                                | モ ミ ジ カ ラ マ ツ |
| <b>Helleboraceae</b>  |   | オダマキ科         |
| 133.                  | <i>Aconitum japonicum</i> THUNBERG var. <i>montanum</i> NAKAI                     | ヤマトリカブト       |
| 134.                  | <i>Aquilegia Buergeriana</i> SIEBOLD et ZUCCARINI                                 | ヤマオダマキ        |
| 135.                  | <i>Cimicifuga simplex</i> WORMSKJORD  | サラシナショウマ      |
| 136.                  | <i>Coptis japonica</i> MAKINO   | オウレン          |
| 137.                  | <i>C. quinquefolia</i> MIQUEL   | バイカオウレン       |
| 138.                  | <i>C. trifolia</i> SALISBURY  | ミツバオウレン       |
| 139.                  | <i>Isopyrum nipponicum</i> FRANCHET   | アズマンロカネソウ     |
| <b>Podophyllaceae</b> |   | ミヤオソウ科        |
| 140.                  | <i>Diphylleia Grayi</i> FR. SCHMIDT   | サンカヨウ         |
| 141.                  | var. <i>incisa</i> TAKEDA   | キレバサンカヨウ      |
| 142.                  | <i>Glaucidium palmatum</i> SIEBOLD et ZUCCARINI                                   | シラネアオイ        |
| <b>Berberidaceae</b>  |   | メギ科           |
| 143.                  | <i>Caulophyllum robustum</i> MAXIMOWICZ   | ルイヨウボタン       |
| <b>Menispermaceae</b> |   | ツツラフジ科        |
| 144.                  | <i>Cocculus trilobus</i> A. P. DE CANDOLLE  | アオツツラフジ       |
| 145.                  | <i>Menispermum dauricum</i> A. P. DE CANDOLLE var. <i>pilosum</i> C. K. SCHNEIDER | コウモリカズラ       |
| <b>Magnoliaceae</b>   |   | モクレン科         |
| 146.                  | <i>Magnolia obovata</i> THUNBERG  | ホオノキ          |
| 147.                  | <i>M. salicifolia</i> MAXIMOWICZ  | タムシバ          |



- Lauraceae**                      クスノキ科
148. *Lindera umbellata* THUNBERG var. *aurantiaca* HIYAMA form. *membranacea* MAKINO  
オオバクロモジ
149. *Neolitsea sericea* KOIDZUMI  
シロダモ
150. *Parabenzoin praecox* NAKAI var. *pubescens* IIONDA  
ケアブラチャン
- Brassicaceae**                      アブラナ科
151. *Arabis lyrata* LINNAEUS var. *kamchatica* FISCHER  
ミヤマハタザオ
152. *A. serrata* FRANCHET et SAVATIER var. *japonica* OHWI  
イワハタザオ
153. *Cardamine leucantha* O. E. SCHULZ  
ロンロンソウ
154. *C. scutata* THUBERG subsp. *Regeliana* HARA  
オオバタネツケバナ
155. *Rorippa indica* HIERN  
イスガラシ
- Droseraceae**                      モウセンゴケ科
156. *Drosera rotundifolia* LINNAEUS  
モウセンゴケ
- Hydrangeaceae**                      アジサイ科
157. *Hydrangea macrophylla* SERINGE subsp. *serrata* MAKINO var. *megacarpa* OHWI  
エゾアジサイ
158. *H. paniculata* SIEBOLD  
ノリウツギ
159. *Schizophragma hydrangeoides* SIEBOLD et ZUCCARINI  
イワガラミ
- Philadelphaceae**                      ウツギ科
160. *Deutzia crenata* SIEBOLD et ZUCCARINI  
ウツギ
161. *Philadelphus satsumanus* MIQUEL  
バイカウツギ
- Parnassiaceae**                      ウメバチソウ科
162. *Parnassia palustris* LINNAEUS var. *multiseta* LEDEBOUR  
ウメバチソウ
- Saxifragaceae**                      ユキノシタ科
163. *Astilbe Thunbergii* MIQUEL var. *congesta* H. BOISSIEU  
トリアシショウマ
164. *Chrysoplenium flagelliferum* FR. SCHMIDT  
ツルネコノメソウ
165. *Saxifraga fusca* MAXIMOWICZ var. *Kikubuki* OHWI  
クロクモソウ
166. *Tiarella polyphylla* D. DON  
ズダヤクシュ
- Hamamelidaceae**                      マンサク科
167. *Hamamelis japonica* SIEBOLD et ZUCCARINI var. *obtusata* MATSUMURA  
マルバマンサク
- Spiraceae**                      シモツケ科
168. *Aruncus dioicus* FERNALD  
ヤマブキシユウマ
- Rosaceae**                      バラ科
169. *Acomastylis calthifolia* F. BOLLE var. *nipponica* HARA  
ミヤマダイコンソウ
170. *Agrimonia pilosa* LEDEBOUR var. *japonica* NAKAI  
キンミズヒキ
171. *Filipendula camtschatica* MAXIMOWICZ  
オニシモツケ
172. *F. multijuga* MAXIMOWICZ  
シモツケソウ
173. *Geum japonicum* THUNBERG  
ダイコンソウ
174. *Potentilla centigrana* MAXIMOWICZ from. *patens* HIYAMA  
ヒメヘビイチゴ

175. *P. Cryptotaeniae* MAXIMOWICZ ミツモトソウ  
 176. *Kosa polyantha* SIEBOLD et ZUCCARINI ノイバラ  
 177. *Rubus Ikenoensis* LÉVEILLÉ et VANIOT ゴヨウイチコ  
 178. *R. Koehneanus* FOCKE ミヤマニガイチゴ  
 179. *R. microphyllus* LINNAEUS, f. ニガイチゴ  
 180. *R. palmatus* THUNBERG var. *coctophyllus* O. KUNTZE モキジイチコ  
 181. *R. parvifolius* LINNAEUS ナワシロイチコ  
 182. *R. pectinellus* MAXIMOWICZ マルバフイチコ  
 183. *R. pedatus* J. E. SMITH コガネイチコ  
 184. *R. vernus* FOCKE ベニバナイチコ  
 185. *R. Wrightii* A. GRAY クマイチゴ  
 186. *Sieversia pentapetala* GREENE チングルマ

**Amygdalaceae** サクラ科

187. *Prunus Grayana* MAXIMOWICZ ウツミスザクラ  
 188. *P. nipponica* MATSUMURA ミネザクラ

**Malaceae** ナシ科

189. *Sorbus alnifolia* C. KOCH アズキナシ  
 190. *S. Wilfordii* KOEHNE ツシマナナカマド

**Fabaceae** マメ科

191. *Aeschynomene indica* LINNAEUS クサネム  
 192. *Desmodium racemosum* A. P. DE CANDOLLE ヌスビトハギ  
 193. var. *mandshuricum* OHWI ヤブハギ  
 194. *Hedysarum ussuriense* SCHISCHKIN et KOMAROV イワオウギ  
 195. *Indigofera decora* LINDLEY ニワフジ  
 196. *Kummerowia striata* SCHINDLER ヤハズソウ  
 197. *Lespedeza bicolor* TURCZANINOW form. *acutifolia* MATSUMURA ヤマハギ  
 198. *L. cuneata* G. DON メドハギ  
 199. *L. pilosa* SIEBOLD et ZUCCARINI ネコハギ  
 200. *Lolus corniculatus* LINNAEUS var. *japonicus* REGEL ミヤマグサ  
 201. *Muackia amurensis* RUPRECHT et MAXIMOWICZ var. *Buergeri* C. K. SCHNEIDER イヌエンジュ  
 202. *Pueraria lobata* OHWI クズ  
 203. *Vicia Cracca* LINNAEUS クサフジ  
 204. *V. tetrasperma* SCHREBER カスマグサ

**Geraniaceae** フクロソウ科

205. *Geranium nepalense* SWEET var. *Thunbergii* KUDO ゲンノショウコ  
 206. *G. yezoense* FRANCHET et SAVATIER var. *nipponicum* NAKAI ハクサンフウロ

**Oxalidaceae** カタバミ科

207. *Oxalis Acetosella* LINNAEUS コミヤマカタバミ  
 208. subsp. *Griffithii* HARA ミヤマカタバミ  
 209. *O. corniculata* LINNAEUS カタバミ

- |                         |  |         |          |
|-------------------------|--|---------|----------|
| <b>Rutaceae</b>         |  | ミカン科    |          |
| 210.                    | <i>Phellodendron amurense</i> RUPRECHT   |         | キワダ      |
| 211.                    | <i>Skimmia japonica</i> THUNBERG var. <i>intermedia</i> KOMATSU form. <i>repens</i> HARA |         | ツルシキミ    |
| 212.                    | <i>Zanthoxylum piperitum</i> A. P. DE CANDOLLE   |         | サンショウ    |
| <b>Daphniphyllaceae</b> |  | ユズリハ科   |          |
| 213.                    | <i>Daphniphyllum macropodum</i> MIQUEL subsp. <i>humile</i> IIURUSAWA                    |         | エゾユズリハ   |
| <b>Coriariaceae</b>     |  | ドクウツギ科  |          |
| 214.                    | <i>Coriaria japonica</i> A. GRAY   |         | ドクウツギ    |
| <b>Anacardiaceae</b>    |  | ウルシ科    |          |
| 215.                    | <i>Rhus ambigua</i> LAVALLÉE   |         | ツタウルシ    |
| 216.                    | <i>R. javanica</i> LINNAEUS  |         | スルデ      |
| 217.                    | <i>R. trichocarpa</i> MIQUEL   |         | ヤマウルシ    |
| <b>Aceraceae</b>        |  | カエデ科    |          |
| 218.                    | <i>Acer distylum</i> SIEBOLD et ZUCCARINI  |         | ヒトツバカエデ  |
| 219.                    | <i>A. japonicum</i> THUNBERG   |         | ハウチワカエデ  |
| 220.                    | <i>A. Mayri</i> GRAF V. SCHWERIN   |         | アカメイタヤ   |
| 221.                    | <i>A. micranthum</i> SIEBOLD et ZUCCARINI  |         | コミネカエデ   |
| 222.                    | <i>A. nipponicum</i> HARA  |         | テツカエデ    |
| 223.                    | <i>A. palmatum</i> THUNBERG subsp. <i>Matsumurae</i> KOIDUMI                             |         | ヤマモミジ    |
| 224.                    | <i>A. rufinerve</i> SIEBOLD et ZUCCARINI   |         | ウリハダカエデ  |
| 225.                    | <i>A. Sieboldianum</i> MIQUEL form. <i>microphyllum</i> HARA                             |         | コハウチワカエデ |
| 226.                    | <i>A. tenuifolium</i> KOIDZUMI   |         | ヒノウチワカエデ |
| 227.                    | <i>A. Tschonokii</i> MAXIMOWICZ  |         | ミネカエデ    |
| 228.                    | <i>A. ukurunduense</i> TRAUTVETTER et MEYER  |         | オガラバナ    |
| <b>Hippocastanaceae</b> |  | トチノキ科   |          |
| 229.                    | <i>Aesculus turbinata</i> BLUME var. <i>pubescens</i> REHDER                             |         | ケトチノキ    |
| <b>Sabiaceae</b>        |  | アワブキ科   |          |
| 230.                    | <i>Meliosma tenuis</i> MAXIMOWICZ  |         | ミヤマハウソ   |
| <b>Balsaminaceae</b>    |  | ツリフネソウ科 |          |
| 231.                    | <i>Impatiens Noli-tangere</i> LINNAEUS   |         | キツリフネ    |
| 232.                    | <i>I. Textori</i> MIQUEL   |         | ツリフネソウ   |
| <b>Aquifoliaceae</b>    |  | モチノキ科   |          |
| 233.                    | <i>Ilex crenata</i> THUNBERG var. <i>paludosa</i> HARA                                   |         | ハイイヌツゲ   |
| 234.                    | <i>I. leucoclada</i> MAKINO  |         | ヒメモチ     |
| 235.                    | <i>I. pedunculata</i> MIQUEL   |         | ソヨコ      |
| 236.                    | <i>I. rugosa</i> FR. SCHMIDT   |         | ツルツゲ     |
| 237.                    | <i>I. Sugeroki</i> MAXIMOWICZ subsp. <i>brevipedunculata</i> MAKINO                      |         | アカミノイヌツゲ |

**Celastraceae** ニシギキ科

238. *Celastrus orbiculatus* THUNBERG ツルウメモドキ  
 239. *Euonymus alatus* SIEBOLD form. *ciliato-dentatus* HIYAMA コナユミ  
 240. *E. fortunei* HANDEL-MAZZETTI var. *radicans* REHDER ツルマサキ  
 241. *E. macropterus* RUPRECHT ヒロハノツリバナ  
 242. *E. oxyphyllus* MIQUEL form. *magnus* HARA エソツリバナ  
 243. *Tripleyrium Regelii* SPRAGUE et TAKEDA クロヅル

**Rhamnaceae** クロウメモドキ科

244. *Berchemia longeracemosa* OKUYAMA ホナガクマヤナギ  
 245. *B. racemosa* SIEBOLD et ZUCCARINI クマヤナギ  
 246. *Rhamnus crenata* SIEBOLD et ZUCCARINI イソノキ

**Vitaceae** ブドウ科

247. *Ampelopsis brevipedunculata* TRAUTVETTER var. *heterophylla* HARA ノブドウ  
 248. *Vitis Coignetiae* PULLIAT ヤマブドウ  
 249. *V. flexuosa* THUNBERG サンカクズル

**Tiliaceae** シナノキ科

250. *Tilia japonica* SIMONKAI シナノキ  
 251. *T. Maximowicziana* SHIRASAWA オオバボダイジュ

**Ternstroemiaceae** ツバキ科

252. *Camellia rusticana* HONDA ヌキツバキ

**Actinidiaceae** マタタビ科

253. *Actinidia arguta* PLANCHON サルナシ  
 254. *A. Kolomikta* MAXIMOWICZ ミヤママタタビ  
 255. *A. polygama* PLANCHON マタタビ

**Hypericaceae** オトギリソウ科

256. *Hypericum erectum* THUNBERG オトギリソウ  
     *H. kamtschaticum* LEDEBOUR  
 257.           var. *hondoense* Y. KIMURA イワオトギリ  
 258.           var. *senanense* Y. KIMURA ミヤマオトギリ  
 259. *H. pseudopetiolum* R. KELLER サワオトギリ  
 260. *Sarothra laxa* Y. KIMURA コケオトギリ  
 261. *Triadenum japonicum* MAKINO ミズオトギリ

**Violaceae** スミレ科

262. *Viola brevistipulata* W. BECKER オオバキスミレ  
 263. *V. kusanoana* MAKINO オオタチツボスミレ  
 264. *V. mandshurica* W. BECKER スミレ  
 265. *V. rostrata* PURSH ナガハシスミレ  
 266. *V. vaginata* MAXIMOWICZ スミレサイシン  
 267. *V. verecunda* A. GRAY ツボスミレ

- |      |  |          |           |
|------|--|----------|-----------|
|      | <b>Stachyuraceae</b>   | キ ブ シ 科  |           |
| 268. | <i>Stachyurus praecox</i> SIEBOLD et ZUCCARINI                                 |          | キ ブ シ     |
|      | <b>Thymelaeaceae</b>   | ジンチョウゲ科  |           |
| 269. | <i>Daphne Miyabeana</i> MAKINO   |          | カラスジキミ    |
|      | <b>Elaeagnaceae</b>  | グ ミ 科    |           |
| 270. | <i>Elaeagnus umbellata</i> THUNBERG  |          | ア キ グ ミ   |
|      | <b>Onagraceae</b>  | アカバナ科    |           |
| 271. | <i>Chamaenerion angustifolium</i> SCOPOLI                                      |          | ヤナギラン     |
| 272. | <i>Circaea alpina</i> LINNAEUS   |          | ミヤマタニタデ   |
| 273. | <i>C. erubescens</i> FRANCHET et SAVATIER                                      |          | タニタデ      |
| 274. | <i>Epilobium cephalostigma</i> HAUSSKNECHT                                     |          | イワアカバナ    |
| 275. | <i>E. Hornemanni</i> REICHENBACH var. <i>Foucaudianum</i> HARA                 |          | ミヤマアカバナ   |
| 276. | <i>E. pyrriholophum</i> FRANCHET et SAVATIER                                   |          | アカバナ      |
|      | <b>Haloragaceae</b>  | アリノトウグサ科 |           |
| 277. | <i>Haloragis micrantha</i> R. BROWN  |          | アリノトウグサ   |
|      | <b>Alangiaceae</b>   | ウリノキ科    |           |
|      | <i>Marlea platanifolia</i> SIEBOLD et ZUCCARINI                                |          |           |
| 278. | var. <i>triloba</i> MIQUEL   |          | ウリノキ      |
| 279. | form. <i>velutina</i> HARA   |          | ビロウドウリノキ  |
|      | <b>Araliaceae</b>  | ウコギ科     |           |
| 280. | <i>Acanthopanax sciadophylloides</i> FRANCHET et SAVATIER                      |          | コシアブラ     |
| 281. | <i>Aralia cordata</i> THUNBERG   |          | ウド        |
| 282. | <i>A. elata</i> SEEMANN  |          | タラノキ      |
| 283. | <i>Panax japonicus</i> C. A. MEYER   |          | トチバニンジン   |
|      | <b>Apiaceae</b>  | セリ科      |           |
| 284. | <i>Angelica acutiloba</i> KITAGAWA   |          | トウキ       |
| 285. | <i>A. decursiva</i> FRANCHET et SAVATIER                                       |          | ノダケ       |
| 286. | <i>A. edulis</i> MIYABE  |          | アマニユウ     |
| 287. | <i>A. ibukiensis</i> MAKINO  |          | セリモドキ     |
| 288. | <i>A. iwatensis</i> KITAGAWA   |          | ミヤマトウキ    |
| 289. | <i>A. Matsumurae</i> YABE var. <i>glabra</i> KOIDZUMI                          |          | ケナシミヤマシウド |
| 290. | <i>A. polymorpha</i> MAXIMOWICZ  |          | シラネセンキュウ  |
| 291. | <i>Anthriscus sylvestris</i> HOFFMANN subsp. <i>nemorosa</i> KOSO-POLJANSKY    |          | シヤク       |
| 292. | <i>Eupleurum longeradiatum</i> TURCZANINOW form. <i>elatius</i> KOSO-POLJANSKY |          | ホタルサイコ    |
| 293. | <i>Cryptotaenia canadensis</i> DE CANDOLLE                                     |          | ミツバ       |
| 294. | <i>Hydrocotyle maritima</i> HONDA  |          | ノチドメ      |
| 295. | <i>Oenanthe javanica</i> A. P. DE CANDOLLE                                     |          | セリ        |
| 296. | <i>Osmorhiza aristata</i> MAKINO et YABE                                       |          | ヤブニンジン    |
| 297. | <i>Peucedanum multivittatum</i> MAXIMOWICZ                                     |          | ハクサンボウフウ  |
| 298. | <i>Pleurospermum austriacum</i> HOFFMANN subsp. <i>uralense</i> SOMMIER        |          | オオカサモチ    |

299. *Sanicula chinensis* BUNGE ウマノミツバ  
 300. *Tilingia ajanensis* REGEL シラネニンジン  
 301. *T. holopetala* KITAGAWA イブキゼリ  
 302. *Torilis japonica* A. P. DE CANDOLLE ヤブシラミ

**Cornaceae** ミズキ科

303. *Aucuba japonica* THUNBERG var. *borealis* MIYABE et KUDO ヒメアオキ  
 304. *Benthamidia japonica* HARA ヤマボウシ  
 305. *Chamaepericlymenum canadense* ASCHERSON et GRAEBNER ゴゼンタチバナ  
 306. *Cornus controversa* HEMSLEY ミズキ  
 307. *Helwingia japonica* F. G. DIETRICH ハナイカダ

**METACHLAMYDEAE** 後生花被植物亜綱

**Pyrolaceae** イチヤクソウ科

308. *Chimaphila japonica* MIQUEL ウメガサソウ  
 309. *Manotropastrum globosum* H. ANDRES マルミギンリョウソウ  
 310. *Pyrola alpina* H. ANDRES コバノイチヤクソウ  
 311. *P. asarifolia* MICHAUX var. *purpurea* FERNALD ベニバナイチヤクソウ

**Empetraceae** ガンコウラン科

312. *Empetrum nigrum* LINNAEUS var. *japonicum* K. KOCH ガンコウラン

**Clethraceae** リョウブ科

313. *Clethra barbinervis* SIEBOLD et ZUCCARINI リョウブ

**Ericaceae** ツツジ科

314. *Andromeda polifolia* LINNAEUS ヒメシキクナゲ  
 315. *Arctericia nana* MAKINO コメバツガザクラ  
 316. *Epigaea asiatica* MAXIMOWICZ イワナシ  
*Eubotryoides Grayana* HARA  
 317. var. *glaucina* HARA ウラジロハナヒリノキ  
 318. var. *oblongifolia* HARA ハナヒリノキ  
 319. *Gaultheria adenostrix* MAXIMOWICZ アカモノ  
 320. *G. hispidula* BIGELOW var. *japonica* MAKINO ハリガネカズラ  
 321. *G. Miqueliana* TAKEDA シラタマノキ  
 322. *Hugeria japonica* NAKAI アクシバ  
 323. *Loiseleuria procumbens* DESVAUX ミネズオウ  
 324. *Menziesia ciliicalyx* MAXIMOWICZ var. *multiflora* MAKINO ウラジロヨウラク  
 325. *M. pentandra* MAXIMOWICZ コヨウラクツツジ  
 326. *Oxycoccus quadripetalus* GILIBERT ツルユケモモ  
 327. *Phyllodoce nipponica* MAKINO ツガザクラ  
 328. *Rhododendron Albrechti* MAXIMOWICZ ムラサキヤシオツツジ  
 329. *R. Degronianum* CARRIÈRE アズマシキクナゲ  
 330. *R. Fauriae* FRANCHET ハクサンシキクナゲ  
 331. *R. japonicum* SURINGAR レンゲツツジ



332. *R. Kaempferi* PLANCHON ヤ マ ツ ツ シ  
 333. *R. nipponicum* MATSUMURA オ オ バ ツ ツ ジ  
 334. *R. Tschonoskii* MAXIMOWICZ コ メ ツ ツ シ  
 335. *R. Wadanum* MAKINO トウゴクミツバツツジ  
 336. *Tripetaleia bracteata* MAXIMOWICZ ミヤマホツツジ  
 337. *T. paniculata* SIEBOLD et ZUCCARINI var. *latifolia* MAXIMOWICZ ホ ツ ツ シ  
 338. *Tritomodon campanulatus* F. MAEKAWA var. *Palibini* HARA ベニサラサドウダン  
 339. *T. subsessilis* F. MAEKAWA アブラツツジ  
 340. *Vaccinium Oldhami* MIQUEL ナ ツ ハ ゼ  
     *V. ovalifolium* SMITH  
 341.           var. *membranaceum* BOISSIEU クロウスコ  
 342.           var. *shikokianum* HARA マルバウスゴ  
 343. *V. Smallii* A. GRAY オオバスノキ  
 344. *V. uliginosum* LINNAEUS クロマメノキ  
 345. *V. Usunoki* NAKAI ウスノキ  
 346. *V. Vitis Idaea* LINNAEUS var. *minus* LODDIGES コケモモ  
 347. *V. Yatabei* MAKINO ヒメウスノキ

**Diapensiaceae**           イワウメ科

348. *Schizocodon ilicifolius* MAXIMOWICZ ヒメイワカガミ  
 349. *S. soldanelloides* SIEBOLD et ZUCCARINI イワカガミ  
 350. *Shortia uniflora* MAXIMOWICZ イワウチウ

**Myrsinaceae**           ヤブコウジ科

351. *Bladhia japonica* HORNSTEDT ヤブコウジ

**Primulaceae**           サクラソウ科

352. *Lysimachia chlethroides* DUBY オカトラノオ  
 353. *L. Fortunei* MAXIMOWICZ スマトラノオ  
 354. *L. japonica* THUNBERG var. *subsessilis* F. MAEKAWA コナスビ  
 355. *Primula hakusanensis* FRANCHET ハクサンコザクラ  
 356. *Trientalis europaea* LINNAEUS ツマトリソウ

**Symplocaceae**           ハイノキ科

357. *Palura chinensis* KOIDZUMI form. *pilosa* HARA サワフタギ

**Styracaceae**           エゴノキ科

358. *Styrax japonicus* SIEBOLD et ZUCCARINI エゴノキ  
 359. *S. Obassia* SIEBOLD et ZUCCARINI ハクウンボク

**Oleaceae**               モクセイ科

360. *Fraxinus lanuginosa* KOIDZUMI var. *serrata* HARA コバノトネリコ  
 361. *F. longicuspis* SIEBOLD et ZUCCARINI ヤマトアオダモ  
 362. *F. Sieboldiana* BLUME マルバアオダモ  
 363. *Ligustrum Tschonoskii* DECAISNE ミヤマイボタ

**Gentianaceae**           リンドウ科

364. *Fauria crista-galli* MAKINO イワイチュウ

- |                             |  |           |
|-----------------------------|--|-----------|
| 365.                        | <i>Gentiana Makinoi</i> KUSNEZOW   | オヤマリンドウ   |
| 366.                        | <i>G. Thunbergii</i> GRISEBACH var. <i>minor</i> MAXIMOWICZ  | タテヤマリンドウ  |
| 367.                        | <i>G. Zollingerii</i> FAWCETT  | フデリンドウ    |
| 368.                        | <i>Halenia corniculata</i> CORNAZ  | ハナイカリ     |
| 369.                        | <i>Menyanthes trifoliata</i> LINNAEUS  | ミツガシウ     |
| 370.                        | <i>Tripterospermum japonicum</i> MAXIMOWICZ  | ツルリンドウ    |
| <b>Asclepiadaceae</b> ガガイモ科 |  |           |
| 371.                        | <i>Cynanchum caudatum</i> MAXIMOWICZ   | イケマ       |
| 372.                        | <i>C. macranthum</i> NAKAI   | シロバナカモメズル |
| 373.                        | <i>C. paniculatum</i> KITAGAWA   | スズサイコ     |
| 374.                        | <i>Metaplexis japonica</i> MAKINO  | ガガイモ      |
| <b>Convolvulaceae</b> ヒルガオ科 |  |           |
| 375.                        | <i>Calystegia japonica</i> CHOISY  | ヒルガオ      |
| <b>Cuscutaceae</b> ネナシカズラ科  |  |           |
| 376.                        | <i>Cuscuta japonica</i> CHOISY   | ネナシカズラ    |
| <b>Solanaceae</b> ナス科       |  |           |
| 377.                        | <i>Solanum lyratum</i> THUNBERG  | ヒヨドリジュウゴ  |
| <b>Boraginaceae</b> ムラサキ科   |  |           |
| 378.                        | <i>Trigonotis brevipes</i> MAXIMOWICZ  | ミズタバコ     |
| <b>Verbenaceae</b> クマツヅラ科   |  |           |
| 379.                        | <i>Callicarpa japonica</i> THUNBERG  | ムラサキキンギブ  |
| 380.                        | <i>Clerodendrum trichotomum</i> THUNBERG   | クサギ       |
| <b>Lamiaceae</b> シソ科        |  |           |
| 381.                        | <i>Chelonopsis moschata</i> MIQUEL   | ジャコウソウ    |
| 382.                        | <i>Clinopodium chinense</i> O. KUNTZE subsp. <i>grandiflorum</i> HARA var. <i>perviflorum</i> HARA | クルマバナ     |
| 383.                        | <i>C. confine</i> O. KUNTZE  | トウバナ      |
| 384.                        | <i>C. micranthum</i> HARA  | イヌトウバナ    |
| 385.                        | <i>C. sachalinense</i> KOIDZUMI  | ミヤマトウバナ   |
| 386.                        | <i>Glechoma hederacea</i> LINNAEUS subsp. <i>grandis</i> HARA                                      | カキドオシ     |
| 387.                        | <i>Isodon excisiflexus</i> (NAKAI) HONDA   | タイリンヤマハツカ |
| 388.                        | <i>I. Kameba</i> OKUYAMA   | カメバヒキオコン  |
| 389.                        | <i>I. trichocarpus</i> KUDO  | クロバナヒキオコン |
| 390.                        | <i>Lycopus lucidus</i> TURCZANINOW   | シロネ       |
| 391.                        | <i>Mosea punctulata</i> NAKAI  | イヌコウジュ    |
| 392.                        | <i>Prunella prunelliformis</i> MAKINO  | タテヤマウツボグサ |
| 393.                        | <i>P. vulgaris</i> LINNAEUS subsp. <i>asiatica</i> HARA  | ウツボグサ     |
| 394.                        | <i>Salvia nipponica</i> MIQUEL   | キバナアキギリ   |
| 395.                        | <i>Stachys japonica</i> MIQUEL var. <i>intermedia</i> OHWI   | イヌゴマ      |

- Scrophulariaceae**      ゴマノハグサ科
396. *Euphrasia insignis* WETTSTEIN var. *japonica* OHWI      ホソバコゴメグサ  
 397. *Mazus japonicus* O. KUNTZE      トキリハゼ  
 398. *M. Miquelii* MAKINO      ムラサキサギゴケ  
 399. *Melampyrum laxum* MIQUEL var. *nikkoense* BEAUVERD      ミヤマママコナ  
 400. *Mimulus inflatus* NAKAI      ミゾホオズキ  
 401. *M. sessilifolius* MAXIMOWICZ      オオバミゾホオズキ  
 402. *Pedicularis nipponica* MAKINO      オニシオガマ  
 403. *P. resupinata* LINNAEUS      シオガマギク  
 404.      var. *caespitosa* KOIDZUMI      トモエンオガマ  
 405. *P. yezoensis* MAXIMOWICZ      エゾシオガマ  
 406. *Phtheirospermum japonicum* KANITZ      コシオガマ  
 407. *Veronica japonensis* MAKINO      ヤマトワガタ  
 408. *Veronicastrum sibiricum* PENNELL var. *japonicum* HARA      クガイソウ
- Phrymaceae**      ハエドクソウ科
409. *Phryma leptostachya* LINNAEUS var. *oblongifolia* HONDA      ハエドクソウ
- Plantaginaceae**      オオバコ科
410. *Plantago asiatica* LINNAEUS      オオバコ
- Rubiaceae**      アカネ科
411. *Galium kamschaticum* STELLER var. *acutifolium* HARA      オオバノヨツバムグラ  
 412. *G. pogonanthum* FRANCHET et SAVATIER      ヤマムグラ  
 413. *G. spurium* LINNAEUS var. *echinospermon* HAYEK      ヤエムグラ  
 414. *G. trifloriforme* KOMAROV      オククルマムグラ  
 415. *Hedyotis Lindleyana* HOOKER var. *hirsuta* HARA      ハシカグサ  
 416. *Mitchella repens* LINNAEUS subsp. *undulata* HARA      ツルアリドオン  
 417. *Paederia scandens* MERRILL var. *Mairei* HARA      ヘクソカズラ  
 418. *Rubia Akane* NAKAI      アカネ  
 419. *R. chinensis* REGEL et MAACK var. *glabrescens* KITAGAWA      オオキヌタソウ
- Caprifoliaceae**      スイカズラ科
420. *Abelia spathulata* SIEBOLD et ZUCCARINI var. *stenophylla* HONDA      ウゴツクバネウツギ  
 421. *Linnaea borealis* LINNAEUS      リンネソウ  
 422. *L. japonica* THUNBERG      スイカズラ  
 423. *Sambucus racemosa* LANNAEUSc subsp. *Sieboldiana* HARA      ニワトコ  
 424. *Viburnum dilatatum* THUNBERG      ガマズミ  
 425. *V. furcatum* BLUME      オオカメノキ  
 426. *V. plicatum* THUNBERG var. *glabrum* HARA      ケナシヤブデマリ  
 427. *V. urceolatum* SIEBOLD et ZUCCARINI var. *procumbens* NAKAI      ミヤマシグレ  
 428. *Weigela hortensis* K.KOCH      タニウツギ
- Valerianaceae**      オミナエシ科
429. *Patrinia scabiosaefolia* FISCHER      オミナエシ  
 430. *P. triloba* MIQUEL      コキンレイカ

431. *P. villosa* JUSSIEU オ ト コ エ シ
- Cucurbitaceae**      ウ   リ   科
432. *Melothria japonica* MAXIMOWICZ スズメウリ
433. *Schizopepon bryoniaefolius* MAXIMOWICZ ミヤマニガウリ
- Campanulaceae**      キキョウ科
434. *Adenophora nikoensis* FRANCHET et SAVATIER ヒメシャジン
435.            form. *nipponica* HARA ミヤマシャジン
436. *A. remotiflora* MIQUEL ソ      パ      ナ
437. *A. triphylla* A. DE CANDOLLE var. *japonica* HARA ツリガネニンジン
438. *Campanula hondoensis* KITAMURA ヤマホタルブクロ
439. *C. punctata* LAMARCK ホタルブクロ
440. *Peracarpa carnosus* HOOKER, f. et THOMSON var. *circaeoides* MAKINO タニギキョウ
- Carduaceae**      キ   ク   科
441. *Adenocaulon himalaicum* EDGEWORTH ノ      ブ      キ
442. *Ainsliaea acerifolia* SCHULTZ-BIPONTINUS モミジハグマ
443. *A. apiculata* SCHULTZ-BIPONTINUS キッコウハグマ
- Anaphalis margaritacea* BENTHAM et. HOOKER, f.
444.            var. *angustior* NAKAI ヤマハハコ
445.            var. *yedoensis* OHWI カワラハハコ
446. *Arnica Mallatopus* MAKINO チウジギク
447. *Artemisia japonica* THUNBERG オトコヨモギ
448. *A. monophylla* KITAMURA ヒトツバヨモギ
449. *A. montana* PAMPANINI オオヨモギ
450. *A. princeps* PAMPANINI ヨ      モ      ギ
451. *Aster Glehni* FR. SCHMIDT var. *hondoensis* KITAMURA ゴ      マ      ナ
452. *Cacalia adenostyloides* MATSUMURA カニコウモリ
453. *C. delphinifolia* SIEBOLD et ZUCCARINI モミジガサ
454. *C. farfaraefolia* SIEBOLD et ZUCCARINI ウスゲタマブキ
455. *C. hastata* LINNAEUS var. *Tanakae* KITAMURA イ      ス      ト      オ      ナ
456. *C. nikomontana* MATSUMURA オオカニコウモリ
457. *Carpesium cernuum* LINNAEUS コヤブタバコ
458. *C. glossophyllum* MAXIMOWICZ サジガンクビソウ
459. *C. Koidzumii* MAKINO var. *Matsuei* HARA ノッポロガンクビソウ
460. *Centipeda minima* A. BRAUN et ASCHERSON ト      キ      ソ      ウ
461. *Chrysanthemum rupestre* MATSUMURA et KOIDZUMI イ      ワ      イ      ソ      ン      チ      ン
462. *Cirsium japonicum* A. P. DE CANDOLLE ノ      ア      ザ      ミ
463. *C. nipponense* KOIDZUMI オ      ニ      ア      ザ      ミ
464. *C. nipponicum* MAKINO ナ      ン      プ      ア      ザ      ミ
465. *Erigeron canadensis* LINNAEUS ヒ      メ      ム      カ      シ      ヨ      モ      ギ
- Eupatorium chinense* LINNAEUS
466.            var. *simplicifolium* KITAMURA ヒ      ヨ      ド      リ      バ      ナ
467.            subsp. *sachalinense* KITAMURA ヨ      ツ      バ      ヒ      ヨ      ド      リ

468.	<i>Gnaphalium affine</i> D. DON	ハ ハ コ グ サ
469.	<i>G. japonicum</i> THUNBERG	チ チ コ グ サ
470.	<i>Hieracium japonicum</i> FRANCHET et SAVATIER	ミ ヤ マ コ ウ ズ リ ナ
471.	<i>Inula britannica</i> LINNAEUS var. <i>chinensis</i> REGEL	オ グ ル マ
472.	<i>Ixeris dentata</i> NAKAI	ニ ガ ナ
473.	<i>I. japonica</i> NAKAI	オ オ ジ シ バ リ
474.	<i>I. stolonifera</i> A. GRAY	ジ シ バ リ
475.	<i>Kalimeris pinnatifida</i> KITAMURA	ユ ウ ガ ギ ク
476.	<i>Lactuca indica</i> LINNAEUS var. <i>laciniata</i> HARA	ア キ ノ ノ ゲ シ
477.	<i>Leontopodium japonicum</i> MIQUEL	ウ ス ム キ ソ ウ
478.	<i>Ligularia dentata</i> HARA	マ ル バ ダ ケ ツ キ
479.	<i>L. Fischeri</i> TURCZANINOW	オ タ カ ラ コ ウ
480.	<i>L. stenocephala</i> MATSUMURA et KOIDZUMI	メ タ カ ラ コ ウ
481.	<i>Petasites japonicus</i> MAXIMOWICZ	フ キ
482.	<i>Picris hieracioides</i> LINNAEUS subsp. <i>japonica</i> KRYLOV	コ ウ ズ リ ナ
483.	<i>Prenanthes acerifolia</i> MATSUMURA	フ タ オ ウ ソ ウ
484.	<i>Saussurea nikoensis</i> FRANCHET et SAVATIER	シ ラ ネ ア ザ ミ
485.	<i>Senecio nemorensis</i> LINNAEUS subsp. <i>Fuchsii</i> DURAND	キ オ シ
486.	<i>S. nikoensis</i> MIQUEL	サ リ ギ ク
487.	<i>Solidago Virga-aurea</i> LINNAEUS subsp. <i>leiocarpa</i> HULTÉN	ミ ヤ マ ア キ ノ キ リ ソ ウ
488.	<i>Sonchus oleraceus</i> LINNAEUS	ノ ゲ シ
489.	<i>Syneilesis palmata</i> MAXIMOWICZ	ヤ ブ レ ガ サ
490.	<i>Synurus pungens</i> KITAMURA	オ ヤ マ ボ ク チ
491.	<i>Taraxacum hondoense</i> NAKAI	エ ズ タ シ ホ ボ
492.	<i>Youngia denticulata</i> KITAMURA	ヤ ク シ ソ ウ
493.	<i>Y. japonica</i> A. P. DE CANDOLLE	オ ニ タ ビ ラ コ

**MONOCOTYLEDONEAE 単子葉植物綱**

**Bambusaceae タ ケ 科**

494.	<i>Sasa kurilensis</i> MAKINO et SHIBATA	チ シ マ ザ サ
495.	<i>S. palmata</i> NAKAI	チ マ キ ザ サ
496.	<i>S. Senanensis</i> REHDER	ク マ イ ザ サ

**Poaceae イ ネ 科**

497.	<i>Agropyron ciliare</i> FRANCHET var. <i>minus</i> OHWI	ア オ カ モ ジ グ サ
498.	<i>A. Isukushiense</i> OHWI var. <i>transiens</i> OHWI	カ モ ジ グ サ
499.	<i>Agrostis borealis</i> HARTMANN	コ ミ ヤ マ ス カ ボ
500.	<i>A. clavata</i> TRINIUS	ヤ マ ス カ ボ
501.	<i>A. flaccida</i> HACKEL	ミ ヤ マ ス カ ボ
502.	<i>Andropogon brevifolius</i> SWARTZ	ウ シ タ サ
503.	<i>Arthraxon hispidus</i> MAKINO form. <i>japonicus</i> OHWI	コ ブ ナ グ サ
504.	<i>Arundinella hirta</i> TANAKA	ト ダ シ バ
505.	<i>Brachypodium sylvaticum</i> BEAUVOIS	エ ズ ヤ マ カ モ ジ グ サ
506.	<i>Calamagrostis arundinacea</i> ROTH var. <i>brachytricha</i> HACKEL	サ イ ト ウ ガ ヤ

507.	<i>C. Epigeios</i>	ROTH	ヤ	マ	ア	ワ
508.	<i>C. Fauriei</i>	HACK	カ	ニ	ツ	リ
509.	<i>C. hahonensis</i>	FRANCHET et SAVATIER	ヒ	メ	ノ	ガ
510.	<i>C. Langsdorfii</i>	TRINIUS	イ	ウ	ノ	ガ
511.	<i>C. longiseta</i>	HACKEL	ヒ	ゲ	ノ	ガ
512.	<i>C. pseudo-Phragmites</i>	KOELER	ホ	ツ	ス	ガ
513.	<i>Digitaria adscendens</i>	HENRARD	メ	ヒ	ジ	ワ
514.	<i>Eleusine indica</i>	GAERTNER	オ	ヒ	ジ	ワ
515.	<i>Eragrostis ferruginea</i>	BEAUVOIS	カ	ゼ	ク	サ
516.	<i>Festuca parvigluma</i>	STEUDEL	ト	ボ	シ	ガ
517.	<i>Glyceria ischyronoura</i>	STEUDEL	ド	ジ	ウ	ツ
518.	<i>Hakonechloa macra</i>	MAKINO	ウ	ラ	ハ	グ
519.	<i>Hemarthria sibirica</i>	OHWI	ウ	シ	ノ	シ
520.	<i>Imperata cylindrica</i>	BEAUVOIS var. <i>Koenigii</i>	チ	ガ	ヤ	
521.	<i>Isachne globosa</i>	O. KUNTZE	チ	ゴ	ザ	サ
522.	<i>Miscanthus sinensis</i>	ANDERSSON	ス	ス	キ	
523.	<i>Moliniopsis japonica</i>	HAYATA	ス	マ	ガ	ヤ
524.	<i>Oplismenus japonicus</i>	HONDA	コ	チ	ヂ	ミ
525.	<i>O. undulatifolius</i>	ROEMER et SCHULES	チ	ヂ	ミ	ザ
526.	<i>Pennisetum alopecuroides</i>	SPRENGEL	チ	カ	ラ	シ
527.	<i>Phalaris arundinacea</i>	LINNAEUS	ク	サ	ヨ	シ
528.	<i>Poa annua</i>	LINNAEUS	ス	ズ	メ	ノ
529.	<i>P. pratensis</i>	LINNAEUS	ナ	ガ	ハ	グ
530.	<i>P. sphondylodes</i>	TRINIUS	イ	チ	ゴ	ツ
531.	<i>Sacciolepis oryzetora</i>	HONDA	ス	メ	リ	グ
532.	<i>Setaria pumila</i>	ROEMER et SCHULTES	キ	ン	エ	ノ
533.	<i>S. viridis</i>	BEAUVOIS	エ	ノ	コ	ロ
534.	form. <i>misera</i>	HONDA	ム	ラ	サ	キ
535.	<i>Zoysia japonica</i>	STEUDEL	シ			バ

## Cyperaceae

## カヤツリグサ科

536.	<i>Carex albata</i>	BOOTT	ミ	ノ	ボ	ロ
537.	<i>C. aphyllopus</i>	KUEKENTHAL	タ	テ	ヤ	マ
538.	<i>C. biwensis</i>	FRANCHET	マ	ツ	バ	ス
539.	<i>C. blcpharicarpa</i>	FRANCHET var. <i>dueensis</i>	タ	カ	ネ	シ
540.	<i>C. confertiflora</i>	BOOTT	ミ	ヤ	マ	シ
541.	<i>C. conica</i>	BOOTT	ヒ	メ	カ	ン
542.	<i>C. flavocuspis</i>	FRANCHET et SAVATIER	ミ	ヤ	マ	ク
543.	<i>C. hahonensis</i>	FRANCHET et SAVATIER	コ	ハ	リ	ス
544.	<i>C. hondoensis</i>	OHWI	ア	イ	ズ	ス
545.	<i>C. insanae</i>	KOIDZUMI	ヒ	ロ	バ	ス
546.	<i>C. ischnostachya</i>	STEUDEL	ジ	ュ	ズ	ス
547.	<i>C. jacens</i>	C. B. CLARKE	ハ	ガ	ク	レ
548.	<i>C. japonica</i>	THUNBERG	ヒ	ゴ	ク	サ



549.	<i>C. kiotensis</i>	FRANCHET et SAVATIER	テキリスゲ
550.	<i>C. lanceolata</i>	BOOTT	ヒカゲスゲ
551.	<i>C. leucochlora</i>	BUNGE	アオスゲ
552.	<i>C. limosa</i>	LINNAEUS	ヤチスゲ
553.	<i>C. macroglossa</i>	FRANCHET et SAVATIER	コジュズスゲ
554.	<i>C. Michauxiana</i>	BOECKELER var. <i>asiatica</i> OHWI	ミクケスゲ
555.	<i>C. Middendorffii</i>	FR. SCHMIDT	ホロムイスゲ
556.	<i>C. mollicula</i>	BOOTT	ヒメシラスゲ
557.	<i>C. multifolia</i>	OHWI	ミヤマカンスゲ
558.	<i>C. omiana</i>	FRANCHET et SAVATIER	ヤチカリズスゲ
559.	var. <i>monticola</i>	OHWI	カリズスゲ
560.	<i>C. Onoei</i>	FRANCHET et SAVATIER	ハリスゲ
561.	<i>C. paupercula</i>	MICHAUX	ダケスゲ
562.	<i>C. phacota</i>	SPRENGEL var. <i>gracilispica</i> KUEKENTHAL	ヒメゴウソ
563.	<i>C. podogyna</i>	FRANCHET et SAVATIER	クスキラ
564.	<i>C. sadoensis</i>	FRANCHET	サドスゲ
565.	<i>C. shimidzensis</i>	FRANCHET	アズマナルコ
566.	<i>C. siderostita</i>	HANCE	タガネソウ
567.	<i>C. Thunbergii</i>	STEUDEL	アゼスゲ
568.	<i>Cyperus amuricus</i>	MAXIMOWICZ	チャガツリ
569.	<i>C. brevifolius</i>	HASSKARL var. <i>leirolepis</i> T. KOYAMA	ヒメクグ
570.	<i>C. globosus</i>	ALLIONI	アビガヤツリ
571.	<i>C. Iria</i>	LINNAEUS	コゴメガヤツリ
572.	<i>C. microiria</i>	STEUDEL	カヤツリグサ
573.	<i>C. orthostachyus</i>	FRANCHET et SAVATIER	ウシクグ
574.	<i>C. sanguinolentus</i>	VAHL	カワラスガサ
575.	<i>Eleocharis acicularis</i>	ROEMER et SCHULTES var. <i>longiseta</i> SVENSON	マツペイ
576.	<i>E. pellucida</i>	PRESL	ハリイ
577.	<i>E. Wichurai</i>	BOECKELER	シカクイ
578.	<i>Eriophorum Fauriei</i>	E. G. CAMUS	ワタスゲ
579.	<i>E. gracile</i>	KOCH	サギスゲ
580.	<i>Fimbristylis subbispicata</i>	NEES et MEYEN	ヤマイ
581.	<i>Rhynchospora alba</i>	VAHL	ミカズキグサ
582.	<i>R. Yasudana</i>	MAKINO	ミヤマイスノハナヒゲ
583.	<i>Scirpus caespitosus</i>	LINNAEUS	ミネハリイ
584.	<i>S. hondoensis</i>	OHWI	ミヤマホタルイ
585.	<i>S. juncooides</i>	ROXBURGH	ホタルイ
586.	<i>S. Wichurai</i>	BOECKELER	アイバソウ

Araceae

サトイモ科

587.	<i>Arisaema angustatum</i>	FRANCHET et SAVATIER var. <i>peninsulae</i> NAKAI	コウライテンナンショウ
588.	<i>Flagellarisaema</i>	<i>Urashima</i> NAKAI	ウラシマソウ
589.	<i>Pinellia ternata</i>	BREITENBACH	カラスビシヤク

**Juncaceae**

## イグサ科

590. *Juncus beringensis* BUCHENAU ミヤマイ  
 591. *J. decipiens* NAKAI var. *gracilis* NAKAI ヒメイ  
 592. *J. filiformis* LINNAEUS エゾホソイ  
 593. *J. Leschenaultii* GAY コウガイセギショウ  
 594. *Luzula capitata* MIQUEL スズメノヤリ  
 595. *L. multiflora* LÉJEUNE ヤマスズメノヒエ  
 596. *L. oligantha* G. SAMUELSSON タカネスズメノヒエ  
 597. *L. plumosa* E. MEYER var. *macrocarpa* OHWI スカボシソウ

**Melanthaceae**

## シュロソウ科

598. *Tofieldia japonica* MIQUEL イワシュウブ  
 599. *Tricyrtis latifolia* MAXIMOWICZ タマガワホトギス  
 600. *Veratrum longibracteatum* TAKEDA タカネアオヤギソウ  
 V. *Maackii* REGEL  
 601. var. *parviflorum* HARA アオヤギソウ  
 602. var. *Reymondianum* HARA シュロソウ  
 603. V. *stamineum* MAXIMOWICZ var. *lasiophyllum* NAKAI ウラゲコバイケイ

**Asphodelaceae**

## ツルボラン科

604. *Aletris foliata* BUREAU et FRANCHET ネバリノギラン  
 605. *Heloniopsis orientalis* TANAKA シュウジョウバカマ  
 606. *Hemerocallis Middendorfii* TRAUTVETTER et MEYER var. *esculenta* OHWI  
 ニッコウキスゲ  
 607. *Hosta montana* F. MAEKAWA オオバギボウシ  
 608. *Metanartheicum luteo-viride* MAXIMOWICZ ノギラン  
 609. *Nartheicum asiaticum* MAXIMOWICZ キンコウカ

**Alliaceae**

## ネギ科

610. *Allium Schoenoprasum* LINNAEUS var. *foliosum* REGEL アサツキ

**Liliaceae**

## ユリ科

611. *Lilium auratum* LINDLEY ヤマユリ  
 612. *L. Leichtlinii* J. D. HOOKER var. *tigrinum* NICHOLSON コオニユリ  
 613. *L. medeoloides* A. GRAY クルマユリ

**Convallariaceae**

## スズラン科

614. *Clintonia undensis* TRAUTVETTER et MEYER ツバメオモト  
 615. *Disporum smilacinum* A. GRAY チゴユリ  
 616. *Majanthemum dilatatum* NELSON et MACBRIDE var. *nipponicum* HIYAMA  
 マイズルソウ  
 617. *Polygonatum falcatum* A. GRAY ナルコユリ  
 618. *Smilacina hirta* MAXIMOWICZ オオバユキザサ  
 619. *S. japonica* A. GRAY ユキザサ  
 620. *S. yesoensis* FRANCET et SAVATIER ヒロハユキザサ  
 621. *Streptopus amplexifolius* A. P. DE CANDOLLE var. *papillatus* OHWI オオバタケツマラン

622.	<i>S. streptopoides</i> FRYE et RIGG var. <i>japonicus</i> FASSETT	タケシマラン
	<b>Trilliaceae</b> エンレイソウ科	
623.	<i>Kinugasa japonica</i> TATEWAKI et SUTO	キヌガサソウ
624.	<i>Paris tetraphylla</i> A. GRAY	ツクバネソウ
625.	<i>Trillium Smallii</i> MAXIMOWICZ	エンレイソウ
	<b>Smilacaceae</b> サルトリイバラ科	
626.	<i>Smilax China</i> LINNAEUS	サルトリイバラ
627.	<i>S. higoensis</i> MIQUEL var. <i>Maximowiczii</i> KITAGAWA	シ オ デ
	<b>Dioscoreaceae</b> ヤマノイモ科	
628.	<i>Dioscorea septemloba</i> THUNBERG	キクバドコロ
	<b>Iridaceae</b> アヤメ科	
629.	<i>Iris gracilipes</i> A. GRAY	ヒメシヤガ
	<b>Orchidaceae</b> ラン科	
630.	<i>Cephalanthera longibracteata</i> BLUME	ササバギンラン
631.	<i>Chondradenia Fauriei</i> T. SAWADA	オノエラン
632.	<i>Cymbidium virescens</i> LINDLEY	シュンラン
633.	<i>Eleorchis japonica</i> F. MAEKAWA	サワラン
634.	<i>Ephippianthus Schmidtii</i> REICHENBACH, f.	コイチョウラン
635.	<i>Epipactis Thunbergii</i> A. GRAY	カキラン
636.	<i>Gastrodia elata</i> BLUME	オキノヤガラ
637.	<i>Goodyera Schlechtendaliana</i> REICHENBACH, f.	ミヤマウズラ
638.	<i>Liparis Kramerii</i> FRANCHET et SAVATIER	ジガバチソウ
639.	<i>L. Kumokiri</i> F. MAEKAWA	クモキリソウ
640.	<i>Myrmechis japonica</i> ROLFE	アリドオシラン
641.	<i>Neolindleya camtschatica</i> NEVSKI	ノビネチドリ
642.	<i>Orchis aristata</i> FISCHER var. <i>immaculata</i> MAKINO	ハクサンチドリ
643.	<i>Platanthera Florenti</i> FRANCHET et SAVATIER	ジンバイソウ
644.	<i>P. minor</i> REICHENBACH, f.	オオバノトンボソウ
645.	<i>P. ophrydioides</i> FR. SCHMIDT	キノチドリ
646.	<i>P. sachalinensis</i> FR. SCHMIDT	オオヤマサギソウ
647.	<i>P. lipuloides</i> LINDLEY	ホソバノキノチドリ
648.	<i>Pogonia japonica</i> REICHENBACH, f.	トキソウ
649.	<i>Spiranthes sinensis</i> AMES	ネジバナ

- 注. 1. 番号は整理番号  
2. 学名は本田正次(1963)「日本植物名鑑」による。



# 屋久島のアマミナナフシ

樋 熊 清 治

(長岡市立科学博物館昆虫研究室)

Notes on a male specimen of the walking-stick,  
*Entoria amamensis* YASUMATSU, from Yakushima Island

By

Seiji HIGUMA

## はじめに

わが国に分布するナナフシ類は、これまでに24種が知られており、そのうち1種はまだ命名されていない(樋熊, 1973)。これらの種のうち、安松(1965)は、奄美大島から得て命名したアマミナナフシ (*Entoria amamensis* Yasumatsu, 1965) について、生態上の知見をかなり詳しく報告した。しかし、種の外部形態については、雌雄各1個体の標本を原色写真図版をもって示したほか、極めて簡潔な記載を行っただけである。また、その分布について、奄美大島以外の産地は具体的に報告していない。

筆者は、今回、屋久島から初めて採集されたアマミナナフシの雄1個体を入手した。この個体を、九州大学農学部昆虫学教室に所蔵されているアマミナナフシのタイプ標本と照合した結果、外部形態の特徴に若干の新知見が得られた。また、同教室に所蔵されている未発表の資料をも検することができたので、本種の分布域はいっそう明確になった。

本報をまとめるにあたり、標本を当博物館に寄贈し研究をゆだねられた石塚健一氏、所蔵標本の間覧を許可され多大な便宜をいただいた九州大学農学部平嶋義宏教授、同学部榎原寛氏に厚く謝意を表す。また、本研究について新潟大学附属佐渡臨海実験所長本間義治博士から懇切な御指導を賜ることができた。心から御礼を申し上げる。

## 材料および同定

### (1) 材料

個体数・性別：1♂(第1図)。

採集者：石塚健一(新潟県西蒲原郡巻町4区; 新潟大学農学部学生)。

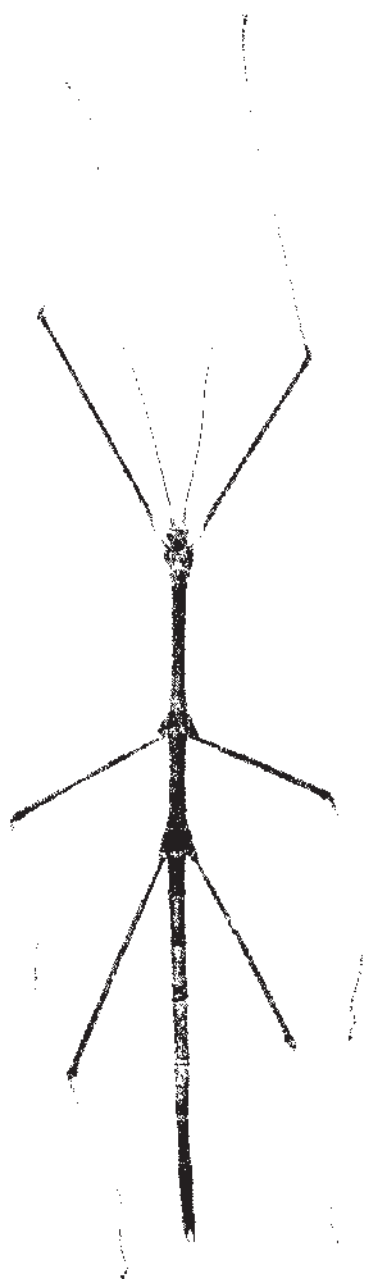
採集地：鹿児島県屋久島の志戸子<sup>しとこ</sup>。

採集者石塚氏によれば、採集地の環境は、志戸子港に近い神社の境内(海拔約5m)で、地表をはっていた本個体を採集したほか、さらに、同境内で全く同型と思われる1個体を目撃したという。

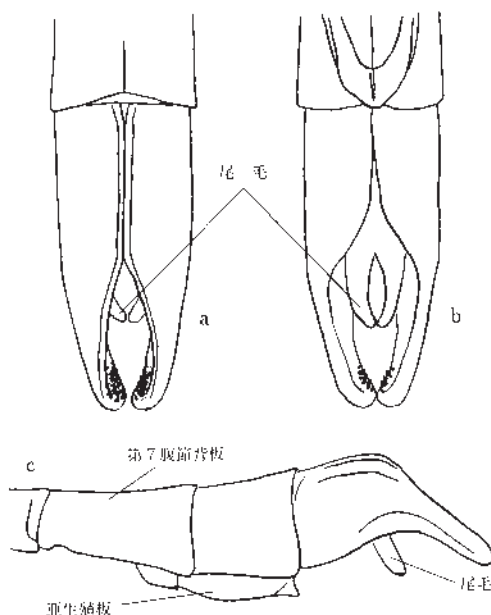
採集期日：1972年8月3日。

石塚氏の滞島期間は、8月3日より同月10までの8日間に及んだ。また、このときの旅行は、屋久島だけを目標としたもので、他の島嶼には上陸しなかったという。\*

\* この旅行には、内藤恒夫(東洋大学工学部学生)、白崎仁(新潟大学理学部学生)、藤巻雄一(宇都宮大学農学部学生)の3名が同行した。



第1図 屋久島産のアマミナナフシ(♂)×1.2

第2図 アマミナナフシ(♂)の尾端  
a—背面 b—腹面 c—側面

## (2) 同定

安松は、1965年に本種を記載するにあたり、本州に産する同属の近似種オオナナフシ (*Entoria magna* Shiraki) およびヤマトナナフシ (*E. japonica* Shiraki) と比較検討した。\*

素木(1911, 1935, 1952)は、上記2種の記載を行うにあたり、雄の個体が未発見であるため雌についてのみ記述した。その後、この2種の雌が得られた報告はない。従って、安松の記載は、雌にのみ当てはまるもので、雄を知るには、1965年に図示した前記の原色写真図版によらざるを得ない。

安松は、恐らく、雌が多産する奄美大島において、本種が新種であることを確信し、それと混生もしくは交尾中の異型(♂)個体を観察して、本種の雌であることを認定されたものと思われる。

\* 安松(1965)は、アマミナナフシを本州産のオオナナフシ (*Entoria magna*) とは ① 前脚腿節の下面に鋸歯を具えていない、② 中・後脚脛節背面に葉片をもたないことおよびヤマトナナフシ (*E. japonica*) とは、① 肛上板が非常に短かい、② 中脚脛節の基部近くの内背縁に三角形葉片を持たない、③ 体がより長い、などの点で相違すると述べている。また、アマミナナフシの卵の形態は、宝塚昆虫館報・第8号(1942)および原色昆虫大図鑑、Ⅲ、p.56(1965)に記載されている。



筆者は、以上の推定を試みた後に、今回得た個体を前記九州大学に所蔵されたタイプ標本と照合して、本種の雄と同定した。

第1表 屋久島産アマミナナフシ(♂)の各部位計測値

計測部位	体長	頭部	触角	胸部			腹部	脚					
				前胸	中胸	後胸 (中節)		前脚		中脚		後脚	
計測値 (mm)	81.3	3.9	23.3	3.1	16.8	13.7 (2.8)	43.8	32.6	37.9	22.9	23.1	27.2	29.4
								腿節	脛節	腿節	脛節	腿節	脛節

## 記 載

体長：81.3mm。各部位の計測値は(第1表)に示した。

体表：体色は濃褐色で微顆粒を密布する。

頭部：長形で後方に向かって狭まる。複眼は半円形に側方へ突出し、色彩は体色に同じ。複眼の基部後縁より頭部の後端に達する濃色の縦線が見られる。また、正中線は淡色の縦線となるが、いずれも後方では深い縦溝を作る。前頭には、中央が隆起した三角陥部があるが、先端は前額に向かって開き、浅い溝状をなして額の前縁に及ぶ。

触角：長さは23.3mmで短く、24節を数えられる。基節の先端は、円筒状であるが後方は扁平に抑圧され、いく分側方に張り出すが、基部から殆ど程度のところを最も広い。触角全面には、針状の微毛を密生するが、基部および第2節のものは粗大となる。

胸部：前胸背板は長方形、前縁は後方に湾曲する。側縁は、前半で内方に湾曲し、中央より後方で張り出す。前縁および側縁には、外縁に平行した深い溝が走る。背板の中央には、明瞭な十字状の横溝と縦溝がある。中胸・後胸には正中隆起線が貫く。後胸中節は、幅より縦長で正中線は不明瞭。中央後方に位置する一対の太い「へ」の字状陥凹部は、強く刻印される。また、中節の前縁近くにある一対の眉状陥凹部は細く不明瞭。

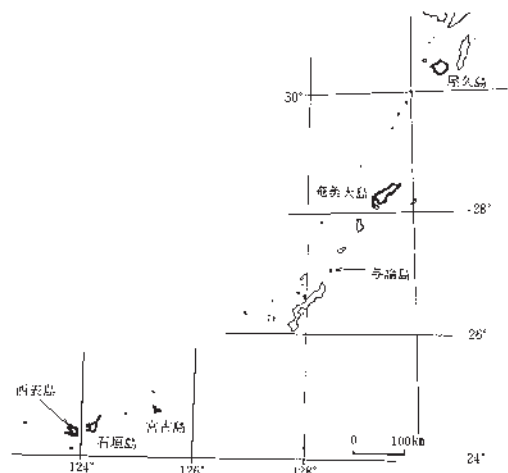
腹部：正中隆起線は明瞭。第3・4・5腹節背板は最も長く、第8節は最も短い。腹部末端の第9腹節背板の基部約1/3は鞘状に合致し、鋭い稜根形になる。第9腹節背板の長さは、第7および第8腹節背板のいずれよりも長い。卵生殖板の末端は、第8腹節背板の末端とほぼ同じ。一対の尾毛の末端部は、それぞれ内方に曲るが交差することはない(第2図)。

脚：前脚および後脚は、腿節より脛節が長い。中脚では、両者はほぼ同長。中・後脚の腿節末端部下面には数個の鋸歯状突起が並ぶ。

## 分 布

今回、南西諸島の最北端に位置する屋久島を新産地として報告する。

本種の分布について安松(1965)は、「奄美大島にのみ最も普通に産する」とだけ記述しているが、九州



第3図 アマミナナフシの産地

大学には、多くの奄美大島産（7♂7♀）のほか、さらに安松らが採集した西表島<sup>いりおもてじま</sup>（1♂1♀）・石垣島（2♂♂）・宮古島（1♂）・与論島（1♂）など各島産の標本が所蔵されている（第3図）。

### お わ り に

本報は、屋久島で採集されたアマミナフシの雌を記載するとともに、南西諸島における新産地を報告したものである。恐らく、本種は、屋久島以南の各島嶼には連続的な分布をするものと思われる。

今回は、屋久島産の雌についてのみ検討できたが、今後は、同島産の雌個体や卵についても調査する必要がある。また、屋久島産の個体が奄美大島以南に分布するものに比して、地理的変異が認められるか、どうか、興味ある問題として残される。

漆ら（1966）の研究によれば、屋久島は九州本上の陸棚上にあつて、奄美大島以南の諸島とは、島嶼成立の年代が全く異なるという。このような場合、両者に生息する個体群の遺伝質が固定し、互いに相違する特徴を現わすのが普通である。しかし、今回比較検討した南西諸島産の標本に対して、屋久島産のものに固有の特徴は認め得なかった。このような問題は、将来、さらに多くの資料を得て検討を加えてみたいと思う。

### 参 考 文 献

- 1) 樋熊清治（1973）：新潟県のナナフシ類。長岡市立科学博物館研究報告，8：1—15。
- 2) 藤正雄・井尻正二（1966）：日本列島第二版（岩波書店：東京），pp. 221。
- 3) Shiraki, T. (1911) : Phasmiden und Mantiden Japans. Ann. Zool. Japonenses. 7(5) : 310, 313.\*
- 4) ——— (1935) : Orthoptera of the Japanese Empire (Part IV) Phasmidae. Mem. Fac. Sci. Agr., Taihoku Imp. Univ., 14(3) : 23—88.
- 5) 素木得一（1952）：直翅目（竹節虫亜目）概説。日本昆虫図鑑（北隆館：東京），pp. 60—65, figs. 152—161。
- 6) 安松京三（1942）：竹節虫の卵。宝塚昆虫館報，18：1—20。
- 7) ——— (1965) : ナナフシ亜目。原色昆虫大図鑑 III（北隆館：東京），pp. 55—58, pls. 28—29。

\* 4)より引照。

## 長岡市立科学博物館に寄贈された 故土田繁也氏蒐集の鱗翅類目録

### 1. 外国産チョウ類

樋 熊 清 治  
(長岡市立科学博物館昆虫研究室)

A list of the butterflies (Lepidoptera) collected by late Mr. S. Tsuchida,  
whose specimens are deposited in the Nagaoka City Museum,

### 1. The exotic butterflies

By  
Seiji HIGUMA

### は し が き

故土田繁也氏<sup>1)</sup>(1923~1944)\*は、幼時から動植物に興味を持っておられたが、県立新潟商業学校(旧制)在学時代には昆虫採集に熱中し、余暇を惜んで県内の著名な採集地を踏破された。その一方、県内外各地の同好者、学者とも標本の交換を活発に行なわれた。特に、外国産チョウ類の蒐集には熱心で、当時、地方における個人力にかかるコレクションでは大きなものとして評価されていた。

論文発表の準備も意欲的に進めておられたことは、遺稿や数冊のノートから推察される。しかし、公表されたものは、1943年に昆虫界に載せられた26ページにわたる「新潟県新津地方昆虫小誌」<sup>2)</sup>だけのようである。この報文の構成は、今日の自然観察的な手法を取り入れたユークなもので、当時学界の注目を集めた力作であった。

同氏は、新潟商業学校卒業後、さらに専門学校への進学を志して受験の準備を進めておられたが、不幸にして病魔の冒すところとなり、わずか21才の若さで死去された。

同氏が生前中に蒐集整理された標本のうち、一部は戦後の混乱期に散逸したり破損したのもあったという。しかし、残りは母堂の手によって今日まで保存されてきた。1972年11月初めに、御家族から、当博物館に寄贈したいとの申し出があった。そこで、直ちに若干の予算措置を行なうなどの受け入れ手続きを経た後、御厚意をお受けしたものである。今回、標本を取蔵するにあたり、取り敢えず外国産チョウ類の目録を作成し、公表したい。

本報ををまとめるにあたり、貴重な標本をご寄贈いただき、研究の機会を与えて下さった母堂土田ナヲリ氏および御家族の方々に心から感謝の意を捧げる。

なお、この目録に扱った標本の同定は、下記の文献によって行なった。なお、不明のものについては九州大学教養学部教授白木隆博士、並びに同学部助教授三枝豊平博士の最終同定をいただいた。また、新潟大学理学部附属佐渡臨海実験所長木間義治博士から種々助言を賜わった。併せて御礼を申し上げる。

\* 本籍並びに現住所：新津市金沢町1丁目4の54。

\*\* 発表誌：昆虫界、11(114),pp.431~456。(1943)。

## 目録 1. 外国産チョウ類

## 台 湾 産

## HESPERIIDAE セセリチョウ科 (1種)

1. *Badamia exclamationis* Fabricius タイワンアオバセセリ (Fig.1-♂)  
1♂: 前翅長/26.3mm

## PAPILIONIDAE アゲハチョウ科 (14種)

2. *Troides aeacus kaguya* Nakahara & Esaki キンタアゲハ (Pl.1: Fig.1-♂, Fig.2-♀)  
1♂: 前翅長/65.15mm 1♀: 前翅長/81.4mm
3. *Atropha neura horishana* Matsumura アケボノアゲハ (Pl.1: Fig.3-♂)  
1♂: 前翅長/62.5mm
4. *Byaso polyeuctes termessus* Fruhstorfer オオベニモンアゲハ (Pl.1: Fig.4-♂)  
1♂: 前翅長/60.45mm
5. *B. febanus* Fruhstorfer タイワンジャコウアゲハ (Pl.2: Fig.1-♂)  
1♂: 前翅長/49.5mm
6. *Craphium eurous asakurae* Matsumura アサクラアゲハ (Pl.3: Fig.7-♂)  
1♂: 前翅長/37.65mm 採集地/Musha 採集月日/1936.Ⅱ 採集者/T. Honda
7. *G. sarpedon connectens* Fruhstorfer アオスジアゲハ (Pl.3: Fig.4-♂)  
1♂: 前翅長/37.9mm
8. *G. cloanthus kuge* Fruhstorfer タイワンタイマイ (Pl.3: Fig.5-♂, Fig.6-Ditto, under side)  
1♂: 前翅長/42.75mm
9. *Chilasa agestor matsumurae* Fruhstorfer カバシタアゲハ (Pl.3: Fig.8-♂)  
1♂: 前翅長/49.65mm
10. *C. epycides melanoleucus* Ney キボンシアゲハ (Pl.3: Fig.9-♂)  
1♂: 前翅長/37.15mm 採集地/Hori 採集月日/1938.Ⅶ
11. *Papilio polytes pasikrates* Fruhstorfer シロカビアゲハ (Pl.2: Fig.2-♂, Fig.4-♂)  
1♂: 前翅長/45.05mm 1♀: 前翅長/53.35mm



Fig. 1. 台湾産の*Badamia exclamationis* Fabricius(♂)タイワンアオバセセリ

12. *P. helenus fortunius* Fruhstorfer  
モンキアゲハ (Pl.2: Fig.3-♂)  
1♂: 前翅長/57.9mm
13. *P. thaiwanus* Rothschild  
ワタナベアゲハ (Pl.3: Fig.1-♂)  
1♂: 前翅長/50.25mm
14. *P. memnon heronus* Fruhstorfer  
ナガサキアゲハ (Pl.3: Fig.2-♀)  
1♀: 前翅長/79.95mm
15. *P. paris hermosanus* Rebel  
ルリモンアゲハ (Pl.3: Fig.3-♂)  
1♂: 前翅長/42.6mm

## PIERIDAE

## シロチョウ科 (11種)

16. *Appias lycida formosana* Wallace タイワンシロチョウ (Pl. 4 : Fig. 1-♂)  
1♂ : 前翅長/35.05mm
17. *A. indra aristoxenus* Fruhstorfer クモガタシロチョウ (Pl. 4 : Fig. 7-♂)  
1♂ : 前翅長/29.65mm
18. *Prioneris thestylis formosana* Fruhstorfer ゴマダラシロチョウ (Pl. 4 : Fig. 2-♂, Fig. 3-♀)  
1♂ : 前翅長/46.6mm 1♂ : 前翅長/44.3mm
19. *Delias aglaia curasena* Fruhstorfer アカネシロチョウ (Pl. 4 : Fig. 4-♀)  
1♀ : 前翅長/38.05mm
20. *D. hyparete luzonensis* C. & R. Felder ベニモンシロチョウ (Pl. 4 : Fig. 5-♂)  
1♂ : 前翅長/41.55mm
21. *Cepora nadina eunama* Fruhstorfer ウスムラサキシロチョウ (Pl. 4 : Fig. 6-♂)  
1♂ : 前翅長/31.85mm
22. *Ixias pyrene insignis* Butler メスシロキチョウ (Pl. 4 : Fig. 8-♂)  
1♂ : 前翅長/30.85mm 1♀ : 前翅長/31.65mm
23. *Hebomoia glaucippe formosana* Fruhstorfer ツバベニチョウ (Pl. 4 : Fig. 9-♂)  
1♂ : 前翅長/47.75mm
24. *Catopsilia pyranthe pyranthe* Linné ウラナミンシロチョウ (Pl. 5 : Fig. 1-♂, Fig. 2-♀)  
1♂ : 前翅長/31.5mm 1♀ : 前翅長/33.15mm
25. *C. pomona pomona* Fabricius ギンモンウスキチョウ (Pl. 5 : Fig. 3-♀)  
1♀ : 前翅長/36.95mm
26. *Goneteryx amintha formosana* Fruhstorfer タイワンヤマキチョウ (Pl. 5 : Fig. 4-♂)  
1♂ : 前翅長/34.95mm

## DANAIDAE

## マダラチョウ科 (10種)

27. *Anosia chrysippus* Linné カバマダラ (Pl. 5 : Fig. 5-♀)  
1♀ : 前翅長/38.95mm
28. *Salatura genutia* Cramer スジグロカバマダラ (Pl. 5 : Fig. 6-♂)  
1♂ : 前翅長/44.15mm
29. *Tirumala hamata septentrionis* Butler コモンアサギマダラ (Pl. 5 : Fig. 7-♂)  
1♂ : 前翅長/48.2mm
30. *T. limniace limniace* Cramer ウスコモンアサギマダラ (Pl. 5 : Fig. 8-♂)  
1♂ : 前翅長/48.85mm
31. *Parantica aglea maghaba* Fruhstorfer ヒメコモンアサギマダラ (Pl. 5 : Fig. 9-♀)  
1♀ : 前翅長/42.3mm
32. *P. melaneus swinhoei* Moore タイワンアサギマダラ (Pl. 6 : Fig. 1-♂)  
1♂ : 前翅長/44.7mm 1♀ : 前翅長/42.25mm
33. *Idea leucone clara* Butler オオゴマダラ (Pl. 6 : Fig. 2-♂)  
1♂ : 前翅長/70.9mm 1♂ : 前翅長/64.75mm
34. *Euploea sylvestor swinhoei* Wallace ルリマダラ (Pl. 6 : Fig. 3-♂)  
1♂ : 前翅長/45.05mm
35. *E. mulciber barsine* Fruhstorfer ツمامラサキマダラ (Pl. 6 : Fig. 4-♂)  
1♂ : 前翅長/50.3mm

36. *Euploea tulliolus koxinga* Fruhstorfer ホリシャルリマダラ (Pl. 6 : Fig. 5 ♂)  
1♂ : 前翅長/35.6mm

## SATYRIDAE ジャノメチョウ科 (6種)

37. *Lethe europa pavida* Fruhstorfer シロオビヒカゲ (Pl. 6 : Fig. 6-♂)  
1♂ : 前翅長/33.05mm 採集地/Sintiku 採集月日/1929.VII 採集者/K. Takeuchi
38. *L. chandica ratnacri* Fruhstorfer メスチャヒカゲ (Pl. 6 : Fig. 7-♀)  
1♀ : 前翅長/36.05mm 採集地/Sintiku 採集月日/1929.VII 採集者/K. Takeuchi
39. *L. verma cintamani* Fruhstorfer シロオビクロヒカゲ (Pl. 6 : Fig. 8-♂)  
1♂ : 前翅長/29.0mm
40. *Heope armandii lacticolora* Fruhstorfer シロキマダラヒカゲ (Pl. 7 : Fig. 1-♂)  
1♂ : 前翅長/38.9mm
41. *Melanitis leda leda* Linné ウスイロコノマチュウ (Pl. 7 : Fig. 2-♂)  
1♂ (秋型) : 前翅長/38.15mm
42. *Elymnias hypermnestra hainana* Moore ルリモンジャノメ (Pl. 7 : Fig. 3-♂)  
1♂ : 前翅長/35.55mm 1♀ : 前翅長/38.1mm 採集地/Hori-sha 採集月日/1936.VI  
採集者/T. Honda

## AMATHUSIIDAE ワモンチョウ科 (1種)

43. *Stichopthalma howqua formosana* Fruhstorfer ワモンチョウ (Pl. 7 : Fig. 4-♂)  
1♂ : 前翅長/54.15mm

## NYMPHALIDAE タテハチョウ科 (25種)

44. *Ariadne ariadne pallidior* Fruhstorfer カバタテハ (Pl. 7. : Fig. 5-♂)  
1♂ : 前翅長/29.05mm
45. *Precis almana almana* Linné タテハモドキ (Pl. 7 : Fig. 6-♂)  
1♂ : 前翅長/28.35mm 1♀ : 前翅長/33.05mm
46. *P. lemonias lemonias* Linné ジャノメタテハモドキ (Pl. 7 : Fig. 7-♂)  
1♂ : 前翅長/28.1mm 採集地/Musha 採集月日/1936.VII 採集者/T. Honda
47. *P. orithya orithya* Linné アオタテハモドキ (Pl. 7 : Fig. 8-♀)  
1♀ : 前翅長/25.85mm 採集地/Hori 採集期日/1936.VI 採集者/T. Honda
48. *P. iphita iphita* Cramer クロタテハモドキ (Pl. 7 : Fig. 9 ♂)  
1♂ : 前翅長/32.0mm
49. *Symbrenthia hippoclus formosanus* Fruhstorfer キミスジ (Pl. 8 : Fig. 1-♂)  
1♂ : 前翅長/23.4mm
50. *Hypolimnas misippus* Linné メスアカムラサキ (Pl. 8 : Fig. 2-♂)  
1♂ : 前翅長/36.8mm 採集地/Hori 採集期日/1931.VII 採集者/U. Tsuchita 1♀ : 前翅長/38.95mm
51. *H. bolina hezia* Butler リュウキュウムラサキ (Pl. 8 : Fig. 3 ♂)  
1♂ : 前翅長/41.0mm 1♂ : 前翅長/44.5mm
52. *Kalima inachus formosna* Fruhstorfer コノハチョウ (Pl. 8 : Fig. 4-♀)  
1♀ : 前翅長/48.8mm 1♂ : 前翅長/45.25mm
53. *Neptis ananta taiwana* Fruhstorfer ホリシャミスジ (Pl. 8 : Fig. 5-♂)  
1♂ : 前翅長/33.85mm

54. *Tacoraea perius perius* Linné シロミスジ (Pl.8: Fig.6-♂)  
 1♂: 前翅長/31.7mm
55. *T. asura baelia* Fruhstorfer ナカグロミスジ (Pl.8: Fig.7-♂)  
 1♂: 前翅長/33.6mm
56. *T. selenophora laela* Fruhstorfer ヤエヤマイチモンジ (Pl.8: Fig.8-♂)  
 1♂: 前翅長/30.45mm
57. *T. cama zoroastes* Butler タイウンイチモンジ (Pl.8: Fig.9-♀)  
 1♀: 前翅長/35.65mm
58. *Abrola ganga formosana* Fruhstorfer オスアカミスジ (Pl.9: Fig.1-♂)  
 1♂: 前翅長/36.45mm 1♀: 前翅長/40.55mm
59. *Euthalia irrubescens fulgurialis* Matsumura イナズマチョウ (Pl.9: Fig.2-♂)  
 1♂: 前翅長/31.25mm 採集地/Hori 採集月日/1936.VI 採集者/T. Honda
60. *E. kosempona* Fruhstorfer ホリシヤイチモンジ (Pl.9: Fig.3-♂)  
 1♂: 前翅長/32.7mm 採集地/Hori 採集月日/1936.VII 採集者/T. Honda
61. *E. formosana* Fruhstorfer タカサゴイチモンジ (Pl.9: Fig.4-♂)  
 1♂: 前翅長/40.45mm
62. *Cyrestis thyodamas formosana* Fruhstorfer イシガケチョウ (Pl.9: Fig.5-♂)  
 1♂: 前翅長/30.65mm
63. *Timelaea maculata formosana* Fruhstorfer ヒョウマダラ (Pl.9: Fig.6-♀)  
 1♀: 前翅長/29.05mm 採集地/Hori 採集月日/1936.VII 採集者/T. Honda
64. *Chitoria chrysolona* Fruhstorfer タイウンコムラサキ (Pl.9: Fig.7-♂, Fig.8-♀)  
 1♂: 前翅長/32.85mm 1♀: 前翅長/40.05mm
65. *Heloyra plesseni* Fruhstorfer アサグラコムラサキ (Pl.9: Fig.9-♂)  
 1♂: 前翅長/32.95mm
66. *Sephisa chandra androdamas* Fruhstorfer キゴマダラ (Pl.10: Fig.1-♂)  
 1♂: 前翅長/36.7mm
67. *Hestina assimilis furmosana* Moore アカボシゴマダラ (Pl.10: Fig.2-♂)  
 1♂: 前翅長/39.9mm
68. *Polyura eudamippus formosana* Rothschild フタオチョウ (Pl.10: Fig.3-♂)  
 1♂: 前翅長/39.15mm 採集地/Hori 採集月日/1936.VII 採集者/T. Honda

LIBYTHEIDAE テングチョウ科 (1種)

69. *Libythea celtis formosana* Fruhstorfer テングチョウ (Pl.10: Fig.4-♂)  
 1♂: 前翅長/17.65mm 1♂: 前翅長/26.3mm

朝鮮産

PAPILIONIDAE アゲハチョウ科 (2種)

1. *Parnassius bremeri* Felder アカボシウスパンロチョウ (Pl.10: Fig.5-♂)  
 1♂: 前翅長/38.35mm 採集地/白頭山高原 採集月日/1938.VI.25
2. *P. nomion* Fischer オオアカボシウスパンロチョウ (Pl.10: Fig.6-♂)  
 1♂: 前翅長/42.45mm 採集地/遮日峯 採集月日/1941.VIII.7

## PIERIDAE シロチョウ科 (1種)

3. *Pontia daplidice* Linné チョウセンシロチョウ (Pl.10: Fig.7-♂)  
1♂: 前翅長/25.45mm

## SATYRIDAE ジャノメチョウ科 (1種)

4. *Erebia cyclopius* Eversmann キイロモンヒカゲ (Pl.10: Fig.8-♀)  
1♀: 前翅長/26.95mm 採集地/Corea 採集月日/1938.VII 採集者/Hirayama

## NYMPHALIDAE タテハチョウ科 (1種)

5. *Clossiana selenis chosensis* Matsumura チョウセンチビヒョウモン (Pl.10: Fig.9-♂)  
1♂: 前翅長/21.7mm 採集地/朝鮮平北 採集月日/1938.VII.1

## アフリカ産

## NYMPHALIDAE タテハチョウ科 (1種)

1. *Issoria hanningtoni* Elvès (Pl.11: Fig.1-♀)  
1♀: 前翅長/18.65mm

## 北アメリカ産

## PAPILIONIDAE アゲハチョウ科 (1種)

1. *Papilio troilus troilus* Linné クスノキアゲハ (Pl.11: Fig.2-♂)  
1♂: 前翅長/47.05mm

## PIERIDAE シロチョウ科 (1種)

1. *Phoebis agarithe maxima* Newman アメリカオオキチョウ (Pl.11: Fig.3-♂)  
1♂: 前翅長/35.15mm

## 南アメリカ産

## DANAIDAE マダラチョウ科 (1種)

1. *Mechanitis nessaea* Hünér キオビマダラ (Pl.11: Fig.4-♂)  
1♂: 前翅長/34.25mm

## MORPHIDAE モルフォチョウ科 (1種)

2. *Morpho asga* Hünér エガモルフト (Pl.11: Fig.5-♂)  
1♂: 前翅長/46.25mm

## NYMPHALIDAE タテハチョウ科 (2種)

3. *Heliconius clytia* Cramer (Pl.11: Fig.6-♂)  
1♂: 前翅長/34.5mm  
4. *Polygonia interrsgationis* Fabricius (Pl.11: Fig.7-♂, Fig.8-Ditto, under side)  
1♂: 前翅長/29.1mm



## LYCAENIDAE シジミチョウ科(1種)

5. *Lycaena gorgon* Boisduval (Pl. 11 : Fig. 9-8)  
1♂ : 前翅長/19.05mm

## 参 考 文 献

- 1) 江崎悌三・中原和郎・黒沢良彦(1964). 原色図鑑世界の蝶. 北隆館(東京).
- 2) 平山修次郎(1939). 原色千種続昆虫図譜. 三省堂(東京).
- 3) ———(1942). 原色蝶類図譜. 三省堂(東京).
- 4) Fujioka, T. (1970). Butterflies collected by the Lepidopterological research expedition to Nepal Himalaya, 1963. Spec. Bull. Lep. Soc. Jap., 4:1—125.
- 5) 森為三・土居寛暲・趙福成(1934). 原色朝鮮の蝶類. 朝鮮印刷株式会社(京城).
- 6) 森下和彦(1973). ツマベニチョウ. やどりが, 74:12—18.
- 7) 中谷貴寿・小橋益夫(1962). 日本におけるナガサキアゲハ有尾型の記録. 蝶と蛾, 13(2):28—29.
- 8) 白水 隆(1965). 原色台湾蝶類大図鑑. 保育社(大阪).
- 9) ———(1965). 原色図鑑日本の蝶. 北隆館(東京).
- 10) Shirōzu, T. & M. Ogata & M. Wakabayashi (1965). Butterflies collected by the Lepidopterological Society of Japan expedition to Formosa in 1961. with some biological notes. Spec. Bull. Lep. Soc. Jap., 1:11—26.
- 11) Takahashi, M. (1974). The list of the subfamily Heliconiinae (Lepidoptera:Nymphalidae) collected in the Santa Marta Mountains and its vicinity, Colombia, South America. Tyō to Ga (Trans. Lep. Soc. Jap.), 25(1):14—25.
- 12) 山川 黙(1937). 原色新蝶類図. 三省堂(東京).

PLATE I



PLATE II



PLATE III

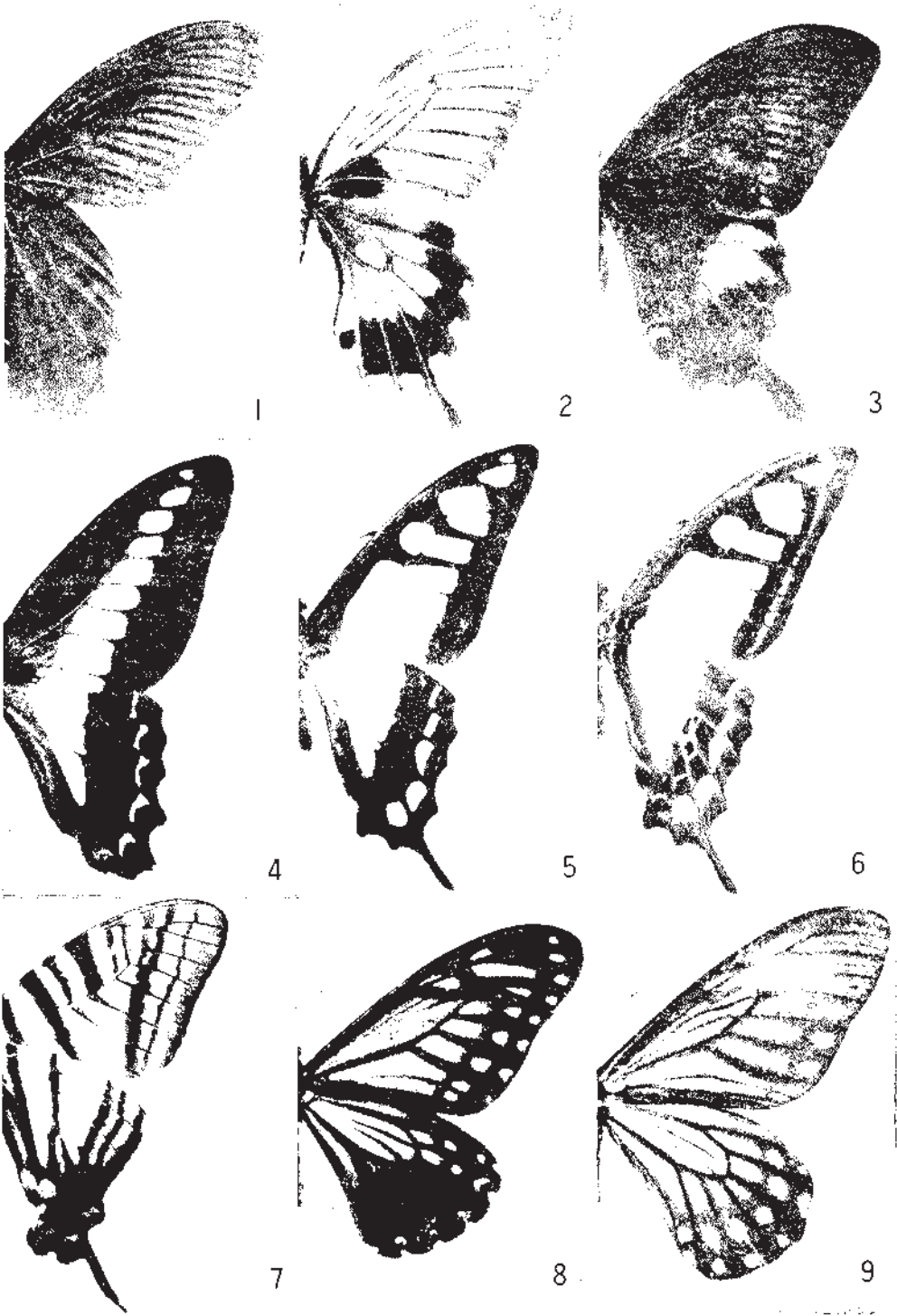


PLATE IV



PLATE V





PLATE VI

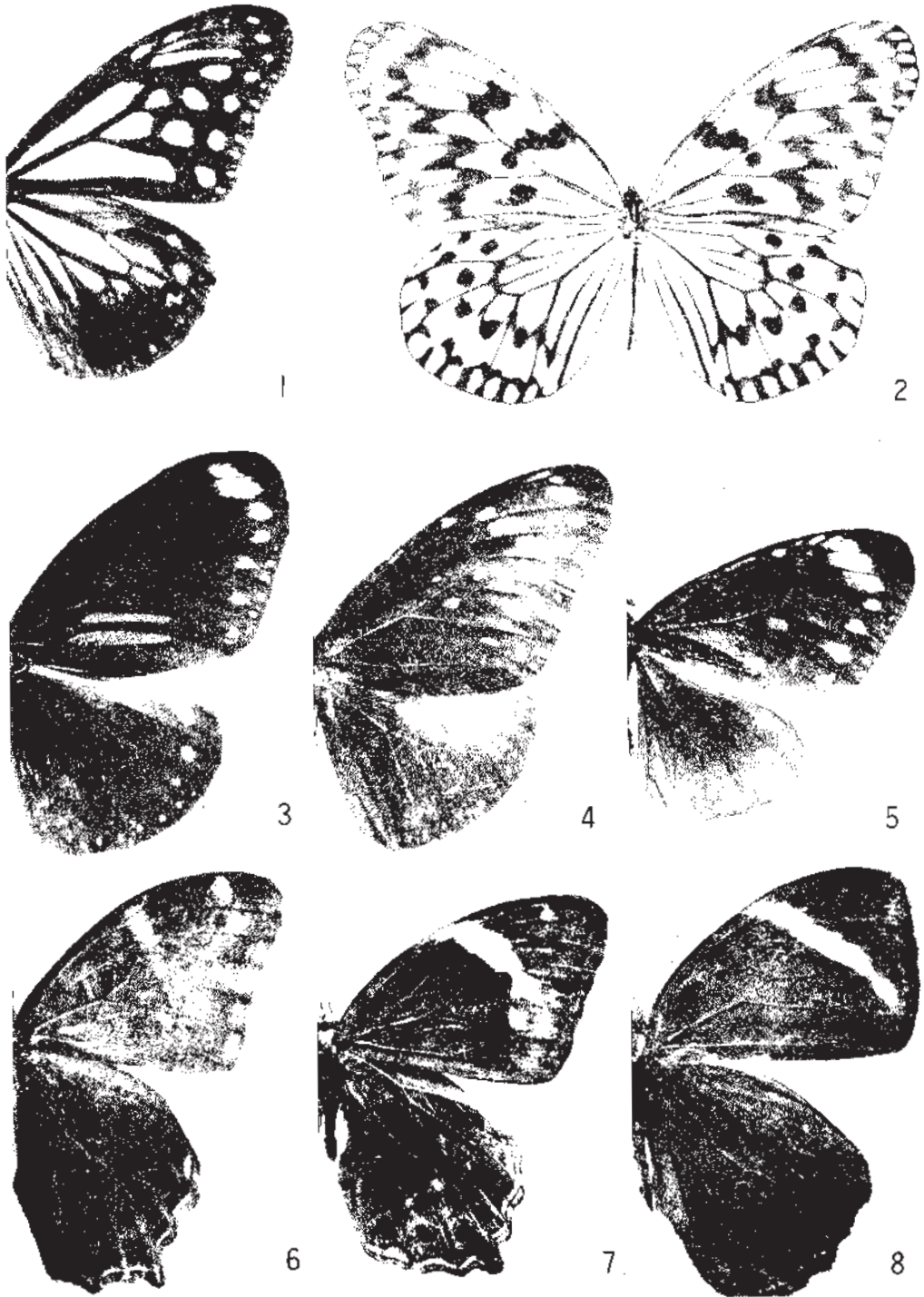


PLATE VII





PLATE VII



1



2



3



4



5



6



7



8



9

PLATE IX

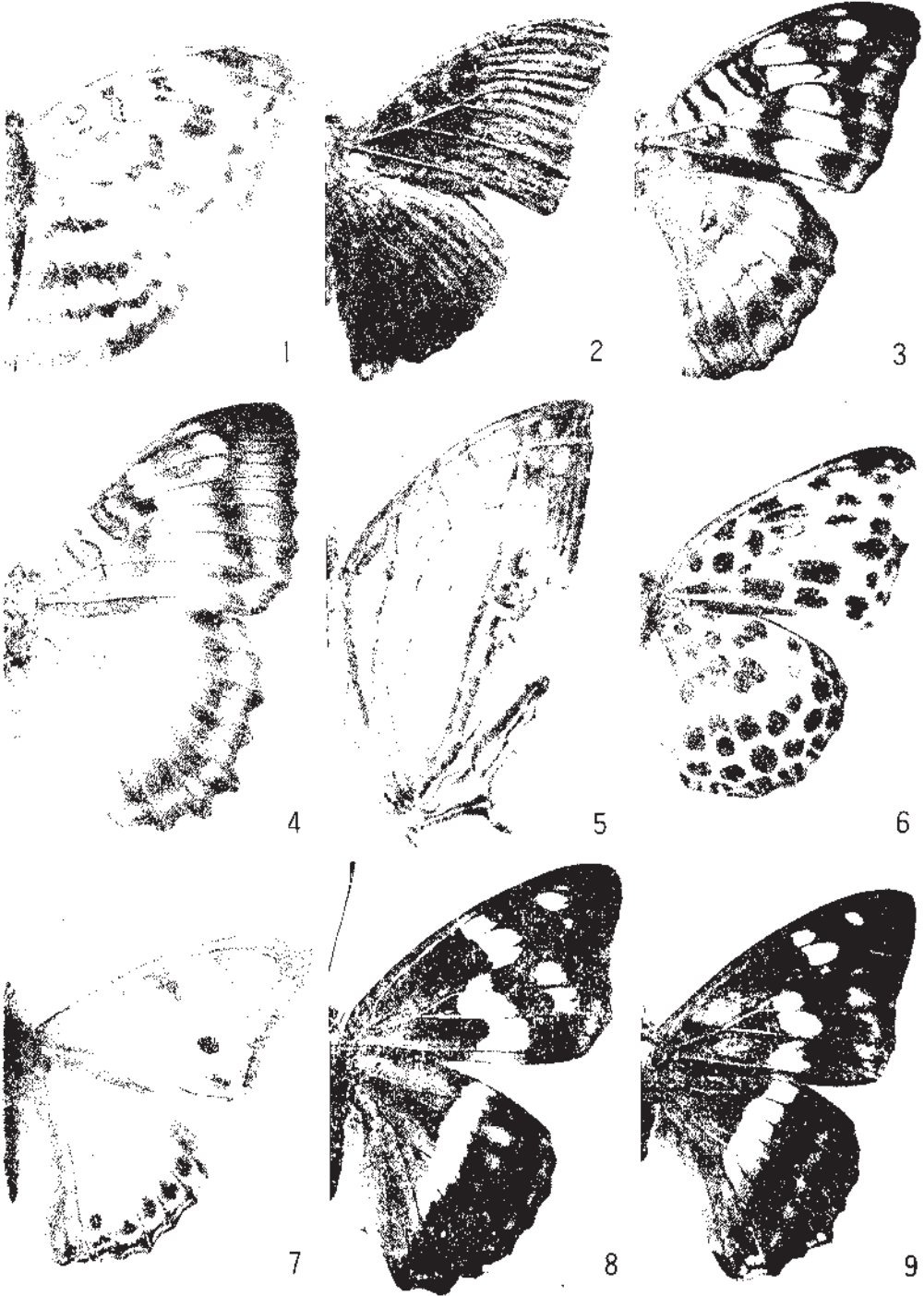


PLATE X



PLATE XI



# オオヨシキリ (*Acrocephalus arundinaceus*) の 成鳥と幼鳥の渡りの時期について

柿 沢 亮 三  
(長岡市立科学博物館動物研究室)

Migratory Season of Eastern Great Reed-warbler  
*Acrocephalus arundinaceus* in Niigata Prefecture

By

Ryozo Kakizawa

Laboratory of Zoology, Nagaoka Municipal Science Museum

## は じ め に

1973年5月、新潟県豊栄市にある福島潟に環境庁・福島潟鳥類観測所が完成した。この観測所は、環境庁が3年計画で整備をすすめている、全国30箇所の渡り鳥観測ステーション設置計画によるものである。ここでは、鳥類の標識調査を主に行ない、渡り鳥の生態に関する基礎資料の集積につとめている。近年渡り鳥の保護が国際的に重視されてきており、日米渡り鳥条約につづいて、日ソ渡り鳥条約が結ばれ、日本の鳥類観測所網の果たす役割も、大きなものとなるであろう。また、鳥類保護のための国際間の資料の交換が、大に行なわれることを願っている。(風間, 1973. 山階, 1973)

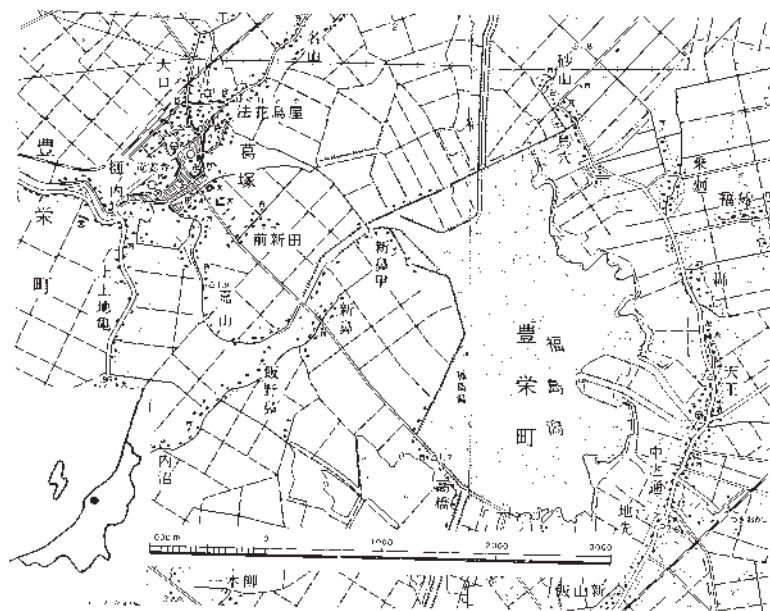
福島潟は新潟県のほぼ中程に位置し、海岸から約10kmはいったところにある。(第1図) 福島潟の約半分は、近年干拓が行なわれたが、約200haの湿地が現在残されている。干拓事業にとまらぬ、水位が著しく下がったため、ここ数年湿地の陸地化が急速にすすんでいる。夏季には、約200haの湿地のうち水面はわずかで、ほとんどの面積はヨシやマコモなどの植物が繁茂している。(第2図) (尾崎, 1973)

福島潟鳥類観測所では、山階鳥類研究所\*と新潟県野生鳥獣生態研究会(代表、風間辰夫)\*\*が標識調査を行なっている。1973年は8月下旬から11月上旬まで、のべ62日間にわたって標識調査を行ない、44種5,914羽の標識を行なった。(附表1) このうち90羽のオオヨシキリ(*Acrocephalus arundinaceus*)を標識し、成鳥と幼鳥の渡りの時期について、若干の知見を得たので報告する。

\* 吉井正標識研究室長、杉森文夫、茂田良光研究員。

\*\* 風間辰夫、阿部利夫、千葉見、渡辺央、金子与止男、吉川吉枝の各氏と柿沢亮三(いずれも野生鳥獣生態研究会の会員)。





第1図 調査地の地図  
(豊栄町は現在豊栄市となっている。福島潟の両側約半分は現在干拓されている)

### 調査方法および結果

オオヨシキリは夏の渡り鳥で、新潟県では4月中旬から5月上旬にかけて渡来し、アソ原で繁殖を行なう。本種は福島潟のアソ原でも多数繁殖しており、調査した時期は、すでに繁殖を終えた、渡り前の時期である。オオヨシキリの捕獲には、かすみ網を使用した。成鳥と幼鳥の識別は、目の光彩の色と、口の中の舌のつけ根あたりに黒斑があるかどうかの2つの方法によった。つまり、光彩の色は幼鳥では灰色がかった黄かった色だが、成鳥は幼鳥より濃い色をしている。また、幼鳥は口の中が淡いオレンジ色で、舌のつけ根あたりに黒斑が対になって、2つ見られる。成鳥の口の中は濃いオレンジ色で、舌のつけ根に黒斑は無い。

オオヨシキリの標識数とその時期について第1表に示した。調査日数やかすみ網の枚数に違いはあるのだが、時期が遅くなるにしたがって、個体数が減少してゆく傾向が見られる。第1表の9月8日～9月17日の時期に、捕獲数が著しく減じているが、この期間は、朝と夕方しかかすみ網を張っていなかった。オオヨシキリは昼間に多く網にかかる傾向があるので、このことがこの期間に捕獲数が減少した原因であると考えられる。また、第1表より、ほとんどのオオヨシキリは10月上旬までに福島潟から去ってゆくが、ごくわずかの個体は10月下旬まで残っている。



第2図 調査地の自然環境

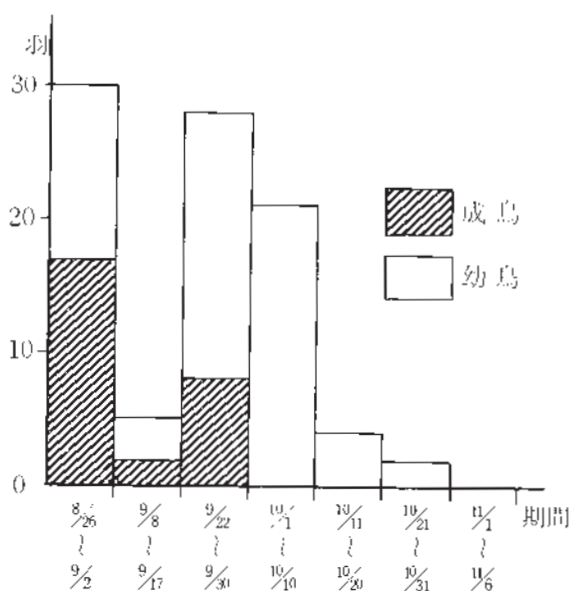
標識されたオオヨシキリの成鳥と幼鳥の割合とその時期について、第3図に示した。図より明らかなように、8月26日～9月2日、の期間は、成鳥の方が幼鳥よりも

多く標識されている。9月下旬には幼鳥の割合の方が高くなり、10月にはいるとすべて幼鳥となる。時期による成鳥と幼鳥との割合を百分率であらわすと、第4図に示したようになる。この図のもとになる例数が少ないので信頼度のうすいものであるが、時期が遅くなるにしたがって、成鳥の占める割合が減少してゆくという傾向を知ることができる。第3図、第4図より、オオヨシキリの成鳥と幼鳥の渡りの時期が異なっていることを、推察することができる。すなわち、成鳥は9月末までに福島潟から去ってゆくが、幼鳥の渡りは、10月にはいってから行なわれるということである。

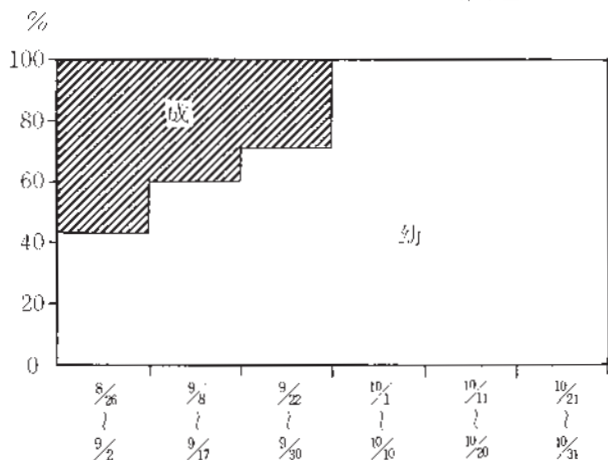
調査期間中に同じ個体が何度か捕獲されることがある。初めに標識されてから、再捕獲されるまで、その個体はずっと福島潟で生活していたと考えられる。調査期間中に2度以上捕獲された17個体について、福島潟での滞在日数を示すと、第5図のようになる。再捕獲された個体は一例を除いてすべて幼鳥であった。第5図から明らかなように、1カ月以上のかかりの日数にわたって、福島潟にとどまっていることがわかる。したがって、福島潟の個体がすべてどんどん入替っているとは考えにくい。

第1表 オオヨシキリの標識数とその時期(1973年)

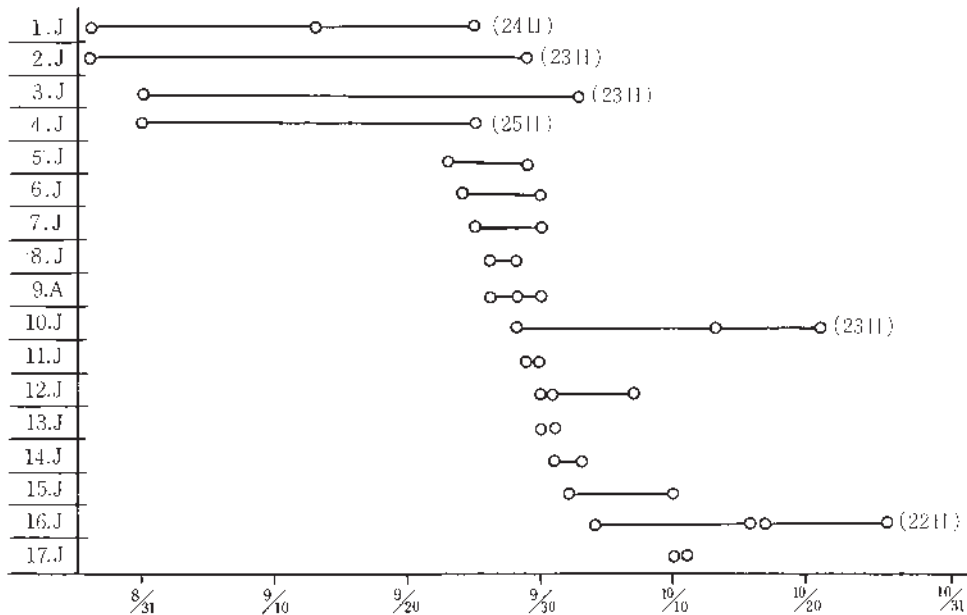
調査期間	調査日数	標識数	のべ網数	標識数のべ網数
8/26~9/2	8	30	61	0.491
9/8~9/17	8	5	72	0.060
9/22~9/30	9	28	191	0.146
10/1~10/10	10	21	290	0.072
10/11~10/20	10	4	271	0.014
10/21~10/31	11	2	386	0.005
11/1~11/6	6	0	75	0



第3図 オオヨシキリの成鳥と幼鳥の割合とその時期(1973年)



第4図 オオヨシキリの成鳥と幼鳥の百分率(1973年)



第5図 再捕獲によるオオヨシキリの滞在日数 (1973年)

J: 幼鳥, A成鳥. ( ) 内は滞在日数.

### 考 察

オオヨシキリの成鳥と幼鳥の渡りの時期がずれるのは、幼鳥の換羽のためと考えられる。すなわち、Snow (1967) によると、イギリスにいるオオヨシキリの近縁種である Reed-warbler は羽毛の一部の換羽を繁殖地で行なうが、風切羽、尾羽などは越冬地で換羽を行なう。Reed-warbler の幼鳥の換羽については、Snow はふれていないが、オオヨシキリの成鳥の換羽方法はヨーロッパの近縁種と同じと考えられる。しかし、幼鳥については、黒田 (1963) がムクドリ幼鳥で報告したと同じように、オオヨシキリでは渡り前に総ての羽毛が換羽することがわかった。(柿沢、未発表\*) 9月、10月に捕獲された幼鳥のほとんどは換羽中であり、体重も著しく軽い。すなわち、9月下旬の成鳥の体重は、38~41g あったが、換羽中の幼鳥では、軽いものは23.0g しかなかった。幼鳥の換羽は初列・次列・3列風切羽、尾羽が、ほとんど同時に生え替わるようで、ほとんど飛べない個体もあった。渡り前には、多くの鳥類で体脂質のたくわえが行なわれる。オオヨシキリの体脂質の変化についても、中村 (1962) が報告している。福島湖での幼鳥の渡り前の体重変化を1例あげる。10月4日に換羽後期(かなり換羽を終えている)の個体は、体重28.8g、翼長79.5mmであった。同じ個体が10月26日に捕獲されたがその時には換羽は総て終っており、体重42.0g、翼長85.2mmであった。すなわち、この約20日間に、体重は11.2g増加し、翼長は5.7mm伸びたことになる。オオヨシキリの幼鳥は、換羽を終えて、初めて渡り前の準備が完了することになる。このために、幼鳥の渡りは換羽の期間だけ、成鳥よりも渡りの時期が遅れるものと考えられる。

\* オオヨシキリの幼鳥の換羽については、第1回新潟県野生鳥獣生態研究会研究発表会(於長岡, 1974年3月)で一部発表した。



ま と め

1. 1973年8月26日から11月6日まで、新潟県豊栄市の福島潟で鳥類標識調査が行なわれ、44種5,914羽を標識した。
2. オオヨシキリは8月26日から10月26日まで90羽が標識された。
3. オオヨシキリは遅くなるにしたがって、個体数が減少し、10月上旬までにほとんどの個体が福島潟を去ってゆく。
4. 成鳥と幼鳥との割合は、初めは成鳥の方が多いが、だんだん幼鳥の割合が高くなる。
5. このことは、成鳥と幼鳥の渡りの時期の違いによるものと考えられる。
6. 成鳥と幼鳥の渡りの時期がずれるのは、幼鳥の換羽のためと考えられる。

参 考 文 献

尾崎 富衛 1973. 福島潟の植物. 福島潟・懸湖環境総合調査報告書(第一年次): 6~11. 豊栄市・东原町.  
 風間 辰夫 1973. 福島潟鳥類視測所について, かんばら, 36号: 15~20.  
 黒田 長久 1963. ムクドリ幼鳥の換羽, 山階鳥研報, 19: 34~47.  
 中村 司 1962. オオヨシキリの繁殖地に於ける体脂質の変化とその化学的性状について, 山階鳥研報, 18: 51~54.  
 Snow, D. W. 1967. A Guide to Molt in British Birds. British Trust for Ornithology. Field Guide No. 11.  
 山階 芳彦 1973. ソ連邦における鳥類研究及び鳥類保護の現況, 山階鳥研報, 39: 1~17.

附表1 福島潟で標識された鳥類とその数(1973年)

\* I: 8月26日~9月2日    II: 9月8日~9月17日  
 III: 9月22日~9月30日    IV: 10月1日~10月10日  
 V: 10月11日~10月20日    VI: 10月21日~10月31日  
 VII: 11月1日~11月6日

種名	I *	II *	III *	IV *	V *	VI *	VII *	Total
1. ムクドリ <i>Sturnus cineraceus</i>	—	—	—	10	3	—	—	13
2. コムクドリ <i>Sturnus sturninus</i>	—	—	—	1	—	—	—	1
3. スズメ <i>Passer montanus</i>	35	287	451	608	511	171	9	2,072
4. ニュウナイスズメ <i>Passer rutilans</i>	—	—	4	8	9	18	—	39
5. カワラヒワ <i>Carduelis sinica</i>	47	189	288	285	300	80	7	1,196
6. ベニマンコ <i>Uragus sibiricus</i>	—	—	—	—	—	14	6	20
7. アオジ <i>Emberiza spodocephala</i>	—	—	—	—	32	239	30	301
8. ノジコ <i>Emberiza sulphurata</i>	—	—	—	3	4	1	—	8
9. ホオジロ <i>Emberiza cioides</i>	—	—	—	—	—	7	6	13

10.	ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>	—	—	—	—	1	12	—	13
11.	カンラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	—	—	—	31	352	561	90	1,034
12.	オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>	—	—	—	2	36	156	22	216
13.	ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	—	—	1	1	—	—	—	2
14.	セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	—	—	—	—	2	—	—	2
15.	メジロ	<i>Zosterops palpebrosa</i>	—	—	—	—	—	—	4	4
16.	シジュウカラ	<i>Parus major</i>	—	—	—	1	2	12	1	16
17.	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	2	5	38	42	60	80	7	234
18.	アカモズ	<i>Lanius cristatus</i>	2	—	—	—	—	—	—	2
19.	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	—	—	—	—	1	—	—	1
20.	メボソムシクイ	<i>Phylloscopus borealis</i>	—	—	8	6	—	1	1	16
21.	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	—	—	—	—	8	29	21	58
22.	シマセンニュウ	<i>Locustella ochotensis</i>	1	11	51	26	3	—	—	92
23.	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus arundinaceus</i>	30	5	28	21	4	2	—	90
24.	ヨシキリ	<i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	4	1	75	69	13	8	—	170
25.	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	—	—	1	1	4	—	—	6
26.	シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	—	—	—	—	4	3	2	9
27.	シグミ	<i>Turdus naumanni</i>	—	—	—	—	1	2	1	4
28.	ノビタキ	<i>Saxicola torquata</i>	—	—	1	—	—	—	—	1
29.	ルリビタキ	<i>Erithacus cyanurus</i>	—	—	—	—	—	6	7	13
30.	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus</i>	—	—	—	—	1	—	—	1
31.	ノゴマ	<i>Erithacus calliope</i>	—	—	1	19	15	9	1	45
32.	ユマドリ	<i>Erithacus akahige</i>	—	—	—	—	1	—	—	1
33.	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	134	16	13	2	1	—	—	166
34.	ショウドウツバメ	<i>Riparia riparia</i>	1	—	1	—	—	—	—	2
35.	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	—	—	1	2	2	1	1	7
36.	アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	—	—	—	—	—	2	—	2
37.	アリスイ	<i>Jynx torquilla</i>	—	—	2	1	—	—	—	3
38.	オオコノハズク	<i>Otus scio</i>	—	—	—	—	—	—	1	1
39.	コノハズク	<i>Otus scops</i>	—	—	7	8	4	1	—	20
40.	カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i>	1	—	—	—	—	—	—	1
41.	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	—	—	5	1	—	7	—	13
42.	ヒタイナ	<i>Porzana pusilla</i>	—	1	—	1	1	—	—	3
43.	バン	<i>Gallinula chloropus</i>	—	—	—	—	—	2	—	2
44.	セキセイインコ	<i>Melopsittacus undulatus</i>	—	—	—	—	—	1	—	1

## 越後瞽女組織拾遺

鈴木 昭 英

(長岡市立科学博物館歴史民俗研究室)

Gleanings of Companys on Echigo-Goze  
(Blind-touring-singers in Echigo Province)

By

Shōei SUZUKI

### 序

かつて、関東・北陸から九州地方にわたる広い地域に存在していた盲目の遊行唄芸人「瞽女」(ごぜ)の組織は、諸国のものは早く衰退・廃絶したが、越後では雪国という風土の中に深く根をおろし、近代明治期に特に盛衰をみ、近年もなおその遺風をとどめている。民間歌謡・語りものの数少ない伝承者として、また消え行く風俗として、いろいろな方面から、種々な観点で注目され、脚光を浴びている。

しかし、これについての本格的な調査研究が従来十分なされてきたとは言えない。筆者はこれを憂い、なお瞽女稼業に従事した人たちが続々とこの世を去り、直接間接の伝承者が少なくなっている現状にかんがみ、何はともあれ組織の発掘と生態の解明に緊急を要することを痛感し、いささか数年来この仕事を手掛けてきた。すでに遅きに失している実感はぬぐい去ることはできないが、幸い、長岡瞽女と刈羽瞽女については先に報文をまとめ、発表することができた。<sup>註1</sup>

調査が進展するにつれ、なお越後では、長岡・刈羽・高山以外に、諸方に弱小の瞽女集団のあることが次第に判明してきた。本稿は、今年度特に集中的に実施した調査に基づき、越後の瞽女組織としては人数の上からおそらく4、5番目に挙げ得ると考えられる中越の三条組瞽女、および上越の土底組をはじめとする中頸城・東頸城の浜の瞽女・山の瞽女、糸魚川の町の瞽女など、小さな瞽女集団を紹介し、越後瞽女組織解明の一助としたいと思う。表題に拾遺としたが、これをもって越後瞽女組織の終わりを意味するものではない。すでに、下越地方にいくつかの組織の存在が確認されているし、今後も調査を続行・拡大する予定である。

## I 三 条 組 瞽 女

### 1. 組織の概観

三条組というものは、現在は南蒲原郡から三条市・加茂市域に属する地方、昔は三条町の在方、すなわち南蒲原郡の農村部出身の瞽女を中心に結成されていた瞽女仲間である。瞽女の芸は師資相承で伝えられる。三条組瞽女は比較的早い時代に衰退・解散したから、調査で浮かび上がった瞽女がすべて一本の師弟系譜の線には結びつかないが、江戸末期から現在生存の人を含めて、確認された瞽女は総数16人である。その中には、この組の瞽女の

巡業活動の結果として、県内では魚沼地方、県外では群馬や遠く福島県相馬地方からの加入が認められるが、これらはいずれも越後にやってきて、南蒲原の師匠の家に住み込んだ人たちであった。

三条組簀女には、古い時代のことは分からないが、少なくとも明治期以降、長岡組の支配所、大工町の簀女屋のような本部はなかった。加茂市後須戸に住む元三条組簀女土田クニさん（明治26年生まれ）は「三条組には長岡の簀女屋のような学校はなかった」と言っている。三条組とはいうが、三条の町にはこの組の簀女を取り締まる家もなかったし、簀女頭がいたわけでもない。同じく見附市新町に住する駒沢ヨイさん（明治25年生まれ）も「三条の町の中にはゴゼサはいなかった。いないことはなかったかも知れないが、おらの組には入っていないかった」と言う。こうした言葉に、三条組の組織機構の一端がうかがわれる。

三条組は、三条周辺部に形成された簀女集団であって、特定の簀女頭や支配所がないという点では、刈羽簀女の組織に類似している。ただ、刈羽簀女の場合、組織構成員が刈羽全部を主体に散在していたが、刈羽中心の町柏崎に本部があったわけでないから、これを柏崎組とは言わず、刈羽組と称していた。そうした観点からすれば、三条組は本来南蒲原組といった方が適切かも知れないが、これでは世間への通りも悪いし、ばく然とするから、幸い三条の町を取り巻く周辺地域に散在していたので、これを三条組と称したと思われる。

しかし三条組という名称が果たして古くからの呼称であったかどうかは分からない。土田クニさんは「だれかに、どこの組の人だ、と聞かれたら、私たちは三条組だなどと言っていました」という程度であるから、明治も早い時代のことは知ることができない。三条組よりも、むしろ「下（しも）組」というのが一般的な呼び方であったようである。

下組というのは、蒲原地方の簀女仲間によく使われた呼び方であって、彼女らは長岡の簀女屋に所属する簀女たちを「上（かみ）組」と称するに対し、その配下に属しない下の地域の簀女をいうのであった。その下組というのは、単に三条組だけに附与された呼び名ではない。月潟や小須戸・大郷・新津・新発田などにも、簀女の師弟系譜集団の存在したことが確認されるが、そうした三条組と組織を異にする集団もすべてこれを下組と称している。長岡よりも地域的に下にあるから、それでよいのであるが、断っておきたいことは、近代における長岡簀女の分布圏は下越にも及んでいるわけで、この三条組簀女の分布地域もその範囲の中に入っており、南蒲原だけを取り挙げても、長岡系簀女と三条簀女の両者が入り組んで存在していたのである。そして、さらにこの地域より下の方、新潟方面まで長岡簀女は分布していたが、たとえ三条より下であっても、長岡系簀女はすべて上組と語っていたという。そのことは、長岡簀女が、下の方の簀女仲間にとっていかに大きな存在であったかということを知らしめる。

そうしたことに加えて、さらに検討しなければならないことは、この三条組簀女が、それよりも大きな集団である「お講組」に所属していたという事実である。

お講組というのは、簀女の本尊妙音菩薩を祭る妙音講に加入する講衆組織であって、三条組簀女はほぼ全員がこれに参加していたとみられるが、それ以外にもこの講衆に加わっている簀女があった。古い時代、どのような形態でいかなる人たちが行っていたか、今となっては判断もしかねるが、明治末期に、駒沢ヨイさんや土田クニさんが若い時代、三条組簀女と同じお講組であった西蒲原郡の太友（現在新潟市）や貝柄（現在西川町）の簀女の家で行われた妙音講に参加したという。しかも、両女とも、昔はお講組は大勢であったと言っている。三条組だけで妙音講をしたのではなかったのである。

駒沢、上田両女の記憶していた、三条組以外のお講組員は、わずかの人数であるが、それは遠く新潟近辺まで及んでいる。そして、これ以外の組員の出所は明らかにされていないが、二人の話によると、このお講組は南蒲原・西蒲原の簀女が中心となって結成されていたらしい。西蒲原郡には、長岡組以外に月潟の簀女のような弱小の集団があったが、これはお講組に入っていないかったという。

三条組といわれる三条周辺の簀女たちは、いくつかの師弟系譜に分けられるが、それらが近親地域にあって、

組織構成とその維持運営に独立した共同の自治を持つもので、その稼業においては同一グループを形成する場合が多く、弟子の交換・交流も盛んであった。ところが、この三条組より外のお講組衆とは、顔を合わせるのは妙音講のときばかりで、巡業などは別個に行っていたという。

三条組とお講組の関係は以上のようなものである。元三条組醫女の生存者が体験し、そうと思いついてきた意見をもとに判断したわけであるが、彼女らはせいぜい明治後期の状況を述べるのみで、それ以前のことは詳しく知らない。妙音講は、後に詳述するように、毎年開催するための特定の施設がなかったから、年あきぶるまの醫女の生家で行っていたが、その醫女にとって一生一代の大切な行事でもある。したがって、その妙音講に集まる醫女仲間を「お講組」と称していたころをみると、あるいはお講組が古くからの一つの醫女集団を示すもので、三条組は大きな結合体から分離した小地域的な集団で、後代の呼称であったかも知れぬ。はたまた、三条周辺に密な集団があるから、西蒲原に点在するお講組員は、南蒲地方より飛び火のごとく分かれ出たと言えるのであろうか。そうした難問は、今後の調査研究によって明らかにしうることを期している。

## 2. 師弟系譜とその事歴

三条組は、前項で述べたように、南蒲原・西蒲原のお講組の中の1集団とみてよいが、先ずその師弟系譜と各醫女の事歴を聞いた輪席で紹介することにした。四つの系譜が現われている。

### (1) A 系

三条組で、現在確認される最も古い世代の師匠は、南蒲原郡柴村芹山の五十嵐家（屋号三郎兵衛）から出た人だが、その名は分からない。この師匠については、元三条組に所属した駒沢・上田両女、ならびに新発田市在住の小林ハルさん（明治33年生まれ）の3人はいずれも知らない。私が、この人の弟子と思われる同村出身の藤原ツマの事歴を調査することによって現われ出した醫女である。

三郎兵衛のおじいさん五十嵐三郎氏（明治30年生まれ）によると、氏が子供のころ、その醫女はあさんは年寄りで商売には出歩かず、家で寝起きしていたが、もうろくして、便所へ行くのを間違うほどになっていたという。商売に出ていた時代、五十嵐家の裏にある藤原家から出た醫女と、隣村善久寺の「弥助ろん」の醫女と3人で歩いていたが、自分の家の醫女が一番年寄りで親方であり、藤原家の醫女と二人は目が見えなかったが、善久寺の人は少し見えて手引きをしていた。しかし、後に、五十嵐家の醫女は年が寄り過ぎて、他の二人が連れて歩くのをいやがるようになったらしい、という。さらに、三郎氏によれば、旅稼業は会津・米沢方面によく行ったらしく、会津から買って来た吸い物わんが今も残されているし、また相馬籠の茶わんがあるところをみると、相馬にも行ったようだという。

三郎氏は、この人の名を記憶していないし、師匠がだれであったかも知らない。没年については、三郎氏が16・7才のころ、中之島の野口に秋若い衆に行っていたとき、12月25日の出替わりの前日に亡くなったという知らせが来て、大急ぎで帰ったという。大水で作が流れた年であった。五十嵐家の善提寺、鬼木の蓮照寺の過去帳に、釈尼妙門という人で、大正2年1月24日、84才で没した叔母という記載のあるホトケがある。おそらく、これが醫女に当たる人であろう。12月と1月の違いは旧暦と新暦の採用上の相違である。かくして、五十嵐家の醫女は天保元（1830）年の生まれということになり、幕末期から明治前半にかけて活動した人であった。

ところで、駒沢コイさんは、彼女が記憶に残る一番年上の人南蒲の北潟・大面から出た人であったという。コイさんが21才の春（明治45年）、三条在井戸場の生家で妙音講をつとめたとき、呼ばれてきていたが、年齢は7・80の人であったが、二階から小便をたれて降りてこられたことを記憶している。その後間もなく亡くなったらしく、コイ女の妙音講に来たのが出納めだったかも知れないという。

三条組で最も年配の人ということで、大面と北潟を現地調査したが、この両村とも醫女が出た家は、少なくとも

明治時代以降はなさそうである。北潟では、長老格の小出辰治郎氏（明治21年生まれ）が同村に瞽女が出たことを聞かないというし、大面では、坂爪勘一郎氏（明治25年生まれ）に聞いたが、やはり同村からも瞽女が出たことを知らないという。その上、土田クニさんも、自分の出ている時代には北潟や大面から出た瞽女はいなかったという。そうしたことを考慮に入れると、駒沢さんは先の片山の五十嵐家の瞽女を誤って北潟あるいは大面と聞き違え、そう思い込んできたのではなからうか。年齢といい、もうろくして小便をたれていたというあたり、五十嵐家の瞽女らしく思われるのである。

そのほか、小林ハルさんは、三条組の前は柴村小古瀬から師匠が一人出て、その人が亡くなって親方様が三条の人に移ったというが、この意見はまゆつば物であるようだ。小古瀬の村で聴取したが、明治時代からこの方瞽女は出ていないという。

五十嵐家の瞽女の弟子というのは、「藤原文造」家から出た瞽女で、名をツマという。藤原家から嫁して三条市に住み、ツマのめいに当たる山井キシさん（明治40年生まれ）によると、ツマは生まれて間もなく風眼にかかり、全盲となったが、五十嵐家の師匠に弟子入りした。後に瞽女稼業をやめ、いったん縁づいて子供を一人もうけたが、旦那が亡くなり、生家にもどってきた瞽女の商売に出歩いていた。その後、せがれが大きくなったので引き取られ、三条の町に住んだが、大正8年、70才くらいで亡くなったという。三条の町にはいま家がない。上山クニさんは、彼女が結婚して（大正4年、23才）間もないころ、70才過ぎて亡くなったと言っている。

駒沢コイさんは、藤原ツマについて「年寄りであったが、芸もないし、声も悪く、泣き声と同じで、弟子のツマに連れてもらって歩いていた。師匠の資格はなかった人」と評している。また、小古瀬の佐藤テヨさん（明治42年生まれ）も、子供のころよく見かけたが、文造の瞽女は年60くらいで、明はうたわれず、三味線だけ弾いていたと言う。

片山の藤原ツマの弟子は、隣村善久寺の武石ツタである。本名をサヨという。慶応4年4月12日生まれ、昭和12年10月28日、70才で没している（見附市案崎1丁目、武石家にあるツタの位牌）。目は少しは悪かったが見えた人で、先に述べたように、大師匠五十嵐家の瞽女や師匠藤原ツマの手引きをしていた。そして、かなり大きくなって芸を習った人である。だから覚えた芸は多くないが、声の質がよく、目の見えることと相まって、人に対する対応ぶりがよかったから、巡業先で人気があり、ずいぶん道宝にされたという（駒沢コイさん話）。そのような気立てのよい人であるから、弟子が3人もついた。この人の旅回りはおう盛で、積極的に遠方地に旅をしたことは後に述べるであろう。

ツタは51・2才の大正8・9年に、瞽女をやめて家を構えた。自分と姉との二人姉妹であったが、生家の跡を継いだ姉の三男を養子にもらい、嫁をとらせた。初めは見附の畷崎に1年住んだが、その後案崎1丁目（もと三貫野）に移った。ツタは瞽女稼業をしている時代から神経痛を病み、手足も動かしがたかった。家を構えた後は嫁のトラ女が着物の帯まで締めてぎゅっていたという（武石トラ女話）。

ツタの弟子となったのは、南魚沼六日町の出身のチョウと、南蒲下旧村大平の西川セツ、それに同じ下田村駒込出身の藤家クニ、つまり後の土田クニさんとの3人であった。

姉弟子のチョウは、片目が少し悪い程度であったが、母親がいなく、育てるのに大へんだからということで、まだ4・5才の時にツタがもらってきたのであった。ツタが巡業して話をもとめたのであろうが、駒沢コイさんがまだ瞽女になりかけのころ、ツタがチョウを背中の荷物の上に乗せて、井戸場へ連れてきていたという。コイさんが9才のとき、13・4才の人であった。

チョウは幼いときからツタに育てられたから、芸は達者で、よい声がいくらでも出た人であったという。しかし、大師匠、師匠へと伝えられた芸が豊富ではないから、それほど沢山の唄は知っていなかった。28・9才のとき相馬に嫁に行った。師匠と相馬地方に旅稼業に行っていたが、それが縁で亭主になった人と恋愛し、結婚した。そして、亭主はセトモノを売る商売をしていたが、後に夫婦で越後に来て、見附で問借りの生活を送り、相



馬から焼き物を持ってきては売っていたが、子供ができ、その子が7・8才ほどになったころ、どこかへ移住していった。コイさんは、それ以後全然会っていないという。

大平の西川セツは、2番目の弟子である。大平の西川家の過去帳に、法名無室智生信女、明治42年6月7日没とあるのがその人である。俗名も享年も記載していない。当主兼松氏によれば、目はソコヒで悪くしたが、少しは見えたらしい。前途を悲観して、自ら命を絶ったと伝える。駒沢コイさんによれば、年は自分と同じくらいであったが、自分より遅く瞽女になった人、コイが9才のときセツは14・5才で組に入ってきた。『春語り』には一緒に回ったし、用事のあるときは井戸場にも来たという。いい声の持ち主で、米沢歩きを2・3度したが、「いい声の瞽女さん」と言われ、人が足をとめて聞いたという。人気があって、米沢の人がわざわざセツのためにお膳をこしらえ、持ってきて食べさせてくれたこともある。セツが亡くなったあと、コイさんなどが旅回りにいくと「セツさんにお膳をつくったが、いらっしやらないか。アキヤセツさんいないが？」とがっかりさせるほどであった。ところが、若い18・9才のときに、男のためだったか、魔がさしたというか、自殺してしまったという。土山クニさんは19才で亡くなったと言っている。明治24年に生まれ、19才で自殺したのであろう。コイさんより1才年上であった。

ツタ師匠の末弟子は、駒込出身の藤家クニさんであるが、クニさんは入門後3年にして、後に述べる後須田の樋口フジの弟子になり、そこで瞽女として大成するから、後に詳述したい。

## (2) B 栗

この系統で確認される古い師匠は、三条市三ツ柳から出た長橋エンである。生家は屋号を「新宅」と称したが、大正末年に東京へ引越して、今は家がない。長橋家の旦那寺であった栄村大面の長念寺の過去帳には、釈妙庵、長橋定藏師エン、大正5年9月17日、62才没とある。安政2（1855）年生まれである。

駒沢コイさんによると、生家は三ツ柳の旦那様の分家であり、その家の姉娘であったから、瞽女の唄だけでは足りないで、芸者のところへ通って「札稽古」した人という。札を買っておいて、それを持参して習った人である。したがって芸は達者で、沢山覚えた。全盲だが、ばかに品がある人で、全持ちの娘だから、めったに門付け商売などに出なかったという。コイさんの師匠樋口フジはこの人の弟子である。コイさんの若いころ、エンはもう商売に出歩かないので、フジの代りに井戸場に来て4・50日稽古をつけてくれた。コイさんなど孫弟子は、この人を「お師匠様」とか「おかあさん」と呼んでいた。

三ツ柳のエンの弟子には、井栗のマチと後須田の樋口フジの二人がいた。

三条市井栗の山辺「惣助」から出たマチは、同家の過去帳に法名満月照暗信女、明治35年12月没とある人で、俗名も享年も記載はないが、この人であらうという。いかにも盲人にふさわしい法名である。家の伝えでは、30才くらいで亡くなったという。

同村の小柳作市氏（明治22年生まれ）によれば、氏が子供のころ、マチが親方株で若い二人の瞽女を連れて村を門付けし、夜は生家を宿にして近所の人に唄を披露していた。作市氏などはまだいたずら盛りで、マチの一行が回ってくると、冬で雪のあるころには雪玉を投げ当て喜んでたという。マチは両眼とも見えない人で、声はよかった。惣助は水呑百姓ではなく、自作農（1町5反以上の作人）であったから、盲ながら見識ぶったところがあった。作市氏の父（明治2年生まれ）より3・4才若い人であったという。また、駒沢コイさんは、9才、明治33年に井戸場の生家入門の際名ぶるまいをしてもらったが、そのときマチも来てくれた。そして間もなくコイさんが11才ころに亡くなったという。家の伝えや小柳氏、コイさんの話は合致しており、マチは明治6年ごろ生まれ、同35年、30才ほどで早死したと言える。

マチには、福島県の相馬からもらってきた子供があった。目が見えるから手引きにでもしようと思い、連れてきたのである。その子にツナという名をつけた。しかし、しばらくしてマチは病気になり、面倒がみてやれぬの

で、新津の替女キノにくれてやった。キノは三条組の人ではなかったが、マチが米沢巡回の際、よく一緒になって知り合っていた。師匠が替わって、キノはツナにタケという名をつけた。キノはこのタケと、山形県中津川からもらってきたツタという弟子と、3人で1軒の家に住み、そしてこの3人組で巡業をしていたという(以上駒沢コイ女話)。

井栗のマチと姉妹弟子になる加茂市後須田の樋口「三六」のフジは、位牌によれば大正11年9月14日、46才没である。フジの弟増意氏(明治29年生まれ)によれば、7人きょうだい一番上の姉であった。明治10年に生まれたが、生後間もなく盲となったらしい。7・8才ころ三ツ柳の師匠に入門した。駒沢コイさんによると、樋口家は身上がよい家で、芸を一杯得た人である。母屋についた中門の二階に住み、冬になると師匠がきてそこで稽古をつけてくれた。29才ころ妙音講をつとめたらしく、かなり大勢の替女がきて泊まった、と増意氏が親から聞いている。井栗のマチは早く死んだが、善久寺のツタとは仲がよく、かなり後まで巡業と一緒に出ていた。ツタが見える人だから、フジを連れて歩いたともいう。そして、フジには弟子が4人ほどできた。井戸場のコイ、三貫地のハル、群馬県からもらったトシコ、それに駒込のクニである。クニを養子にもらう予定であったが、クニが結婚したことから、それを果たせなかった。下の病気で亡くなったという。

井戸場出身の駒沢コイさんは、旧姓を山田と称し、明治25年1月8日に生まれ、4才のとき風眼にかかり、失明。9才の秋にフジに弟子入りした。当時フジは24才。二人はいとこであった。そして、キヨという替女名をもらい、井戸場の生家で「名ぶるまい」をしてもらった。三条組の師匠や弟子替女が14・5人きてくれたという。

コイさんは弟子入りしたとき、キヨという名をもらったが、その名はよくないと、フジはイツという名をくれた。そして入門して3年間は芸を教えてもらわなかったが、11才のときから、師匠フジが商売に出歩かない冬の時期にきて、5・60日間続けて教えてくれた。そして一緒に旅に出るようになったが、明治45年、21才の春に妙音講を生家でつとめた。このときは、お講組の人が沢山やってきて祝ってくれた。しかし、くしき因縁があって、その年の秋に見附市紙越の人と結婚することになった。生涯たった1度の会津巡業をしたが、その際知り合ったのが縁となった。主人は按摩、鍼医の駒沢九左衛門という人であった。見附の学校町に家を構え、子供も生まれたが、間もなく生活苦から再び米沢の方へ商売に出かけるようになった。そして、関東大震災の年、大正12年夏に出かけたのが米沢歩きの行き納めとなった。32才の年であった。師匠のフジは前年の9月に亡くなっていたのである。その後、主人が病気で仕事をしなくなったので、コイさんは代って按摩稼業に転じ、5・6年その

道の商売をした。昭和6年ころ主人は亡くなったが(以上本人話)、今も学校町に住み、実子健造氏夫婦、孫さんたちと安泰の生活をしておられる。

小林ハルさんは、三貫地の出身で明治33年1月14日に生まれた。同女の話によれば生後百日くらいでソコヒを患い、両眼がつぶれた。5才(明治37年)でフジ師匠に入門し、スミという替女名をもらった。井戸場に8才年上のコイさんが姉弟子としていたが、ハルが入門後間もなく下弟子のトシコが入ってきた。師匠から三貫地の家にきてもらい稽古をつけてもらった。最初に「岡崎女郎楽」と「松づくし」を習い、7才になって三味線を習った。9才のとき初めて門付けに出た。子供のオモチャ三味線を携えて、師匠について回ったという。

こうして11年ほど、師匠フジについて稽古し、一緒に商売に出ていたが、16才の年(大正4年)、師匠に「お前の声は



駒沢コイさん近影 (撮影/48.9.13)



死んだ馬より悪い」としかられるのが本で、師匠から暇をもらうことになった。そして、その年内に長岡簀女中条組の傘下に入る五千石組のハツジサワという師匠に弟子入りした。それより長岡簀女の一員としての生活が始まる。芸の稽古は、サワから生家に来てつけてもらう場合もあったが、長岡の簀女屋に出かけることもあった。山本ゴイが直接教えてくれた。自分の家に師匠から来てもらうと、毎日ごちそうを賄い上菓子をだし、稽古代はその当時の金で1日50銭、そのほか段物1段覚えると10銭払う必要があった。しかし、簀女



三味線を弾く小林ハルさんと四郎丸組簀女土田ミスさん  
(撮影/48.1.14 於佐神村出湯石水亭)

屋なら、食い扶持の米や夜具布団を持参するから、宿泊料は1日25銭と決まっており、女ご衆が賄ってくれて、山本ゴイと同じお膳を食べたという。ハルさんはサワのところを7年間弟子入りしていたが、その間毎年、12月～1月の2か月間簀女屋に習いに行った。簀女屋の妙音講には、当時360人ほどの簀女が集まったという。

サワにはハルと加茂市前須田出身の外石ヨシ（芸名ハナ）という二人の弟子があったが、体が弱く、大正10年に亡くなった。ハルが22才のときであった。そこでハルは、これまた組の違う白根市上大郷の坂井キイ（芸名ツル）という簀女に弟子入りした。当時35・6才の人であって、ハルが仲間に入ったときはほかに弟子もあった。しかし、キイに弟子入りしていたのもわずかの期間で、26才のときに独立した。そして、サワ師匠に入門していた当時の下弟子外石ヨシや、白根市犬掃新田の田辺ナカ（芸名テイ）、刈羽小国在のシカノ（芸名ミドリ）、中蒲村松町のハツイなどの弟子を持って、5人で商売をした時代があった。が、それらも次第にやめたり結婚したりして離れた。35才のとき（昭和9年）、サワ師匠入門時代に一緒に組んで巡業したことがある新潟市山木戸出身の土田ミス女と再会し、かなり長く二人で商売したが、最後には一人になり、北蒲佐神村出湯に住んで、湯治客を相手に、また近くの村祭りに唄っていた。しかし、昨年廃業し、新発田市の養老院に移った。三条組・長岡組、そして大郷の簀女と、組の違う3人の師匠について芸を習い、つい最近まで簀女商売を続けていた点で注目される人である。<sup>註2</sup>

ハルに次いで、フジに弟子入りしたのは、トシコ（本名ハル）という群馬県生まれの子供であった。母親が栄村曾根の出身で、上州に嫁いだが、主人が死亡、その子を育てることができないということで、フジのところへ連れてきて、連れて行ったらしい。ヨイさんが17・8才のころ、その子は6・7才であった。目はよい人で、ヨイさんも芸を教えたことがある。しかし、フジのところへいた期間は短く、14・5才になるとどこかへ出て行ってしまった。

土田クニは旧姓を藤家といい、明治26年4月16日、下山村駒込に生まれた。12才の春、風眼にかかって左目を悪くしたが右目は助かった。13才、明治38年に善久寺のツタに入門し、ヨキという簀女名をもらった。冬の12月から翌年の正月まで、師匠から家に来てもらって稽古をうけたが、わずか3年でツタと仲のよかった樋口フジの弟子となった。ツタも、その弟子もみんな日の見える者ばかりであったが、フジの方は、フジも弟子のヨイ・ハルも日がみえないから、稼業するに不自由であった。それで、フジがツタに交渉し、クニをもらうことにしたのである。フジは新たにミヨシという名前をつけてくれた。今度は樋口家に住み込んで稽古してもらった。といっ



土田クニさん近影 (撮影/49.2.22)

でも、トシコのようにもらいぎりとなったのではない。冬の期間だけフジの家に住み、終わればまた駒込の生家に帰った。そして、師匠や師弟子などと旅商売に出る年が続いたが、年季があかないうち、23の年(大正4年)に替女をやめて、後須田出身の土田耕一氏と結婚した。

主人は生米芸好きの人で、クニさんが同じ村の樋口家に入りしていた関係で、その唄も聞き、相思相愛の仲となって、ついに結婚したのである。そして今度は、主人などと共同して、唄と踊りを興行する田舎芸人の一座をつくり、替女時代に歩いた旅先を遠く米沢地方まで稼業に出かけた。替女で培った芸の才能を、結婚後も生かし、さらに新たな稼業を案出し、人気を博した点は、替女の行く末の特異な例として注目される。その商売から身を引いたのは、わずか5、6年前のことであった。

### (3) C 系

三条組替女で、米村尾崎の土田家(尾号、藤内)から出た、芸名ヤスという人があった。この人について、コイさんもクニさんも、自分たちが組に入った時代は一人でいて、師匠がだれであったか知らぬし、弟子もいなかったようだという。三条組替女であったことは間違いない、樋口フジとは特に親しくしていたらしい。コイさんの話では、年寄りのおヤスは盲目の人で、よくめいから手を引いてもらって、コイの生家へ来ては泊まっていった。米ると、退屈だと言っでは、ぞうきんをさしていた。また春語りには、フジとクニと3人で組をつくって商売していたという。クニさんによれば、それは自分が13才から17・8才までの間であったと言う。

尾崎の生家、土田家のおじいさん十一氏(明治37年生まれ)によれば、替女となった人は俗名を宮沢ミセと称した。その人が亡くなったときの『病氣見舞香典齋米野菜控帳』に「昭和四年三月二十五日 行年七拾二才 宮沢ミセ」とあり、土田音七(十一氏の実父)が葬式を取り持っている。ヤスは芸名で、安政5(1858)年生まれであった。

十一氏の話によると、土田家は2代前までは宮沢を名乗り、2代前の戸主は藤太郎という人であったが、その跡継ぎの婿として燕在大曲出身の土田音七が入った。ところが音七は放とう癖があり、かけ事の好きな人であったから戸籍に入れなかった。そのうちに藤太郎が死亡し、そのまま、以後は土田を名乗るようになったという。

ミセは、幼いとき、子供がいたずらして蛇を投げつけたのに驚いたか、追っかけられて転び、三角石に顔をぶつけ、顔から血が出て、それが目の中に入って両眼とも盲になったという。これは十一氏が本人から直接聞いた話である。感のよい人で、針のみぞを通したし、唄も上手で、この辺りでは「藤内替女」と言って知らぬ者はなかったという。十一氏が子供のころ、商売をやめて家で子守りをするようになった。明治末に替女稼業を中止した人と思われる。

この系列に属する替女は、ヤス以外全く分かっていない。先祖師匠を探ることは、今となっては不可能であろう。狐鵲のごとき存在であるが、三条組であることはいささかも疑いない。

### (4) D 系

駒込コイさんによると、三条市鶴田出身のおシゲ替女も三条組の人であったという。コイさんが若いとき、商売では一緒にならなかったが、妙音講で顔を合わせた。少し目の見える人で、20才ほど年上のように見えた。師

匠がだれで、姉妹弟子があったかどうかは知らないが、隣村の吉田にヒサという弟子がいたということは、聞いたことがあるという。ただし、上田クニさんはこの二人の警女を知らない。

おシゲの出た家というのは、東歸田の佐藤惣一郎家である。佐藤家にある位牌や菩提寺西本成寺妻住院の過去帳には、法名を親近院妙諦といい、大正9年1月24日の没になっているが、俗名も享年の記載もない。佐藤家から東本成寺の内山家に嫁いだキミさん（明治44年生まれ）や、佐藤家に嫁入りしたアイさん（明治43年生まれ、昭和15年嫁入り）によると、警女になった人はワカといい、祖父の妹であった。北蒲原の中条でゴゼンボウして、一人暮らしをしていたが、その後警女をやめて家に帰り、幼いキミさんをかたってくれた。そして、大正9年、この年は大感冒が猛威をふるった年で、多くの死者を出したが、シゲもこれにかかって倒れた。1月24日、昼食後、お酒を1杯飲んで、明をうたいながら死んで行った人という。享年は、それほど大年寄りではなく、50才ほどであった、という。コイさんの話と合うことになり、明治4・5年ころに生まれたのであろう。

コイさんが、おシゲの弟子という三条市吉田のヒサは、五十嵐「市左エンドン」から出た人で、ヒサのおいの嫁である同家のヨシさん（明治31年生まれ、19才入家）によれば、養女は俗名フキといい、9才のときにおかに盲となった。鶴田の師匠に弟子入りし、7・8年稽古をうけ、会津の方によく旅回りをした。そして後に、会津から子供をもらってきて、自分の子のようにして育て、手引きにしていた。かなり長く商売していたが、ヨシさんに子供ができてから、やめて子守りをしてもらったという。したがって、大正中ごろまで警女稼業を続けた人であった。同家の位牌には、昭和31年5月23日、87才で没するとある。明治3年に生まれたことになり、シゲとヒサが師弟関係にあることは、コイさんや五十嵐家の伝えにあるから間違いはなからうが、ヒサは師匠よりわずかばかり早生まれのように思われる。

この系譜の警女は、シゲとヒサの二人だけであって、シゲの師匠がだれであり、姉妹弟子があったかどうか、そうしたことは今のところ不明と言わざるを得ない。

以上、三条警女として確認された人たちを全部挙げ、その師弟系譜によりながら各人の事歴を紹介してきた。これを分かりやすくするため、図式化すれば次頁のようになる。

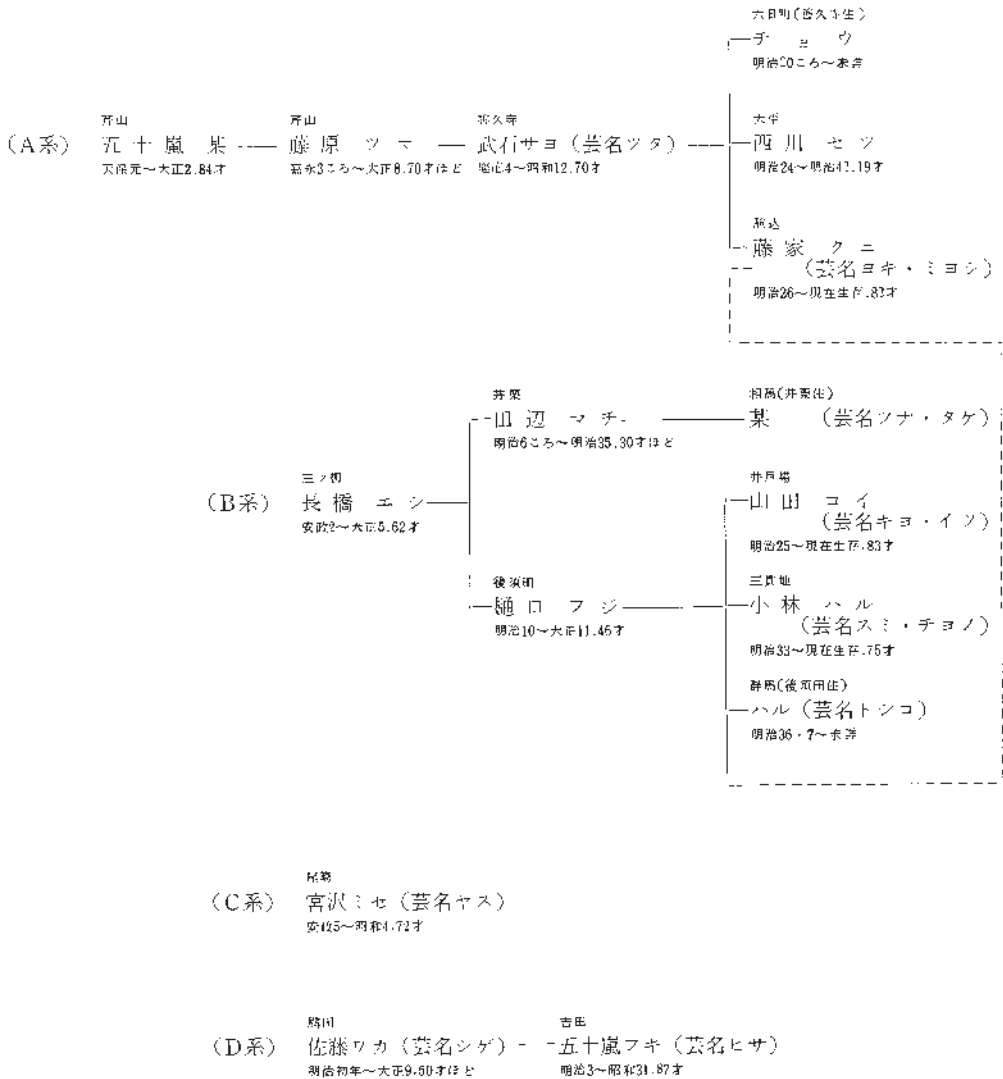
四つの系譜は、A系が4世代6人、B系が3世代8人（1人A系と重出）、C系1世代1人、D系2世代2人で、総数16名を挙げることができた。A系・B系が世代も人数も多いということは、たまたまその系列の最終時代に生存者がいて、比較的詳しく聞き取りができ、C・D系にはそれがいないためであるが、後者が三条組警女の衰退期に当たって弟子を受け入れなかった、つまり発展を示さなかったためということも言えそうである。師匠に弟子を養成するだけの力量があるか、芸がうまいか、人に好かれるたちであるか、あるいは家庭が受け入れ体制にあるかどうかなど微妙な点が影響するのである。

前項で述べたことであるが、この浮かび上がった師弟系譜上の警女たちは、生家が大体三条周辺の農村部である。南魚沼、県外の群馬、福島県相馬の3人の警女が、この地域から外れるが、しかしいずれも師匠がもらい受けて自分の家で育てた人たちである。三条周辺に住み、その一員として行動をともにしている。三条組と言われる由縁がそこにある。

これら四つの系譜は、同じ一つ組として親交を結び、上田クニさんの例のように、師匠が話し合って弟子を替えるというようなことも行われ、巡回稼業も行動をともにすることが多かった。三条組仲間であるから当然のことであるが、この中で、D系のみが割合に早く他の組と離れたらしい。

この三条組の師弟系譜の組み立ては、駒沢コイ・上田クニ・小林ハルの3名の生存者からの聴取が主体となったが、3名とも明治後期に入門しているから、それ以後の知見と経験に基づく発言と言える。ところが、それは一般に、警女芸の不況・下落の傾向をたどっていた時代であり、彼女たちはまだ幼少であったから、記憶に残らぬもの、あるいは忘失したものがあろう。それより古い時代のことはなおのこと、ほとんど実態が分からない。した

三條組師弟系譜



がって、この四つの系譜がどのように結びつくのか、どのような姿に遡源できるのかは見当がつかない。

そして、元来、単なる師弟関係だけで、全ての系譜・系統を総括する警女頭やその本部としての特定の家がなかったわけでないから、三條組警女は、大正時代に入って次々と死没、あるいは結婚、家庭の事情などで稼業を廃止し、家出する者もあって、組警女相互の連係がなくなり、巡業活動はほぼ大正末で終わったのである。むしろ、この組を離れた小林ハル女が、長岡系警女の親方、大郷組の親方と師匠を移りかえ、その後独立して最近まで警女稼業を続けたし、結婚した土田クニ女は、警女稼業をやめたが、叫や踊り、芝居の芸に身を転じ、警女時代の経験を踏まえて、近年まで旅回りをしていたことは、警女仲間三條組の中のことでないが、その歴史を語るには忘れてならないことであろう。

### 3. 妙音講とお講組

#### (1) 妙音講

どこの簀女集団でも、大抵1年に1回(2回するところもある)、音曲の神で簀女の守り本尊といわれる妙音菩薩を祭る。これを妙音講と称しているが、三条組の妙音講は3月17日(新暦4月17日)に行われた。しかし、冒頭に述べたように、これは三条組だけでやったのではなく、西蒲原は新潟近在まで含めた広い地域の簀女の法会組織「お講組」の講衆によって行われた。

その上大切なことは、お講組の妙音講は、単に仲間が年1回妙音様を祭るというだけでなく、年季修業が終わって一人前になった簀女の年あきぶるまいと併合して催されたことである。したがって、その会場は年あき簀女の生家で行われるのが普通であった。土田クニさんは「妙音講は1代に1度は必ずやることになっていた」と言い、駒沢コイさんは「年季奉公が終わり、出世ができたときにするもので、年あきぶるまいと妙音様の祭りとを一緒にやるということだ」と言っている。

簀女の生家に仲間の簀女が集まって振る舞いをするのは、入門当初の「名ぶるまい」と弟子入り修業最後にする「妙音講」の2回だけである。名ぶるまいというのは、入門した際、師匠が大概は親との間に師弟契約を結び、師匠が弟子にもらったしるしに自分の好きな名をつける。これが簀女名であり、芸名ともいわれるもので、これをつけたとき仲間を呼んで、この子はだれの弟子になった、どういう名をつけたとみんなに披露する。その振る舞いが名ぶるまいであった。

名ぶるまいは、入門後そう遅くならぬうちにする。簡単な御馳走を出すもので、親類衆を呼びたい人は呼ぶ。そう格式ばった、大げさなものではない。妙音様は飾らないという。もちろん式目も読まない。

ここで重要なことは、三条組の親方に弟子入りした簀女の名ぶるまいは、三条組簀女仲間だけが集まり、振る舞いをしたもので、そのほかの人は、たとえお講組であろうと、三条組以外は参加しなかったことである。ただしこれは、三条簀女の生存者3人が入門した時代からそうだったというだけで、それ以前のことはなんとも言えない。

名ぶるまいは、同じ三条組簀女でも、師匠が身柄をもらい請け、育てながら芸を教えている内弟子などはあんまりやらなかったというし、組織の衰退期には、これをする人が少なくなっている。クニ・ハル両女ともこれをしていない。

名ぶるまいに対し、妙音講の方は、三条組にプラスアルファのあるより大きな組織のお講組の簀女が参加し、年あき簀女の生家で、その家の親戚や近くしている人も呼んで、盛大な振る舞いが行われた。妙音講は3月17日と決められていたが、これも占くは、長岡組・刈羽組と同じように、3月7日であったかも知れぬ。

その大要は次のとおりである。座敷の床の間に妙音様の掛け軸を掛け、御神酒や御飯その他の供物を供え、開始となれば先ず旦那寺の僧侶から式目の朗読・読経がある。勲行が終わればお斎、酒・肴の振る舞いである。宴会もたけなわになると、唄・三味線芸の披露がある。それを見聞しようと、近在からも大勢の人が押し掛ける。唄は高座の上でうたわれる。最初は師匠ときれいに着飾った年あき簀女が登る。年あき簀女にとって緊張の一時である。一人前となったあかしの唄であるから、得意の曲目を演ずる。年あき簀女に続いて、次には順次簀女が二人ずつ出て幾組かお祝いの唄をうたってやる。相向かいに坐ってやるが、その組立ては親方が決める。いずれも、このときの唄は長もん(長唄!)をうたうのである。

年あき簀女の晴れがましい祝いについて、駒沢コイさんは「普通の人嫁さんになるようなもので、化粧し紋付を着て、鳥居を結んでもらう。おらの商売はお嫁になれない規則だが、このときだけは、ただの人がお嫁入り

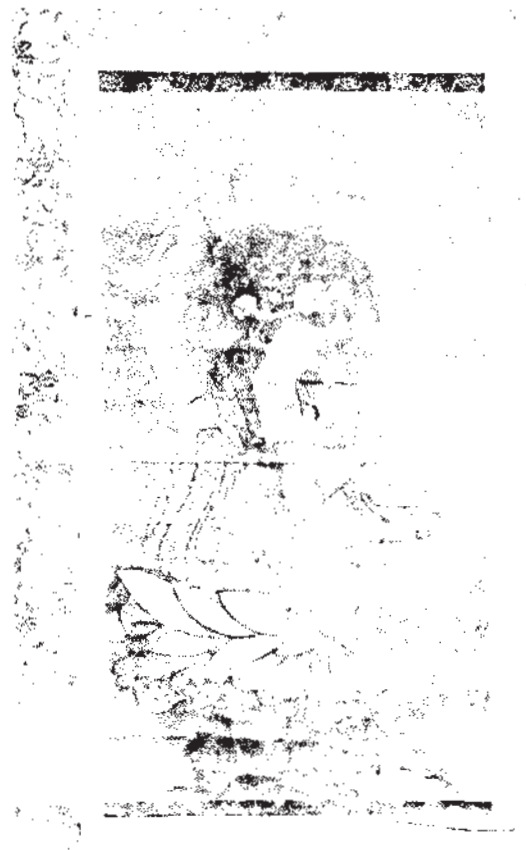


の祝言と同じように御馳走をしてもらう。みんな大勢呼ぶから金がかかり、やたらにはしられない」と言っている。

このように、お講組の妙音講は、年あきぶるまいと一緒にされる。この組の年奉奉公は、はっきりした年限を決めていない。長岡舞女や羽羽舞女は年奉21年といわれるが、こちらではそう言わない。昔は規定されていたものが、組織の弱体化により放逸に流れたものであろう。コイさんによれば、入門後10年くらいたてば妙音講をしてもよかったという。

年あきぶるまいと妙音講を同時に行い、これを年あけ舞女の生家であるという点、その方式は羽羽舞女のそれと共通している。羽羽組、および三条組を含めたお講組には、長岡の舞女屋のような常設の会場がない。それが年あきぶるまいと妙音講を一緒にさせた上たる要因であろう。本部のない弱みであり、そこからまた考え出された使法でもあった。

舞女が出世して、年あきぶるまいに仮に嫁の姿となり、ヒロメの祝言をするが、どうしてそんなことをし、どんな意義を持つのかは、いずれ機会をみて詳論したいと思っているが、ただ単にめでたいからとか、一生独身で通すからせめて慰めのため嫁入り姿をさせて祝ってやる、というような単純な解釈では、問題の解決にならないと思う。東北地方に残存する口寄せ巫女にも、巫袋の伝授を受けた後嫁入りの祝言をするが、これは神の妻となると言っている。舞女が口寄せ巫女と同一の根から出たとすれば、それとの比較の上で考える必要がある。



舞女講の本尊弁才天 柴村尾崎士田家蔵

この年あきの妙音講をしてもらうまでは、どういう着物を着てはいけない、どういう帯をしてはいけない、どんな髪結び方をしてはいけない等々、いろいろ制約をうけるが、振る舞いをしてもらった時点から、それが解かれるという点も重視すべきである。妙音講がすめば、師匠について師の株をもらい、アネサと一般に呼ばれる。

妙音講するにはずいぶんとお金がかかり、貧乏家庭ではなかなかしてもらえない。遠国からもられてきた内弟子なども、その機会に恵まれなかった。三条組として挙げた師弟系譜のA・B系の中の最後世代で、妙音講を無事勤めたのは駒沢コイさんただ一人であった。

こんな状態で、明治後期には年あき妙音講をとでも毎年などはしなくなっていた。しかし、年あきぶるまいはなくとも、本尊妙音菩薩を祭るための妙音講だけは毎年せねばならない、そこで三条組の中のだれかの家を宿にしてやってきた。今度は僧侶を呼ばず、式日を読むのは、その家の近しくしている人が勉強してあげたとも、お経はあげる人がお経をあげたとも言われている。

大正時代に入ると、三条組舞女は廃業・死没する者が続出し、妙音講はわずかの人数で形骸化のものとなった。それでも大正中ごろまで行われていたらしい。そして解散したとき、従来お講組

で持ち回りにした本尊や式目、仏具、会食用の膳・わんなどを処分、分配した。

本尊や式目がどこに所蔵されているのか、あるいはもう失われてしまったのか、危ぐの念を抱いていたが、幸い、このお講組の妙音講の本尊と推定される弁才大絵像が、尾崎の警女宮沢ミセの生家土田家に保存されていた。縦40.9cm、横22.0cmの小幅で、紙本着色、図柄は海中の岩座上運台に坐す唐装二臂弁才像で、琵琶を弾く。江戸の中ごろを下らない作であろう。十一氏は、この前で『警女講』をした本尊であると、ミセ警女から聞いていた。おそらく、お講組で保持してきた本尊で、それが解散時点でミセのところに残されたものと思われる。

十一氏が告いころは、土田家は貧乏暮らしをしており、2月25日の天神講の本尊が買ってもらえなかった。そこで警女のばあやが、これを床の間に掛けて、竹の葉と梅・松を飾って天神講をしてくれたという。弁才がその任務を解かれて、天神の代用をしたわけである。

式目は、今でもその所在が分からない。土田家にあったかどうか、十一氏の記憶にもないという。

## (2) お講組

コイさんやクニさんが警女の仲間入りをする前は、お講組警女は大勢であったそうだという。もちろん三条組警女を入れての話である。その三条組については、すでに確認された警女については述べた。ここで問題とするのは、三条組以外のお講組警女がどの地方にどんな組織・師弟系譜をもって存立、活動していたかである。これについての三条警女生存者の記憶・意見はまことに微々たるものである。しかし、たとえ少数であろうと、その一斑を明らかにする必要があり、次に可能な限りを追求することにした。

駒沢コイさんは、自分が妙音講をする以前に、三条組を除いたお講組で行ったのは、大友（新潟市）の警女や貝柄（西蒲原郡西川町）の警女ともう一人の3人であったという。そのとき15人から20人ぐらいが集まったと記憶する。お講組は遠い距離、広い地域にわたっているから寄りが悪い。そのうえ、3月17日といえばともすると雪が積っていることがあり、そうしたときはなお集まりが悪い。コイさんも、雪のためにようやくたどりついたことがあったという。

土田クニさんも、大友のおスミという人の妙音講に行った。17才の年（明治42年）の3月17日である。このとき、三条近辺から行ったのは尾崎のヤス、芹山のツマ、善久寺のツタ・チョウ、大平のセツ、後須田のフジと自分を入れて7人であった。向うの方は、おスミとその師匠、きょうだい弟子の3人であって、計10人の警女が集まったという。クニさんは、井戸場のコイさんはそのとき行かなかったと言っている。

大友の人は目が見えない人で、27～29才ぐらいであった。師匠も目が見えないようで、50才ぐらいに見える。もう一人のきょうだい弟子は若い人で、17・8才、目が見えて予引きした人でしょうという。この師弟3人には、このとき1遍会っただけで、その後付き合いはなかった。

コイさんは、明治45年春3月、21才で生家で妙音講を勤めた。そのとき、24・5人の警女が集まったが、このうち三条組は14・5人であったという。コイさんの言う妙音講に参集した警女の人数には、いささかあいまいな点なきにしもあらずだが、明治末期の妙音講にはほぼこれくらいの人数が出向いて、法会を取り行っていたとみてよからう。しかし、コイさんの妙音講が、年あき警女の妙音講としては、三条組で一番最後であったらしい。

以上の話に基づき、コイ・クニ両女の言う大友や貝柄の警女を調査した。幸い、両村には村民の記憶に残る警女は一人ずつで、ほかにはなかったようであるから、照合することが可能と思われる。

大友の警女とは、姓藤石、屋号「藤兵衛」の警女トセであった。旧村の戸籍簿によれば、父は藤石藤歳、母はマキ、明治11年3月10日生まれ、大正6年9月10日、40才死亡とある。藤兵衛から昭和9年分家に出た藤石精蔵氏（明治38年生まれ）によれば、トセは同氏のお婆に当たる人。10才くらいのとき風眼にかかり、2・3日で両眼失明、のち警女となったが、師匠は黒鳥の人であった。師匠やその弟子二人ほどが藤兵衛の家を宿にし、トセを交えて時々唄をうたっていた。精蔵氏が12・3才ころ、聞きに米てくれるよう、近所の家に使いに使われたと



いう。クニさんが妙音講に行ったという大友のシミは、おそらくこの人で、シミはトセの芸名であろう。それに間違いないとすれば、シミが妙音講を勤めたのは32才のときであった。

貝柄の贅女というのは、同村の堀内「嘉平治」から出た人で、名はハツという。この贅女の実子ハツイさん（大正13年生まれ）によれば、ハツは昭和19年、数え年61才で亡くなった。明治17年生まれである。2才のときはやり目で両眼を患ったが、少しは見える人であった。13・4才で黒鳥の師匠に弟子入りした。堀内家にハツの遊芸鑑札が残っている。明治44年2月15日付で巻警察署から受けたもので、28才のときであった。鑑札を受けたのがかなりの年になってからであり、目が見える人だからそれまでは手引きを主体にやった人であろう。ハツイさんによれば、会津・米沢方面を巡業した人らしい。そして大正12年に結婚した。生家は農業で、跡継ぎの兄が若死したので、家に入り婿をとったのであるという。

大友・貝柄の贅女が共に黒鳥（西蒲原郡黒崎町）の師匠の弟子であったということで、黒鳥の師匠を調べた。それは、鷲尾「関右エ門」の贅女であった。同家の清一氏（明治41年生まれ）によれば、その人は名をシミといい、祖母のきょうだいで、大正6・7年ころ、75才で亡くなったという。清一氏が10・11才のころである。したがって天保14・5年ころの生まれである。子供のとき天然痘で両眼失明、贅女となったが、師匠は分からない。弟子には、大友の贅女、貝柄の贅女のほか、黒鳥の江端「九之助」の贅女、坂井の贅女、小瀬の贅女など5人がいたという。いずれも通いの弟子で、その巡業は養蚕地の刈羽郡小国を得意先としていたらしく、55・6才まで商売に出ていたという。

このように、師匠を調べると、さらに大友・貝柄以外の贅女が浮かび上がってきた。それらも合わせ調査することが要請された。

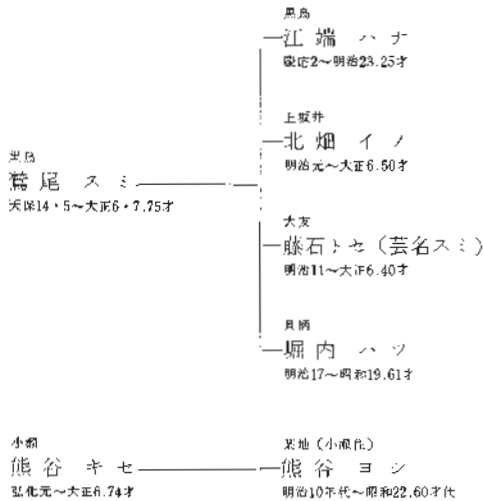
黒鳥の江端家「九之助」の贅女は、同家のタマノさん（大正7年生まれ）の話からすると、名はハナで、明治23年1月27日、25才で没している。2才のとき風眼で失明、師匠は同村の鷲尾「関右エ門」の人であった。妙音講も勤めたらしい。しかし、体が不自由で、世の中がいやになり、近くにある世間堀という小さな川の橋の上から、身投げして死んだという。駒形ヨイさんは、貝柄の贅女はまだ若かったが、自分のお講をして問もなく自殺したふうだ、と言っているが、貝柄の人は先に見たように、昭和19年、61才で没しているから、この黒鳥の江端ハナ贅女のことを誤ってそのように記憶したものであろう。

坂井（現在新潟市）の贅女とは、上坂井の北畑家「九之右エ門」から出た人で、名をイノという。同家の位牌では、大正6年9月13日、50才で亡くなっている。全盲の人であったというが、師匠がだれでどんな事跡を持つ人であったかということは家にあまり伝わっていない。ただ、芸の稽古をするに、外に出て寒声をはりあげていた、というくらいである。

小瀬（現在新潟市）の贅女というのは、熊谷「久之助」家から出た人で、小瀬にはこの人以外贅女は出なかったという。名をキセという。弘化元（1844）年に生まれ、大正6年、74才で没している。同家の正一氏（明治44年生まれ）によれば、キセは両眼失明しており、唄は上手、勤がよく、お経を空読みしていた。巡業は、関東方面から東北方面をぐるぐる回って歩いた。相馬から宮城の方まで行ったし、会津や米沢地方にもよく出かけた。そして、旅から連れてきて、自分の子として育てたヨシという人があり、旅回りにも連れて歩いた。ヨシはその後、新発田の士族岩井家の息子と結婚し、新潟市の本町に家を構え、宴会に呼ばれてお座敷唄を披露し、大そう名をはせたという。子供がなく、養子に正一氏のきょうだいをもらって跡を継がせた。そして、終戦後2年日くらいに、60才代で亡くなったという。

こうして調べてみると、黒鳥の師匠鷲尾シミと小瀬の贅女熊谷キセとは、生・没・享年もほぼ同じであり、鷲尾清一氏が弟子と見ていた熊谷キセは弟子ではなく、姉妹弟子か友達ではなかったかと思われる。つまり、黒鳥の師匠シミの弟子は黒鳥のハナ、上坂井のイノ、大友のトセ、貝柄のハツの4人で、小瀬のキセとヨシの二人とは別の師弟系譜と見るべきであろう。これを系図に現わせば次のようになる。

お講組（三条組を除く）師弟系譜



私は、土田クニさんが明治42年、17才のとき、大友のスミの妙音講に行った際会ったという師匠ともう一人の弟子は、黒鳥の鷺尾スミ師匠と貝柄の堀内ハツの二人と推定している。スミ・トセ・ハツともにクニさんの見立ては若いようであるが、年の違いは大体合っている。しかも、スミ・トセとも盲目で、ハツは目が少し見え、これも合致している。これからみると、スミ師弟5人はいずれもお講組に属していた人たちと言えるであろう。

小瀬の熊谷キセ・ヨシ師弟は、スミ師弟と系譜がどのような関係であったか明らかでない。友達付き合いのあったことは疑いなく、これもお講組に入っていたのではないかと思われるが、はっきりした断定は下せない。

三条近辺の農村部に展開した三条組警女組織と、西蒲原部の北辺に花を開いた師弟系譜集団とはあまりにも距離が離れている。これが同じお講組として結びれていたことは間違いないが、師匠の移住により飛び火のごとく分離・発展したのか、このほかにまだ沢山のお講組衆があったと言われるから、それらを総合的に調査した上で、検討を加えなければならず、今後の発掘を期しているのである。

4. 三条組の巡業

(1) 県外巡業

中越地方北部に居住の本拠を置いた三条組警女が、どの辺りを巡って稼業したか、その巡業圏域を探ることにしたい。もっとも、お講組全体を明らかにすることが望ましいが、西蒲原部北部の講衆の伝承はほんのわずかしが聞けない。それに比べ、三条組には生存者がいて、その実態をかなり詳細に聞くことが可能であり、本稿執筆の主眼もこれにあるので、三条組警女に焦点を絞ることとする。

三条組の巡業の主体は県外にあったようである。早い時代には米沢・最上地方、会津地方、相馬・仙台地方、群馬・栃木地方に旅稼ぎしていたことが伝えられている。それが、明治末から大正にかけて、現在生存者の活躍した時代は、米沢・最上がほとんど唯一の県外巡業地であり、会津巡業は、D系の吉田ヒサはよく行ったと伝えられるが、A・B系ではわずか1回行われたに過ぎない。関東相馬・仙台方面に行く者はいなくなっていた。

三条組警女の確認される最古世代の師匠は、芹山の五十嵐家の警女であるが、この人は米沢にも、会津にも、相馬にも足を伸ばしていたことが知られる。米沢によく行っていたということは、同家の三郎氏に本人が語っていたらしいし、みやげとして会津から持参した吸い物わんや相馬から持ってきた相馬焼が家に保存されていたので、その方面にも行ったに違いないという。

また、駒沢コイさんによれば、ツマ・ツタ・チョウの3人は、ツタの働き盛りのころ毎年相馬に旅をしていたし、上州にも行っていたらしいという。そして、土田クニさんが、14・5才（明治39・40年）のころ、ツタ・フジ・チョウの3人組で、10月から3月の冬場に、相馬より仙台方面に2・3年続けて稼業に出かけたことがあったという。比較的暖かい太平洋側の旅であった。井栗のマチには相馬出身のツナという弟子がいた。マチもまた、相馬に巡業していたのである。

そのほか、ツタとチョウは新発田在のイシ警女と下野（栃木県）に旅をしたことがあった。イシは新発田警女で、三条組ではないが、下野巡業の経験者イシがツタらを連れて行ったのである。クニさんが17才（明治42年）ころのことで、これも冬稼ぎであったという。

三条組警女の最大の稼ぎ場は、山形県の小国・中津川を経由して行く米沢盆地・最上地方であった。ことに米沢盆地を訪れぬ警女はなかったと言ってよい。この地方は越後と同様豪雪地帯で、稼業は冬を避け、春から秋にかけて行くことを常とした。2・3人で行くときもあり、7・8人組んで出かけるときもある。

駒沢コイ・土田クニ両女の話から、二人が旅稼業した時代の概要をうかがうことにする。歩いて行った時代である。

出発は、5月の初めから中旬にかかるころで、サツキ（匹植）前が一般であった。県内は商売しないで、日中9～10里歩いて1泊する。水原・中条・小国と各1泊して、北小国から稼業を始める。人数が多いときは、ここから2・3組に分かれる。中津川郷に入り、山間の村々を商売し、米沢盆地に入る。米沢の町方も、その在方もくまなく回る。小松・宮内・赤湯・高島方面も忘れない。米沢方面の門付けは段物を叫ぶならわしであった。小野川温泉にはいつも長く逗留した。温泉の宿に湯治しながら、自分らで口米出して自炊する。お金がかからないし、好きなものが食べられる。いつも15日ぐらい滞在し、昼は在郷の門付けに回り、夜は温泉場を流した。米沢の町に三味線の店があり、三味線の修理や糸を買いに出かけることもあった。

米沢をもって最終目的地とするときもあるが、最上地方へ足を伸ばすこともある。行くときは、上ノ山を通過して山形に入り、その在方の門伝・柏倉、長谷堂・替所・大塚等々を商売し、萩ノ窪で十三夜をして帰るのであった。長井方面から荒砥廻りに行ったこともある。ただし、コイさんは最上を訪れたことがない。クニさんはよく行った。最上の門付けは口説でやった。

最上まで足を伸ばした場合、各巡業組は終着点萩ノ窪の宿で合流し、みんなで9月の十三夜をして帰りの途につく。米沢までは商売しながらやってくる。しかし、米沢からは商売をしないで戻らば帰りの道は急ぐ。途中、沼沢1泊、中条2泊、水原1泊、いずれもはたご屋に泊まり、5日目に三条在の各自の家に着いた。最上をたつてから15日くらい、9月末にはもどるのであった。

国鉄米坂線の全通は昭和11年8月で、三条組警女が稼業していたのはそれ以前であるから、旧道を歩いて小国から商売して行ったのである。しかし、帰りは奥羽本線・磐越西線経由で汽車を利用することもあった。

小国経由の米沢・最上地方への旅稼業は、越後警女のうち、長岡以北の者が金城湯池とした大切な稼ぎ場であった。長岡組・三条組だけでなく、白根や新津・新発田方面の警女も等しくここを訪れた。三条組警女で、このルートを経営し、他の組の警女と一緒に知り合いとなる例が少なくなかった。ともすると、一つ組として稼業するようなこともあった。越後警女のたまり場であった小野川温泉などは、みな長期間滞在したから、そうした機会が余計にあった。コイさんは、フジやツタなど5人で旅をしたとき、ここで白根組のキタ・キヨシ・キセという3人組と一緒に知り、仲間になって少し歩いたという。コイさんが17・8才ころのことであった。



多くの越後警女が米沢方面を訪れた、その背景はどこにあるかを考えなければならない。その第一は人情であろう。遠い越後から来訪する警女、盲目の警女を温かく迎えてくれる情けである。コイさんの言葉を借りよう。「米沢の方は義理がたいとこだ。親か子かきょうだいに来たような気で迎え、餅をついたり、だんごを作ってくれる。何人で行っても、同じ家に泊めてくれる。3人行けば3人とも泊めてくれて、翌日の弁当もみんなののを作ってくれるとこ。少しぐらい家に都合があっても、泊める。法事がある日に泊まれば、ちゃんとお膳をつけて賄う。しかし、私たちはなるべくそうしたところには泊まらないようにする。初めは、そうしたものがあるのが分からずに行ってやっかいになるが、だから次に行ったときは特別のみやげを持って行く。泊まりつけには髪につける油の2・3本、ヨリ糸の2・3把もやるが、そのようにやっかいになったところには、これを銀でやることもあるし、反物などを持って行くこともあります。」

警女にとって、旅稼業で宿のあるなしは大問題である。宿が決まらなければ、その日は安心して商売ができない。米沢地方は、たとえ家に都合があっても心よく迎え入れてくれた。しかも、接待は客人同様、感情は家人並みというのであるから、これほどありがたい土地はない。警女も、それに対しては最大の礼儀を尽くしたのである。

ところで、米沢が警女をよく歓迎したということを、単に人情論だけで片付けるわけにはゆかない。それと密接な関係にある民間信仰を直視しなければならない。このことについては、すでに述べたことがあるが、特に米沢は養蚕業の盛んな地方であったから、生業増産の信仰から警女を迎え入れ、必然的に警女に対する庶民の態度が情厚とならざるを得なかったのである。米沢方面は、段物や常磐津が好まれたというが、現好きだけでも解決できない問題がそこにあった。

コイさんによれば、山形県の人には蚕様をはいたから三味線の音を聞かせてくれ、よほど元気を出すと、達者に育つとよく言われた。蚕が喜んでふとるといふ。また、使い古した三味線の糸を蚕柵のところに縛っておくと、蚕が病氣しないから、糸の切れを授けてくれという人があった。「なんのわけでおら大事にしてもらわれるのか」といふと、蚕様が三味を好きだから、自分の家が蚕を飼っているのだから、どうか泊まっていってくれ、という。蚕がよく育ったとしくじったのとは大違い。警女は一得があるのだらう。蚕よくして、そして面白いめして」とコイさんは言う。ひとりコイさんだけでなく、米沢へ訪れた警女はだれでも経験があった。

このように、米沢地方は養蚕信仰を基調として、警女を迎える庶民の態度が自然深情けとなったと言える。警女としても、それにこたえるのが商売上手である。それでよくみやげ物を持参したが、善久寺のおツタはお菓子をいろいろコウリの中に入れておいて、世話になった家の子供にくれていた。だから旅の人から大事にされたのである。無いものでも出してくれようとした人であったという。ツタは年を取ってから芸を習ったので、芸そのものは達者でなかったが、子供扱いがよい。「ツタさん米たかね、よう米たね」と、自分の子か親、きょうだいに来たように言われたという。神か仏のように扱われたという。そういう人と一緒に巡業すると、速れの警女まで大事にされてよかったとコイさんは言う。商売上手のツタは、米沢だけでなく、栃木や相馬・仙台方面にも積極的に巡業活動をした人であった。

しかし、米沢歩きは決してよいことばかりでなかった。旅には付き物だが、道中いろいろ危険が伴った。中津川の山中でにおかに水増しが出て、小須川のカツという警女は流されて死んだというし、白根の方の人らしい4人組の警女がやはり中津川で強盗に会って殺され、金を取られたことがあった。それを聞いたコイさんらは、稼いだ現金を持って帰ることはやめ、郵便局から家の方に送金することにしたという。もう米沢巡業をやめる1・2年ほど前のことであった。

米沢は米どころであるが、町の報酬は米でなく銭だけをくれた。それに対し、最上地方では米をくれる人があった。警女としては金の方がよかった。重くないし、一々金に替える必要がないからである。ただ、湯治で自炊するための口米集めだけは別である。米沢が金だけをくれるというところにも、遊芸人を温かく迎える人間性が

うかがわれる。

次に、三条組の会津巡業に触れてみよう。これは、米沢・最上巡業の盛行に比べて全く閑散たるものである。芹山の五十嵐家の親方は会津を訪れたから、古い時代どうであったか分からぬが、三条組瞽女の生存者3人が記憶する会津旅は、この3人と師匠の樋口フジの計4人で、明治44年に行った1回きりであった。その外に、三条組瞽女で行った人を知らぬという。ただし、先に述べたように、吉田ヒサなどは行っていたらしい。

明治44年のフジ師弟4人の巡業は、8月27日の裏盆に出発した。フジ35才、ヨイ20才、クニ19才、ハル12才であった。クニが手引きをした。下田の遊場に三晩泊まり、八十里越の峠の木ノ根の山小屋に二晩泊まった。この街道は蛇がいて人が余計通らない。しかし、木ノ根小屋の宿の人が旅人に売る餅をついていた。峠の坂道は急で、親方フジは倒れること幾たび、ハルはまだ子供でつらくて泣いていた。ヨイとクニは血気盛んな年ごろで、それを見ては面白がって歌をうたっていたという。

峠を越して只見に降り、只見から高荒を始めた。門付け唄は段物である。伊南川をさかのぼって鞆(とう)ノ巣まで行った。初めての巡業だから、宿のとれる村もあればとれぬ村もあった。南会津は義理がたいところで、一度泊めると自分の家族と同様の扱いをしてくれるが、泊め始めると辭がついて困るということから、なかなか泊めてくれない。したがって、安はたごに多く泊まったから、足しになるほど銭が残らない。

食べ物の悪いところでもある。宿では、御飯を食べさせないで、トウキビばかり食べさせる。そういうところだと聞いて出かけたから、家でもち米をふかして干したものを持っていった。それにお湯をかけて食べたり、いって食べたりした。また、いり豆を持っていった。そんなものでも腹の足しにはなったが、ずいぶん重荷になったという。

9月の十五夜は旅先でしたが、初めての旅で宿がないし、金にはならないし、食べ物がまずいから、早々に引き上げた。22・3日の短い旅であった。

## (2) 県内巡業

三条組瞽女は、例年春から秋にかけ、米沢・最上方面に巡業したが、9月の末には故郷に帰った。そして、10月から12月にかけては、家で休息する者もあれば、この機会に師匠から芸の権古を受ける弟子瞽女もあった。冬は、旅稼業に出かけることはまれで、大抵は翌年正月から近在の「春語り」に出かけるのである。

春語りの巡業は正月2日から始まる。これは自分らの生まれ故郷、すなわち三条の在方回りが主体であった。冬だから雪が積もっているが、この地方は豪雪地帯でないから、出歩くにさして苦ではない。春の支度である。長袖を着て、蒲団を下げ、雪のないときは唐かさをさし、つま皮をはった雪下駄をはき、雪のあるときはお高祖頭巾にマントを掛け、毛糸の手袋、脚絆をつけ、ソラジをはく。春語りは門付けではない。一軒一軒家の中に入り、座敷に坐り込み、新年のあいさつをして唄をうたう。段物でも口説でもはやり唄でも所望次第。しかし、正月気分で大抵は松坂をやった。道みがあれば座敷万ずもやった。報酬はお金だけで、5銭・10銭くれる家もある。こうして、在郷を回り回して、節句の前日、3月2日には自分の家に帰った。

3月3日の節句を家で迎え、それからしばらく休憩し、17日の妙音講を勤める。妙音講が終わると、こんどは門付けを伴う本格稼業に出かける。巡業先は南蒲の五十嵐川流域の下田郷と、古志部の塩谷川流域塩谷郷が主体である。夏の装いで、かすりの腰巻を下げ、上に羽織をして、ソラジをはく。下田郷は吉ヶ平までくまなく渡り、塩谷郷も九川や蘆谷・入塩川方面まではほ余すところなく巡業した。門付け唄は箠句で流した。報酬はお金ばかりでなく、お米も出た。そして、4月15日から20日ごろには家に帰った。

春3月から4月にかけての門付け巡業は、ほぼこの下田・塩谷に限られた。山間部はめったに留守の家がないので、稼ぎになるという。そのほかの巡業先としては、ヨイさんは加茂の奥に入ったし、村松の方にも足を伸ばした経験がある。紙やお茶の産地で、唄の報酬にそれらをもらうこともあった。この時期に蒲原や古志の平野部



を回ることはめったにない。コイさんは、栃尾の町に行ったこともあるが、一本道の町であまり小路がないから、商売には適さなかったという。

このように話をしてみると、三条組警女の県内巡業は極めて狭い範囲であったことが分かる。冬季の春語りにおける三条近辺の平場農村地帯、雪融け期の南蒲・吉志の山間部が主体をなした。ただし、これは現在生存の警女の経験した時代の実態であって、それ以前がどうであったかは詳らかでない。この3月から4月にかけての門付け巡業のあと、家で10日から15日くらい休んで、こんどは多くが米沢の旅に出たが、米沢の方でなく、南魚沼の方へ出かけた人もあったという。しかし、それも、そうしげくなされたとは思われない。コイ・クニ・ハル女は、三条組警女時代に、一人として魚沼巡業をしたことがない。

### (3) 警女演目

巡業の項を閉じるに当たり、3人の生存者の修得した警女唄の曲目を紹介し、この組の唄の領域の傾向、内容を知ることにした。

一般には、警女唄は段物・口説・端唄・長唄・常盤津・清元・新内、義太夫のサワリ、民謡やはやり唄等のザカ唄に分類できる。しかし、これが全部、一つ組に等しく伝承されるというものではない。巡業先の聴衆の好みにより唄われ、それが次第に得意、不得意を生ぜしめ、ひいてはその伝承が中断してしまうという場合もある。また初めからその組に伝わらない種目・曲目もあろう。ところで、三条組には伝わってなかったらしいというのが清元である。コイ・クニ・ハル3人とも習わぬし、その師匠フジ・ツタも唄わなかったし、それ以前の師匠も知らぬのではないかという。口説について、最上地方に旅をした土田クニさんが幾分覚えたが、駒沢コイさんは一般の唄好きの人が唄っているのを聞いたことがあるが、自分は少しも習わなかったという。口説を最も好んだ上州方面に旅稼業をしなかったことが、その必要性を認めず、いつしか伝承が衰微したのであろう。

コイ・クニ・ハル女の警女唄修得演目（ザカ唄を除く） ※ ○駒沢コイ □土田クニ △小林ハル

#### イ 祭文松坂〔段物〕

○△佐倉宗五郎・○△小栗判官・○△八百屋お七・○△山中段九郎・○△平井庵八・○△石井常右エ門・○△俊徳丸・○△葛の葉子別れ・○△丸・○△明石騒動・○△山椒太夫

#### ロ 口説

□鈴木主水・□お吉清左・□お久米左伝次・□安五郎くどき

#### ハ 端唄

○△浅くとも・○△夕暮れ・○△春雨・○△かいあんじ・○△わがもの・○△わが恋・○△夕ぶし・○△上がり新内・○△大津絵・○△紀伊の国・○△槍さび・○△いんかい・○△梅にも春・○△しのぶ恋路

#### ニ 長唄

○△松づくし・○△待つがつらい・○△座敷方才・○△花車・○△御所車・○△汐吸・○△種まき三番・○△雛鶴三羽・○△阿波の徳島（巡礼報謝）

#### ホ 常盤津

○△老松・○△一の谷・○△女太夫・○△関取千両幟・○△石川五右エ門・○△関の扉・○△白藤源太・○△手習子・○△安珍清姫（道成寺）・○△鏡山・○△巡礼

#### ヘ 新内



〇床に生けたる・〇花に蝶々

ト 義太夫のサワリ

〇太功記・〇二十四孝・〇鈴ヶ森

### 5. 土田クニ女らの芸能一座

結婚して仲間の組織を外れた警女が、主人と共に唄や踊り・芝居の興行に身を転じ、巧みに、しかも力強く渡世してきた珍しいケースが三条組にあった。それが、先に述べたように、今も健在の土田クニさんその人であった。その芸人一座の発祥と活動は、クニ女の警女稼業と密接な関連を持っているので、ここに項を改めて紹介することにしたい。

盲目の警女が、仲間から外れて後、なお生計を立てるに、従来通り警女芸を続ける場合がある。一般に、組織から外れるときは、逃亡は別として、親方にも納得の行く別れ方をするならば、縁切り金を取め、愛用した三味線を親方に差し出し、お茶をたてて飲んでもらう。親方からは、三里四方商売してくれるなど言い含められて別れるのである。そうした正統な手段を踏んで離別する場合もあるが、また仲間の掟に反し、罰せられてついに外れてしまう警女もある。いづれにしても、組を外れた後、依然として警女稼業を続ける人たちがあった。長岡組から外れた四郎九組の小林ミト<sup>註4</sup>、川羽組警女吉井組から外れた今井ツネ<sup>註5</sup>などがそれで、しかも外れた後弟子を養成して一派をなした点で特筆される人たちであった。

しかし、警女仲間から外れた場合に、その後警女商売を続ける人はむしろ少なく、鍼・按摩・灸などの民間医療術に移行するのが一般であった。仲間を外れた原因、あるいはその結果として、亭主を持ち、家庭を築く人が多い。いくら何でも目の見える人ならば、一層結婚に至る傾向が強い。相手はやはり盲目の座頭で、按摩稼業に従事する人たちか、チョンゴレやテンボウ語りなど語り物芸に携わる人たちが多かった。もみ治療に携わるのは、盲人独特の触覚に関する鋭敏性を生かしたものだが、昔は男盲がほとんどで、女盲の人は少なかったという。しかし、社会が警女芸を要求しなくなると、この道に転業する警女が続出したのである。明治後期に入って、この風潮が強まり、警女道の衰退に拍車を掛けた。

土田クニさんが、警女を廃業したこと、そして按摩にならず田舎芸人となったことには特別な事情があった。右目は完全に見える人で、警女時代手引きもやったから、芸はそれほど覚えなかったと自ら言うが、警女時代に既に唄りに対する異常な興味を持ち、踊ることがよくあったという。ところで、主人となった土田耕一氏（明治30年生まれ、クニ女より四つ年下）も子供のときから唄や踊りの大好きな人であった。耕一氏は後須田の農家に生まれたが、クニさんが同村の師匠樋口フジの弟子で、稽古のときは樋口家に住み込んでいたので、始終一緒に、耕一氏がクニさんの唄を聞くこともあった。そんなことから、芸好きの二人が結ばれることになったのである。大正4年のことで、クニが数え年23才、耕一氏が19才であった。

結婚した後、耕一氏は同じ後須田の小林藤吉という親方から芝居や踊り・唄を習い、クニさんは当時加茂にいた芸者上りの師匠から踊りを習った。札幌吉をしたという。そして、5・6年後、親方藤吉と耕一氏夫婦の3人は田舎芸人の一座を作り、唄と踊りと芝居の興行に出かけるようになった。その巡業地の主体は、クニさんが警女時代に歩み、縁が結ばれていた地方であった。尺八・洋琴・三味線・笛・太鼓（縮め太鼓）などバラエティに富んだ楽器を携え、遠くは山形県の北小国・南小国・津川・玉庭地方から米沢方面に足を伸ばし、越後では、南蒲原・西蒲原・中蒲原など、三条を中心とする一帯に稼業に出かけた。一座は「土田一行」として迎えられ、当初3人であったが、必要に応じて他に仲間を入れたこともあり、また土田夫婦に子供が出来ると、その子に芸を教え、同行させるようになった。

米沢方面への巡業は、初めころは歩いて行った。越後から自転車で乗って行ったことも2・3回ある。米坂線が開通すると汽車を利用するようになった。米沢への旅は、大体越後がお盆休みのころ出かけた。向うは田舎盆で、こちらより遅いから、ちょうどお盆ごろに北小国・南小国で商売した。宿はクニが警女時代世話になった家に泊めてもらうことが多かった。大屋様か村長の家のような大きな家で、やっと食べて行くような家は決して泊めてくれなかった。したがって、警女時代と同じように宿銭を出さないで泊めてもらう。夕食後、近所の人たちが宿に集まり、そこで一行は芝居や踊りを演ずるのである。警女のように宿賃としての踊りなどはしなかった。むしろ、宿から祝儀を出すところがあったという。警女とちがって、門付けのようなことはしない。昼は宿で休息するか、次の村、次の宿へ移るのが仕事であった。

中津川の村々は、秋祭りの時節に訪れたから、興行は神社の仮舞台や特別に設けたさじきで行ったが、玉庭の方は秋祭りではなく、平日であった。稲の刈入れ前で、家庭で「作祭り」と称してドブ酒を飲んで祝ったが、一行が訪れるとドブ酒を持参して宿に集まり、芸が終わると飲み合のうのを楽しみにしていた。集まった人が、演芸が終わると花を包んでくれる。こうして、玉庭からさらに米沢方面に回り、4・5日商売して、米沢から汽車で帰った。最上は上ノ山、荒砥まで出かけたこともあるが、これは回数が少ない。小国から三面にも1度訪れたことがあるという。

米沢の旅から帰ると、すぐその足で西蒲原の秋祭り興行に出かけた。しかし、県内の巡業は比較的近いところの的を絞り、また、はたご銭を出して泊まるようなところには強いて行かなかったという。警女時代の気風をそのまま受け継いでいるからである。そのためであろう、お座敷の余興や祭り興行に土田一座を頼んだところでは「みんなあれは見た方がよい、上手で面白い」と評判をたてたほどであった。それでも、長い間には、北蒲・中蒲・南蒲・西蒲は大概のところに行ったり、古志や三島・東蒲原の一部にも出かけた。「後須田のコモソウ」として有名であった。尺八を吹いたから、コモソウ（薦僧）で通っていたのである。

駒沢ロイさんは「クニさんは声がよくない人だが、座敷に呼ばれて安来節や三階節などの民謡を踊ったので大変もてた。警女上がりで踊ったのはクニさんだけであった」と言う。土田演芸は、警女の語る段物や口説・長唄などはうたわなしい踊りなかつたが、器物や民謡・はやり唄をうたいかつ踊った。その中で、警女時代のものをいく分か利用したものもあるという。しかし、なんといつても、クニの警女時代の芸で、後に役に立ったのは三味線であった。三味線芸が身を助けたのである。それに、もともと好きであった踊りを入れて、これが呼び物として人気を博したのであった。

土田一行が米沢方面への旅稼業を中止したのは10年ほど前のことである。それまではほとんど毎年訪れていたという。老夫婦が商売から身を引いたのは5・6年前のことであった。警女芸から踊りと芝居の芸に身を転じて、半世紀の長きにわたる商売であった。しかし、これで土田演芸は終わったのではない。その跡を末の子息松男氏夫妻が受け継ぎ、その娘や息子、クニさんの生家の駒込の藤家家の娘などを加えて数人で、県内手広く興行に出かけている。加茂駅前に事務所を置く「土田芸能社」がそれである。老夫婦が引退後、時代の要求に応じて、アコーディオン・ギター・ドラムなどの近代楽器を取り入れ、新しい楽団の要素も加えるようになった。昔のような芝居はやらなくなっている。

私は、一昨年と昨年、はからずも土田芸能社のお手並みを拝見する機会に恵まれた。長岡市教育委員会職員の親睦の集まり「親和会」で毎年忘年会を催しているが、2年続けて余興として呼ばれたのがこの土田芸能社の一団であった。その演芸からは、10年ほど前まで田舎芸人として遠く米沢方面まで出稼ぎに行っていた時代の姿を想像することはできかけたが、この劇団の歴史を振り返って感慨無量なものがあつた。

言うなれば、クニさんが芸好きの主人と結婚し、警女時代に培われた芸を新しい商売に役立たせ、発展させ、その経験を生かし、警女と同様の旅稼業を続けたのであった。大正中ば過ぎ、人気のなくなった警女芸に見切りをつけ、新たな息吹を吹き込んだ踊りと芝居で一旗を揚げたといえる。警女が踊りをしたという点では、長岡警

女から外れた四郎丸組が想起される。しかし、四郎丸組は、親方小林ミトが結婚して外れた後、盲目・暗眼者を問わず多くの弟子を養成し、盲女を瞽女に、目あきを踊り子に仕立て、これを組ませて唄と踊りの旅興行に出させていたもので、クニ女とは方法と立場を異にする。いずれにしても、クニさんの生涯の演芸活動は若かりしころの瞽女稼業が根幹になっており、それが今も土田芸能社として存続・発展していることは重要な意味を持つのである。

## Ⅱ 土底組・西野島組・田麦組瞽女

### 1. 組織の概観

上越地方では、頸城平野の中心都市高田の町に、江戸時代から高田組といわれる瞽女仲間があった。瞽女組織としては珍しく座の形態をとり、強固な自治を敷いていたことは周知のところである。その巡業も、上越地方はほぼくまなくわたり、県外にも及んで長野・群馬の一部地域に歩を進めた。そのような組織が維持される背景におそらく高山藩の保護策があったことは疑いなかろう。その仕組みは、親方が高田の町に自分の家を構えることが重要な条件であり、家を持つ親方連中が集まって座を組織し、年長者が頭としての座元になった。親方が家の戸主として、弟子を受け入れ、瞽女として養成し、やがては家督を相続させる。まさしく瞽女の家というにふさわしい。入門する弟子は、高田を中心とする中・東・西頸城の農山村の盲女が主体であった。<sup>註6</sup>

ところで、上越地方の瞽女としてはこの高田組がその名を知られているが、そのほかに各地にいくつかの小さいながら独自の瞽女集団の存在したことが確認された。次章に紹介する糸魚川瞽女もそれであるが、高田が所在する頸城平野の北部浜地帯やこの平野に接続する東頸城の山地帯にも計三つの師弟系譜集団があった。正しくいえば、中頸城郡大湯町土底浜に師弟系譜が展開した土底組、同郡吉川町西野島に大師匠がいて、同村と隣村六万部に弟子、係弟子がいた師弟系譜集団、および東頸城郡大島村五軒角間、同田岬、蒲川原村小谷島村に師匠、弟子、係弟子が出た師弟系譜集団である。

高山瞽女の杉本キクイさんは、そうした高山の北部浜地帯、東部山地帯にいた瞽女の集団を「浜瞽女」「山瞽女」と言っている。土底組や西野島・六万部の瞽女は浜瞽女の範ちゅうに入るし、大島村・蒲川原村の瞽女はいりまでもなく山瞽女である。

この地方で瞽女を志す者は、高田瞽女仲間には入らず、身近なこれらの師匠に入門したのである。山瞽女であるから、生家に起居するのが一般であり、親方は高田瞽女のように特別家を構えることが条件とはならない。その点では、上越にありながら、中越のいくつかの瞽女集団と同様である。しかし、伝承者がいないためもあって、確認が行きわたらず、いずれの集団も人数は少なく、単一的系譜にとどまっている。つまり三つの集団とも、弱小の域を出ていないのである。

しかしながら、こうした各地に散在した師弟系譜集団が、古くは一つ組として結合体をなしていたのではないかということを検討する必要がある。浜瞽女・山瞽女も衰退期には、六万部と田麦の瞽女が高田組に合流し、稼業を続けたといわれるが、これが果たして末期的現象としてのみかたづけられるであろうか。本来別個の、かわりない集団であったとするには不可解な点がある。浜瞽女・山瞽女は、妙音講を高田在上稲田の佐野家で行ってきたが、明治時代には各地から実に多くの瞽女が集まったという。それらが一緒になって妙音講を開いていたとすれば、三条組に述べたような「お講組」の組織が、ここにもあったのではないかと考えられる。高田のいわゆる町方瞽女に対して、周辺地域の田舎瞽女集団の結束があるやにも見受けられる。

上稲田における妙音講に参加者が多かったという伝承からすれば、昔は浜瞽女・山瞽女の師弟集団は多く、さ

らに調査が進めばこれが浮かび上がる可能性は強い。しかも、長い歴史の間に廃絶した組織があったことを考えねばならない。それを証明する1事例として挙げることはできるのは、市川信次氏が紹介された江戸時代の文書資料に見える柿崎町の師匠およびその弟子の1冊である。

この文書は、天保7年5月、柿崎諏訪新田の師匠警女タカ(52才)とその弟子等計11人が巡業で直江津に逗留中、柿崎村出身の警女コト(18才)と水野村出身のチウ(17才)が海に身を投げて同性心中したことに関し、関係者が奉行所へ提出した聴書の控えである。詳細は紹介文献を参照願いたい。ここに現われる柿崎の師匠とその弟子の警女集団は一派をなしていたもので、いわゆる浜警女の範ちゅうに入るものであろう。

チウの出身が米山山麓の水野村であることを思うと、柿崎の師匠の弟子は近辺のかなり方々の村々から入門したものと推定される。しかし、それらの警女、柿崎組ともいべき警女仲間がいつまで続いたかは、現在もう聞けなくなっている。柿崎諏訪新田の師匠の家も、柿崎村のコトも、水野村のチウの家もどうなっているか、尋ねても知ることができない。ただコトの生家の旦那寺柿崎の淨福寺、チウの生家の旦那寺半島の楞嚴寺の過去帳には、それぞれ死亡したことが確かに記載されている。ともかく、この柿崎警女の行く末はどうなったか、いつまで存続したかは明らかにすることができないようである。

そうした警女集団の台頭、廃絶の激しさを念頭において、近代に活動した浜警女・山警女の師弟系譜と歴史をうかがうことにする。

## 2. 師弟系譜と事歴

### (1) 土底組

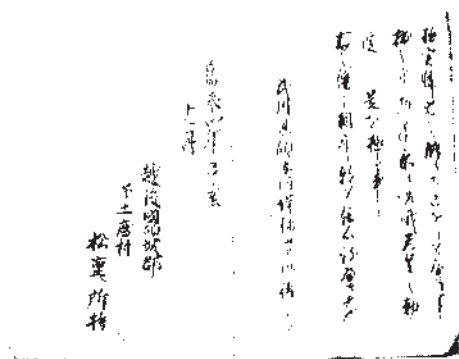
中頸城郡大湊町土底浜に師弟系譜が続いた警女組織である。またの名を犀浜組という。

この組のことについては、一番末弟子であった柳沢キイ女が、病床にありながら生存しておられて、一昨年と昨年の2回にわたり聴き取り調査させていただいた。本稿において扱った上越地方の組織警女の中で、ただ一人の生存者で、土底組の実態を中心にある程度聞くことができたが、惜しくも本年2月14日に他界された。

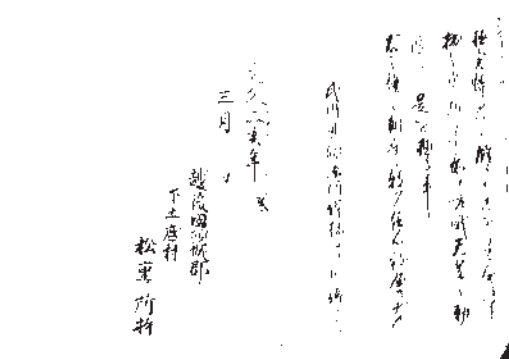
キイさんが、土底組の警女として名前をあげたのは4人である。2代前の師匠小山ルサ(芸名松重)、先代師匠でキイの実の親でもある柳沢キウ(芸名露梅)、姉妹弟子の柳沢トヨ(芸名松梅)と自分キイ(芸名梅藤)である。ルサの先代師匠がだれであったかは知らない。

小山ルサは、土底浜「玉」(屋号)家の出身で、この警女のめいに当たる小坂ミヨさん(明治18年生まれ、長野住)によれば、天保3(1832)年に生まれ、大正3年、83才で没している。日は暗眼の人で、器量よしであったが、頭がよげっていたので警女となった。だからおげ頭をいつも手ぬぐいで隠して、死ぬまでこれを離さなかったという。芸名を松重(マツシゲ)といい、キウなどに芸を教え、自分で手引きして巡業に出た。生家の門主が早死したので、家のためになった人と伝える。

ところで、江戸時代末期から土底組に伝えられてきた『警女武日』1冊が、今も柳沢キイさんの家に所蔵されている。その奥付けに、張り紙して「嘉永四年辛亥十二月」と記し、続けて「越後国頸城郡下土底村松重所持」とある。ここに署名される松重は小山ルサのことであろう。ただ、この年号の張り紙をはくと「文久三亥年三月上旬」との墨書が現われ、その「文久三亥」も「安政六未」を消して書き直したことがうかがわれるし、署名松重の「重」も「義」を消して、その上に書き直したことが知られる。すなわち、最初「安政六未年三月上旬越後国頸城郡下土底村松義所持」と書かれたものが、「安政六未」を「文久三亥」と直し、「義」を「重」にし、さらに年号に張り紙して「嘉永四年辛亥十二月」としたことが分かる。どうしていったん書いた年号をさらにさかのぼらせたのか明らかでないが、松重の前に松義と名乗る警女がおって、この『警女武日』を最初に所持したように思われる。しかし、決定的証明にはならず、今はとりあげないでおきたい。



土底組所伝『警女式目』の奥付



同左 張り紙をめくる

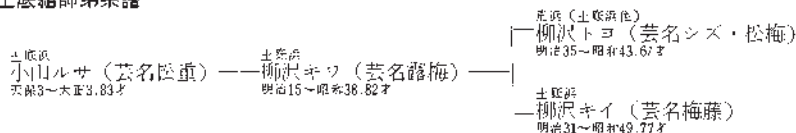
柳沢キワは、土底浜中区の「長左エ門」家の出身で、明治15年に生まれ、幼いとき風眼にかかって失明した。松重師匠に弟子入りし、芸名を露梅（ツエウメ）と称し、稼業を続けたが、まだ娘盛りの17才のとき、男を拾ってキイさんを生んだ。その後直江津荒浜からトヨという子をもらい、芸を教えて稼業に出かけた。昭和38年、82才で没している（キイ女話）。

トヨは直江津荒浜の柳沢家で明治35年に生まれた。子供のとき風眼にかかり、片目はつぶれたがもう一方は少々見えた。8才ぐらいで土底浜のキワにもらわれたという。入門したとき師匠がシズという名を付けてくれた。目がかすかに見えるから手引きもしたが、唄は上手、声はよいし、三味もうまかった。松前などを歌わせると聞きに来た人が「日本一ノ」というほどであったという。名替えて「松梅」をもらった（キイ女話）。しかし、昭和3年、27才のころ、警女稼業をやめ、師匠の柳沢家を出て、生家の親戚に当たる直江津上黒井の白川家に嫁いだ。昭和43年12月、数え年67才で没している（白川軍平氏話）。トヨの結婚は、土底組柳沢家にとって高荒を続ける上で大きな痛手となったのである。

キイさんは、明治31年12月27日に生まれた。キワが17才のときの子である。16才のとき急性角膜炎を患って目を悪くした。20・21才（大正6・7年）ごろから唄・三味線を習ったが、本格的に教え込まれたわけではなかった。それでも習いたてで直ぐ巡業に出歩いた。そして大正8・9年、22・3才のとき、トヨと一緒に「名ぶるまい」した。芸名は「梅藤」であった。その当時、巡業に一緒に歩いたのは、土底組のキワ・トヨと自分、それに他の組から合流した田交の警女タケ、六万部のツツの5人であった。26才で両眼を取った。そして、昭和3年ごろトヨが嫁に行くと、手引きをする人がいなくなったが、兄甚十郎の子昭治氏（昭和2年生まれ）が小学校に入ったばかりのころで2・3年手引きをしてもらい、稼業に出たこともあった。しかしこれが土底組警女活動の最後となったのである。

その後キイさんは、東頸城の安塚で男のみみ疾から按摩を習い、その稼業に転向した。そして兄の娘を養子にもらい、キワ・キイは土底浜東区（下土底）へ分家に出た。昭和14年のことである。屋号は「柳屋」という。親のキワは昭和38年に死亡、キイさんは70才ころまで按摩を続けたが、その後高血圧で病床に伏し、本年、昭和49年2月14日、77才で亡くなった。

土底組師弟系譜





## (2) 西野島組

土底浜にほど近い中頸城郡吉川町西野島、および隣村六万部に師弟系譜があった瞽女集団で、確認し得る先祖師匠は西野島出身の人である。このグループは、土底組と一緒に歩いたという六万部の石野リツ瞽女のことを調査するにつれ浮かび上がった組である。西野島で最も高齢の五十嵐ツヤさん（明治11年生まれ）の記憶に残るこの近辺の瞽女は、西野島字竹連寺の「酒屋」の瞽女、同字中性寺「作右エ門」の瞽女、同字居斗の「兵治右エ門」の瞽女、六万部「吉右エ門」の石野リツ、同「稲場」の瞽女の計5人の仲間であった。

西野島字竹連寺の「酒屋」の井部善太郎氏（明治23年生まれ）によると、同家で瞽女となった人はヨネという名で、氏の父親の姉であった。善太郎氏が子供のとき亡くなったが、その際に菩提寺土底浜の養性寺へ、ヨネが生前に使った三味線を永代経に寄進したという。養性寺の過去帳には「釈尼妙就 明治三十五年六月二十二日 井部善太郎伯母ヨネ 五十五年三月月」とある。嘉永元（1848）年生まれであった。五十嵐ツヤさんがこの村に嫁入りした当時、この人の唄を聞いたことがある。全盲の人だが、これらの瞽女の中では一番年寄りで、師匠格の人であったという。

中性寺「作右エ門」（サクム）の瞽女も、ツヤさんより年寄りの人であったという。同所の田中喜寿氏（大正4年生まれ）によれば、作右エ門は喜寿氏家の分家で、やはり山中を称したが、勘次郎という人が可持たずで、昭和22年2月に77才で没し、跡が絶えた。その春家をこわしている。また同所の酒屋八木セキさん（明治29年生まれ）によれば、同女のしゅうとは作右エ門から嫁いだ人で、瞽女の姉であったが、その姉は昭和27年、87才で没した。セキさんは、瞽女の名を知らないが、子供のうちに全盲となり、瞽女になったが、頭のよい人だったという。セキさんは23才で八木家に嫁入りしたが、瞽女はそれよりずっと前に30才代で亡くなったらしいという。

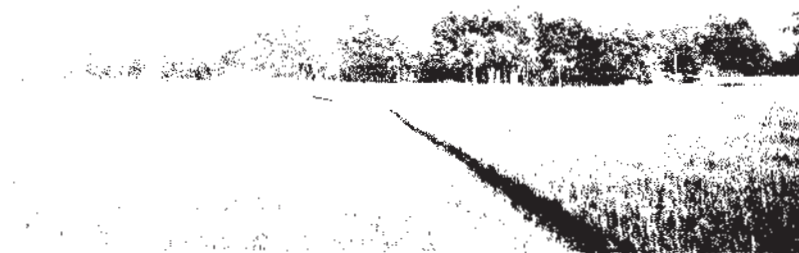
作右エ門の旦那寺、同村の敬泉寺の過去帳では、同家の記載分として、大正13年、56才没の勘次郎 妻 マツ、明治41年、72才没の勘次郎父、それに明治36年5月24日没、行年34才11ヶ月の勘次郎姉、釈尼妙光の3人が見える。セキさんなどの話を勘案すると、この勘次郎姉釈尼妙光が瞽女であったことは疑いない。八木家に嫁いだ姉、妹の瞽女、弟の勘次郎は慶応2年、明治2年、同4年の生まれであったことが知られる。

田中分家の瞽女は、その名が知られない。敬泉寺の過去帳にも俗名の記載がない。おそらく井部ヨネ瞽女の弟子であったと思われる。年に21才の開きがある。六万部出身の瞽女二人がこの人の弟子であったと伝えられ、優れた親方であったとみられるが、34才の若さで亡くなった。

居斗の「兵治右エ門」の瞽女は、ツヤさんによると、自分よりも年寄りであったが、西野島の3人の瞽女の中では一番若かった。全盲の人だが、後に瞽女をやめ、赤倉温泉に行って亭主を持ち、静岡の方へ行ってから子供

が一人でき、その子も目の見えない人で、郷里に連れて来て、両親に世話のみさせていたという。

兵治右エ門の家はかなり前に絶えた。その親類筋にあり、しかも東隣りであった「堀端（ホオリバタ）」の西条勝二氏（明治34年生まれ）によれば、兵治右エ門の瞽女は上野ソメといった。兵



瞽女出身の里：吉川町西野島

(撮影/48.7.11)

治右エ門は明治17年に火事を出し、西条家も類焼したのであったが、賢女の父親が酒飲みで、仕事も満足にせず、母親が焼けた古材を使って小屋のような家を建てて住んでいた。そのころ、おソメは賢女となって盛んに旅に出ていたのであろう。やがてソメに兵治という旨の私生児ができた。その子を母親に世話させていたが、次いでソメは東京へ出かけて按摩師になった。しばらくして、郷里においていった母親と子供を連れに来た。そのとき、勝二氏はまだ8才（明治41年）くらいであったが、おソメを初めて見たし、親戚の家に手を引いて迎えて行ったこともある。ソメは目はほとんど見えないようだったが、顔だちのよい器量者であった。東京へ行った兵治は母親と同じく按摩をやっていたらしい、という。

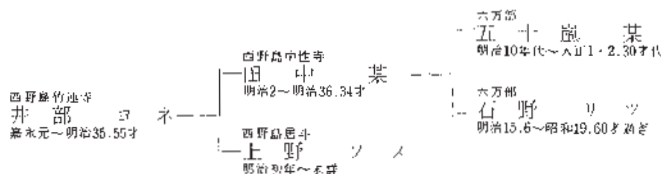
賢女ソメについて、ツヤさんと勝二氏の話に幾分食い違いがあるが、今は勝二氏の説を重視しておこう。二人の話の総合すれば、賢女の名は上野ソメ、明治の初年に生まれ、30年代に賢女稼業をやめて東京へ行ったものと思われる。だれの弟子ということをはっきり伝えていないが、年齢からすると井部ヨネの弟子であったように見受けられる。

六万部の「稲場」の賢女については、ツヤさんは自分より少し若かった人というだけで、そのほかのことは語ってもらわれない。稲場の生まれで、同村に分家に出た五十嵐ハルノさん（明治33年生まれ）によると、同女の叔母であるが、その名がはっきり記憶に残っていない。ミトセと呼んでいたであろうかというが、確実性は極めて薄い。両眼失明の人で、西野島の作右エ門の賢女に弟子入りした。ハルノさんの母親が手を引いて西野島の師匠の家に行ったが、まだ子供であったハルノさんもそれについて2度ばかり行ったことがある。また、師匠をはじめ仲間も稲場の家に来て馴をうらったことがあった。仲間と門付け遊業に出ていたが、お客に呼ばれて一人で出かけることもあった。隣村増山の親戚に呼ばれたときは、15日から20日ぐらいいも帰宅しないことがあった。

ハルノさんが6才（明治38年）のとき、父親が事情あって家出し、母親が賢女の人を連れて東京のきょうだいの元へ身を寄せた。そして東京で叔母が賢女を縁付けたが、年を取ってからの結婚であったから、難産がもとで死亡した。ハルノさんが13・4才ころのことで、賢女は30才代であったという。大正1・2年の死亡である。

六万部の石野リツは、後年リツの家に婚養子に入った石野周平氏（明治41年生まれ）によれば、吉右エ門の末娘で、明治15・6年ころ生まれ、幼いとき病気で目を患ったが、かすかに見えた。西野島の作右エ門の親方について芸を習った。師匠は腕がよく、稽古を教えるに厳しい人であったという。また吉右エ門家に嫁いだ石野シゲさん（明治34年生まれ）はリツとはいとこに当たる人だが、彼女が嫁入りしたころはもう西野島・六万部の賢女ではリツ一人になっていて、土底のキリ・キイ、田麦のメケなどと一緒になって商売に出ていた。昭和に入ると、リツは生家吉右エ門の屋敷の前に自分が稼いだ金で家を建てようともくろんだが、思わしくなく、昭和10年に近くの原之町に山畑を買い、古い家を買って入った。そして兄下蔵の末娘をもらい、鳥越出身の周平氏を婿養子に迎えた。周平氏によれば、リツは原之町へ来てから、二夏ほど湯治かたがた商売に出たのが最後の稼業となったという。リツの位牌によれば、法名釈尼妙律、昭和19年1月22日の没である。60才を超えて亡くなったらしい。

### 西野島組師弟系譜





## (3) 田麦組

上底組のキワ・トヨ・キイ師弟、六万部のリツと一緒に組んで巡業したという田麦の替女タケを調査することで、東頸城の山替女の1師弟系譜上の3人が確認された。

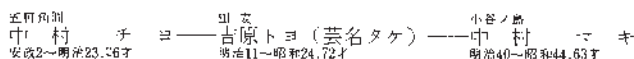
田麦のタケの師匠は、大島村五軒角間の中村家、屋号「親家」の替女である。本名はチヨといった。旧田麦村の戸籍簿には、チヨは初代徳右衛門四女、二代徳右衛門妹で、安政2年7月19日生まれ、明治23年9月20日死亡とある。中村家の旦那寺、吉川町山直海の専徳寺過去帳によれば、法名釈尼妙敬、中村徳右衛門妹、俗名チヨ、明治23年9月28日没、行年36才とあって、死没の日付に相違がある。

同家のリサさん（明治30年生まれ、大正5年入家）は、このチヨ替女の詳しい事跡を知らないが、入家後間もなく三十三回忌の妻法がつとまったといい、生前に田麦出身の吉原トヨ（タケの本名）という弟子があり、そうした関係で、リサさんが嫁いだころから昭和初年ころまで、トヨが土底の人などと2・3人でよく巡業にやってきて、中村家を宿にしていたという。そして、トヨは戦後間もなく他界したが、その葬式にリサさんがお参りに行ったという。

大島村田麦の替女タケは、本名を吉原トヨという。家の屋号は「ジョウ」といった。替女のめいに当たるという吉原モトイさん（大正元年生まれ）によると、トヨは明治11年に生まれ、4才のとき両眼失明した。やがて五軒角間の中村家の親方に弟子入りし、芸名をタケと称した。タケの姉妹弟子はなかったが、自分の弟子に小谷ノ島のマキがいた。モトイさんが子供のころ、トヨの仲間は6人ぐらいでよく家に来て泊まっていた。その後3人になったが、土底や六万部の人に世話になり、一緒に出歩いていたという。そして巡業は60才近くまで続けたというが、これは昭和9・10年ころで、キイさんや石野周平氏の話と合致する。トヨは、昭和24年、数え年72才で没した。

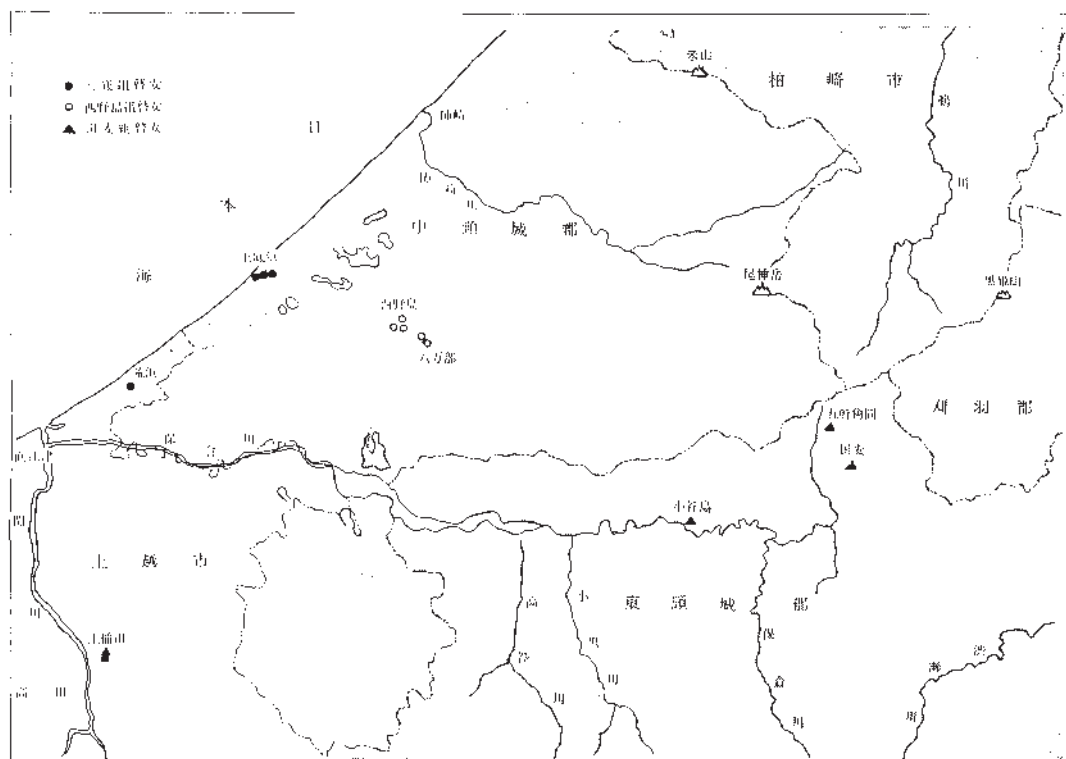
蒲川原村小谷ノ島のマキは、姓は中村、屋号「中村屋」の出身である。明治40年に生まれ、2・3才のとき両眼失明した。田麦のタケに師事し、替女になったが、上底浜の柳沢キイさんが名ぶるまいをした大正8・9年ころには、もうマキは替女稼業をやめ、按摩を商売していたという。したがって、替女となっていたのは子供時分で、わずかの期間であったようだ。後年マキの家に養子に入った中村カツイさん（昭和8年生まれ）によると、マキは替女をやめてから大島村にいた按摩の師匠にその業を習い、直江津で借家して按摩を開業していたが、その後信州の野沢温泉に行つて6・7年住み、さらに昭和18年、東頸城松之山の湯本に移り、「中村屋」の看板を出して稼業を続けた。そして、同29年、めいのカツイさんを養子に迎え、家督を継がせ、同44年、63才で没した。替女の稼業は師匠よりずっと早くやめ、按摩になった人であった。

## 田麦組師弟系譜



上掲のごとく、高山替女組に所属しない、西頸城・東頸城の師弟系譜による替女集団三つを取り上げ、いずれも現在の伝承から遡源可能な範囲内の替女を録したが、その人数はわずか土底組4人、西野島組5人、田麦組3人で、弱小集団の域を出ない。「組」で呼称されていたことを確認したのは土底組だけで、他は生存者もおらず、伝承も途絶えたようで明らかでない。西野島組、田麦組としたのは、私が便宜的に、かつ当然そうあるべきとの考えから付けた呼称であることを断っておきたい。

これらの組々が、さらに古い時代どのような歴史をたどってきたかということは、これだけでは推定すること



土底組・西野島組・田麦組簀女出身地図

ができず、今後の研究にまづほかない。その衰退期においては、土底組は柳沢一家3人が昭和初年まで稼業を続けたが、西野島組は、5人中4人が死没あるいは廃業により明治30年代に組から消え去って、あとに残ったのは石野ワツだけとなった。田麦組も先代師匠は早く死亡した。これでは商売が出来ないということで、西野島組のリツ、田麦組のトヨ（タケ）、マキの3人は土底組の3人に合流して稼業を続けるようになったが、間もなくマキが職業替えし、昭和に入ると土底組のトヨ（シズ）も結婚した。あとに残ったのはキワ・キイ・ワツ・トヨ（タケ）の4人であったが、もうこうなると各自ばらばらとなり、昭和10・11年ごろ簀女活動が完全に中止されたのであった。

### 3. 年季と巡業

#### (1) 年季

土底組・西野島組・田麦組の入門や年季修業、年あきぶるまいなどが、どのような方式でなされていたかということは、ことに古い時代のことが分からない。そのうえ、西野島組や田麦組には簀女の生存者がいなく、全くお手挙げの状態である。しかし、柳沢キイさんには存命中私が入って聞いているので、土底組についてある程度その仕組みを知ることができる。以下、それを紹介することにした。

キイさんが簀女であった当時、土底組の年季階梯で知られる事例は、姉弟子のトヨと自分だけである。しかし、入門については、キイさんは師匠の実子であるから、特別のこともしなかった。トヨの場合は、内弟子にして柳沢家に住ませたのであるが、入門に際して形式ばった契約もなかったという。キワがトヨの実の親に「くれないね」と言ってもらってきた。もらってきてもすぐ、師匠はトヨにシズという名を付けた。そしてそれ以後、

師匠はトヨの名を呼ぶときは「おシズ」で通す。これが贅女名である。もちろん贅女名であるから、この名は村役場に届けない。このとき特別の祝いごとはしなかったという。

入門して何年か修業すると「名替え」が行われ、「名ぶるまい」をする。大正8・9年、トヨが18・9才、キイが22・3才で一緒に名ぶるまいした。トヨが8才くらいで入門しているから、約10年ほど、キイは20・21才で芸を習い込んでいるからわずか2・3年で名ぶるまいしている。キイさんの例は一般におしなべるわけにゆかないが、当時としては入門後何年目に名替えるという厳格な規定はなくなっており、適当に師匠が見計ってやったらしい。トヨは松梅という名をもらい、キイは梅藤をもらった。キイさんによれば、芸を修得して一人前になり、今の一般の人の成人式くらいになると、従来の贅女名をしっかりした名前に変更するものという。

名替えたあとの名ぶるまいは、自分の生家でする者もあったが、大抵は高田の在、上稲田の佐野家に行っていたという。佐野家については後に詳述するが、いわゆる浜贅女・山贅女の巡業の休息場であり、妙音講の宿ともなった重要な意味を持った家である。その時期は決まっていない。適当な日を選んでした。その席で、名替えた贅女は紋付を着て、島田を結び、一般の嫁入り祝言と同じように振る舞ったという。名替えの贅女の親が酒・肴の御馳走をして、師匠や姉妹弟子、友達などの贅女、親類衆を呼ぶ。引をうたい、酔が回れば日の幾分見える贅女などは踊る者もあった。

キイさんによると、土底組の年季は何年とは決まっておらず、名ぶるまいは年あきに酒を飲んだものとも、年あきぶるまいと同じものともいう。そうしてみると、土底組の名ぶるまいは、中越贅女長岡組・刈羽組・三条組などの年あきぶるまいと同様な意味を持つ儀式であったことが分かる。ただ、中越地方の贅女には、刈羽組・三条組のように、年あきぶるまいを仲間の妙音講と同時に勤める形式があり、そこでは年季修業で出世して名替えし、その名を披露し振る舞うということは行われていない。

そこで注目すべきは、キイさんの語る土底組の入門・名替えの方式が高田組のそれに類似していることである。高田では、入門したとき師匠から贅女名をもらい、3年目に三年日の祝いというものを簡単にやり、7年目に名替えが行われ、出世名すなわち本格的な一人前の芸名をもらい、本曲となった。それから3年後に年季があき、姉き贅女になり、弟子を取る資格が得られた(市川信次氏教示)。組織が小さく、厳格な規約も早く失われてしまったと思われる土底組で、名替えたあとを本曲と称したか、名替えの後年季があけるまで期間があったかどうかは、キイさんからはもう聞き出せなかったが、高田贅女に準ずる方式であったことは疑いない。これが高田組の模倣あるいは移入方式であったとすべきかどうかは判定できないが、上越贅女集団の一つの特色を示していると言えそうである。ただし、他の西野島組・田妻組がどのような形式であったか、全く不明である。

## (2) 巡業

三つの組が、明治時代どのような日程でどのような地域を巡業していたかということは知ることができない。キイさんが仲間に加わり、キワ・トヨ(シズ)と西野島組のリソ、田妻組のトヨ(タケ)の5人で巡業していた大正中ごろから昭和の初年ごろにかけての模様を、キイさんの話からうかがうこととする。

一年中で最初の稼業は、4月の西頸城の日本海沿岸部の漁村を主体とする巡回であった。糸魚川の手前、梶尾敷や大和川まで足を伸ばした。西頸城の山峡に開けた桑取谷・名立谷・能生谷の部落には入らぬが、最後の早川谷は湯河内まで行くことを例としたという。この巡業は4月の月内に帰った。

5月から6月にかけては、柿崎の在から中頸城の山間部落一帯を巡回し、山植ころに掃宅した。

7月には、東頸城の山間部を浦川原村、大島村から松代町と稼業し、最後は松之山の湯本にいたった。松之山は玉木屋旅館に泊まり、湯治しながら昼は門付け、夜は温泉場を流した。お盆前に帰る。

8月は、お盆が過ぎてから出発し、7月と同じ東頸城の山間部を巡り、松之山町まで行って9月に帰った。

9月末に帰ったあと、休みを取り、稲刈りが始まるころ出発し、中頸城の平野部を巡業して高山在、新井在か

ら二本木を通り、関川方面まで行って、ぐるぐる回って帰る。その帰途、高田在上稲田の佐野家に寄って、みんなで妙音講を勤め、これで一年の巡業の終わりとした。

以上、年5回旅を通例としたが、県外には出たことがないという。高田組は長野・群馬の方にも訪れたが、この組はそうした遠方の旅稼業をしていない。人数も少ないし、それほどの気はくもなかった。西頸城の沿岸部の巡業にしても、大和川どまりであって、糸魚川からさらに松本街道に入ったわけでない。糸魚川簪女 の存在を念頭においての措置であろうか。年に5回旅というのは小刻みて、それ自体に旅稼業の消極性を物語るものがある。

妙音講が終わって帰宅したあと、翌年春3月までは自分の家にいた。この冬期に、未熟な簪女は師匠から芸の稽古を受けたという。

#### 4. 上稲田の佐野家と妙音講

浜簪女・山簪女が巡業の際、宿泊・休息し、妙音講など仲間の法会・集会を開いていた家が上越市上稲田、俗称稲田1丁目にある佐野家であった。上稲田は高田の東側を貫流する関川の対岸にある。組の所在地からこのように離れたところに、簪女の仲間宿があることは珍しい。とともに、一般民家が簪女祭のごとき機能の一端を持っていることも他に例がない。

稲田は、かつて頸城平野における物資の集積地として知られた。平野で収穫される米穀が水路・陸路をもって直江津に運び出されたし、直江津からは塩や沓産物が運送、陸揚げされた。背後に高田をひかえているのであり交通・運輸の一大拠点であった。かつては米穀商が15・6軒も軒を並べていたという。佐野家の当主正治氏（明治38年生まれ）によれば、佐野家は米穀商でも庄屋でもなかったが、昔は簪女の宿をするほどであるから相当裕福な家であつたらしいという。昭和43年に家を改築したが、それまでの古い家は、町屋でありながら6間間口という大きな構えであった。

この佐野家に簪女が集まったのは、古い時代はことに多かつたらしい。正治氏が記憶のあるのは、氏が小学校にまだ入学しない時分、つまり明治末年、毎年11月上旬ごろ開かれた妙音講に15・6人の簪女が集まったという。日の見える手引き専門の人を入れての話である。これらは高田簪女ではなくして、上底浜など浜地帯の組、中頸城・東頸城の山地帯の組と、もう一つのどこかの組の三組ぐらいであったように思う、という。

家を改築する前まで、妙音講に使ったお膳や朱塗りのわん、大皿などが保存されていた。その組数は22・3人分あったので、それより古い時代はもっと大勢の簪女が集まったのではないかと。佐野家にはまた、かなり分厚い簪女の名簿が伝わっていたが、これも新築の際に紛れ、探してもらっているがまだ見付かっていない。仲間入りしたときの記載名簿か、一人前になった簪女の名を連ねたものか分からないが、多分後者であろう、という。私もその説に賛成で、おそらく名替えたあと、名ぶるまいした簪女の名を録したものと思われる。名ぶるまいが佐野家でも行われたという柳沢キイさんの話に照らしても、その現実性が強いのである。これが見られれば、古い時代からの簪女の出所・人数・組の大意が知られると思われるが、いかんともしがたい。



浜簪女・山簪女が蟻集した上稲田佐野家界わい（撮影/48.5.13）

正治氏は、明治末年に15・6人、それ以前はもっと人数が多かったようだというのが、それは土底組・西野島組・田麦組の警女を含んだ警女仲間のように思われる。明治末年といえば、土底組ではまだキイさんが仲間に入っておらず、西野島組では私が挙げたうち4人がいなくなっている。田麦組もトヨだけであったから、他の組が入らなければいけない勘定になる。それがどういう組であったか分からないとしても、浜警女・山警女と称してよい中・東両領域の周辺部に散在するいくつかの師弟集団仲間があり、それが一つ組として佐野家を宿とし、共通のお講組を構成し、妙音講を執行してきたということは、ほぼ間違いない推測と思われる。いわば、三条組の属するお講組と同じような形態のものがここにもあったのではなからうか。西野島組の石野リツや田麦組の吉原トヨがそれぞれ一人きりになって土底組と合流した、とキイさんなどは言うが、実はそれは巡業組構成上のことだけで、妙音講としては昔から各組が仲間となっていたもので、そうした背景がなければ巡業合流も不可能であったともいわれるであろう。

また、佐野家がこの組々の仲間宿となった由来についても、キイさんは「佐野家は、庄屋様からお前宿をしないと言われて宿をするようになったもの」と言っているが、果たしてこれが妥当であらうか。警女の泊まり宿は、昔は庄屋・名主など富裕な家がしたものと伝えており、その説に影響された解釈のように思われる。むしろ私は、佐野家に所蔵される『警女式日』(後掲)の奥付に「上稲田村 利正一所持」とある記載に注目したい。江戸末期、佐野家に利正一という座頭が出たらしく、その人の関係で警女の宿をするようになったのではなからうか。盲者同士にいたわり合いの気持があり、付き合いがある。座頭と警女とはよく結婚にいたる例が多い。利正一なる人物の伝えが家になく、その妻が警女であったという証跡もないが、近年も佐野家に口の障害者が出ているから、利正一が佐野家の出身であることは間違いないようである。

上稲田にそうした仲間宿ができたことについては、ここが高田の町の東岸にあって、水陸を問わず、交通・運輸に関する要衝の地であったことを思うべきで、警女の巡回稼業上にも重要な位置をしめるものであった。

ところで、警女の宿はもとは佐野家の本家でやってきていたが、大正時代のいつごろからか、本家と同じ棟を分けていた分家に移ることとなった。分家は、現当主忠二氏で、6年ほど前、近くの現地(同じく稲田1丁目)に移転したが、それまでは本家の6間割りのうち2間分をさいてもらい、居住していた。忠二氏の妻トシさん(大正11年生まれ)の話では、分家に出たのは祖母スイ(大正12年、70余才没)で、日の不自由な人であった。スイの跡を継いだのは、その娘で婿とりであった、トシさんの母リヨ(昭和44年、76才没)である。このリヨの時代に、本家の跡目の代が替わり、警女たちの世話をしなくなった。それでリヨが面倒をみ、妙音講もそれ以来分家で行われるようになったという。トシさんが物心のついたころは、すでに分家の世話に帰し、妙音講は11月の取れ秋(稲の収穫のあるころ)で、もうこたつもしていたころであった。警女は土底の方の人など3・4人できて、3・4泊して行ったが、母が食事の面倒をみていたという。

柳沢キイさんが警女の仲間に入り、巡業を始めたのは大正6・7年であるが、それ以来巡業仲間は土底組キフ・トヨ・キイ、西野島組リツ、田麦組トヨの5人であった。トシさんが記憶する3・4人というのは、この5人のうちのいずれかであったと思われる。

では、当時の妙音講の模様をうかがうことにする。

キイさんによれば、ミウホソウ(妙音講)はみんなが稲田の佐野さんに行っていた。床の間に弁天の掛け軸を掛け、尼さんと呼ばってお経を読んでもらう。また「座談会」に尼さんのありがたい話を聞く。そして佐野家の主人が御定日を読む。お斎が出て、酒を飲み、みんなが得意の唄を出し、果ては踊ったりすることもあった。1年の稼業を無事に終えたことを祝う締めくくりで、コバシヤゲ(コウバシヤゲ)のお講であった、という。

その警女の妙音講に勤行を勧めたという庵主さんがまだ健在であった。同じ上稲田(俗称稲田3丁目)の曹洞宗清風院の荒木泰淳師(明治36年生まれ)で、泰淳さんの話では、佐野家での警女の妙音講に出勤したのは、先師匠匠荒木勝光師(昭和2年、数え年78才没)の跡を継いだものであった。



佐野家の旦那寺は、高田市東本町5丁目の浄土真宗叢福寺であるが、警女の妙音講にはその旦那寺を呼ばず、村内の庵主を呼んでいた。近くで好都合のためか、女の集まりだからとくに尼僧を頼んだのか、その辺の事情は分からない。ほかの警女組での妙音講は、大抵旦那寺を呼んでいる。

泰淳師は10才でこの庵寺に入り、高等小学を終わって2・3年後、北魚沼小出門にある曹洞宗の尼僧学林に学び、3年後寺に帰った。大正13年と思われる。そして師匠の没後、その跡を継いで妙音講に出動したのであった。佐野家の分家であったという。初めて妙音講に列席した当時の感慨を、次のように語っている。

仏壇の脇の床の間に弁天の絵像が掛けられてあり、そこにお神酒や御飯・果物・野菜・お菓子などが供えてある。本尊の弁天は、波の上に浮かんでいる坐像で、きれいに彩色がほどこされていた。

泰淳師が座につくと、警女の親方が弟子たちに「お前たち、こんだ若院住様が字間してきなしたから、伝記を読んでもらいましょう」と言った。伝記とは式日のことで、式日の初めに警女の縁起が書いてあるから、伝記とも通称されたのであろう。親方がそう言ったところを見ると、先住勝光師は伝記を読まなかったのでしょうか、と泰淳師は言う。昔の筆書きだから文字が読みにくい。それで、式日の朗読は中断していたとみななければならない。キイさんが、式日は佐野家の主人が読んだと言っているのは、勝光師が読まないで、代って主人が読むようなことがあったものであろうか。

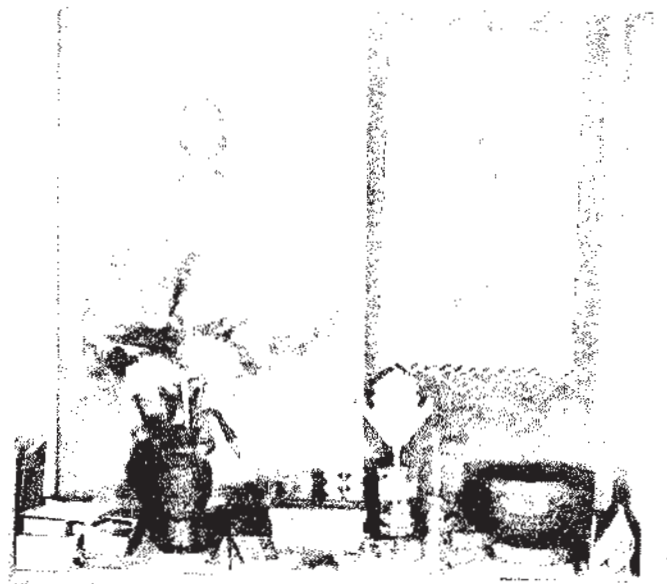
いよいよお講の始まりとなった。親方が下(しも)言葉(上越地方でも下の方のなまりのある言葉)で「庵主様、始めてくらしやれ」と言った。勤行は般若心経・観音経・舍利礼文・回向の順にやった。お経が終わると、みんなが焼香した。回向は息災延命の祈願と物故者の追善の意味が含まれているという。

勤行が終わって、みんながお膳についてから、泰淳師は伝記を読んだ。「久しぶりに聞かしてもらおうがのう」と親方が言った。

お膳は、警女にしてはずいぶん御馳走であった。お酒も出た。食べている最中、行儀がよくて、その修行ぶりに感心した。目あきでも茶わんをひっくり返すのに、一人として御飯つぶをこぼすものがない。泰淳師は、自分で食べるのを忘れてしばし見とれた。

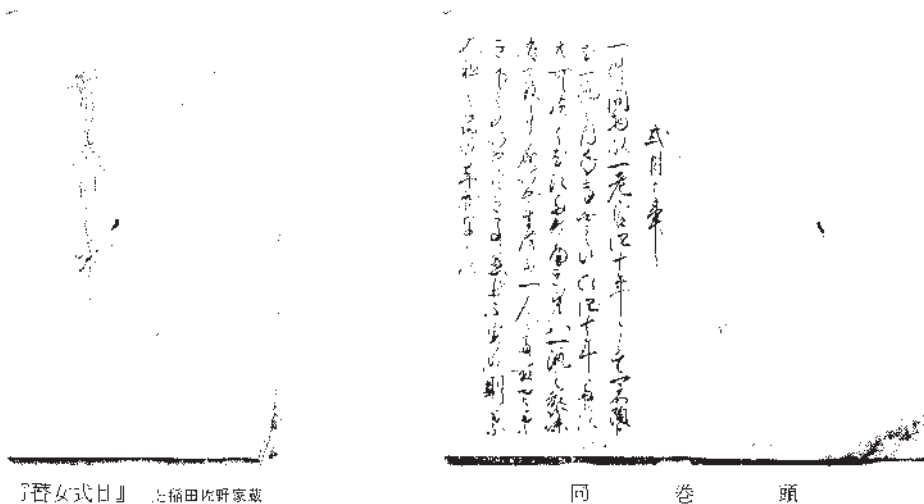
次いで、親方が「庵主様に聞かせるために唄わっしやい」と弟子たちに言った。唄が次から次へと出る。弁天様に向かって唄を奉納するという形ではなく、宴会の余興に唄って楽しんだのであった。

泰淳師は、その後毎年妙音講に出仕したが、それは25・6才の昭和12・3年まで続いたのではないかと。しかしこれは、実際より1・2年あとに見立てているようである。泰淳師がまだ子供で、先代師匠が存命のころ、大勢の警女が集まり、お茶を飲み庵寺を訪れる者もあった。それが最後は、10人未満の人



佐野家に祀る警女の本尊弁天

(撮影/49.1.31)



数となっていたという。

妙音講の歴史的推移，その次第を関係者の話から大体うかがってきた。昭和10年くらいで妙音講は終わったとみてよい。

佐野家の本家に、この妙音講に掛けて拝んだ弁才天の掛け軸と、式日が今も伝わっているので紹介することにした。

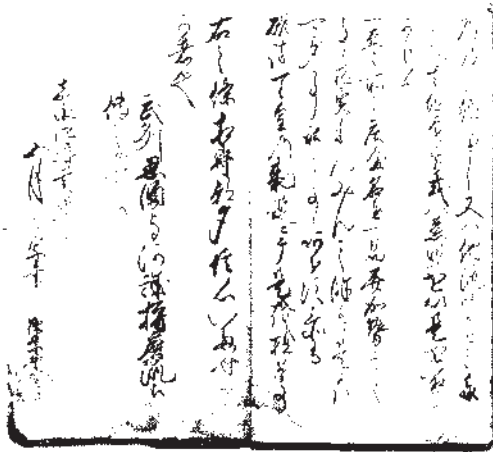
本尊の弁天は2幅あって、新築した佐野家の二階に厨子に入れ、並べ掛けてお祀りしてある。いずれも紙本着色の絵像で、本紙の法量は向かって左幅が縦82.0cm、横40.9cm、右幅は縦51.9cm、横30.4cmで左幅よりかなり小さい。ともに波上の岩座に坐る唐服装の弁天坐像で、右手に三結柄剣、左手に宝珠を奉持する。誓女の本尊弁天は、一般には琵琶を弾いている姿に描かれているが、これはそうでない点が注目される。そして、左幅の弁天には頭上に鳥居形冠をいただき、右幅の弁天は頭部の背後に円相を現わしており、両者が像容上かなり相違するのを認める。彩色も左幅が多量にほどこされ、右幅は単彩である。しかし、両者とも江戸末から明治初めにかけての制作であろう。

どうして2幅あるかについては明らかでない。佐野正治氏も不審であるという。泰淳師が拝見したのは左幅らしい。右幅はともすると座頭の本尊で、佐野家に別に伝えられたものが、このような姿で祀られたのではないかという気がする。厨子仕立てにして祀ったのは、誓女の妙音講が行われなくなって間もない昭和14年のことであった。目の神としての信仰があり、東京下谷竹町の水谷家の娘が目を患ったが、この弁天を信仰して治ったということから、昭和15年7月、この厨子の垂れ幕を寄進し、これが今も使用されている。

式日は、巻子本でなく、楮紙袋綴である。全9紙あり、表紙・裏表紙各1紙、本文を7紙に収める。縦27.5cm横17.8cmある。奥付けによって、これが嘉永4年5月に謄写され、上稲田村利正一の所持本であったことが知られる。正治氏によれば、この本が誓女の妙音講に読まれた式目であるという。

式日の本文は、土底組の『誓女式目』、高田誓女の式目ともほぼ同系であるが、錯綜がある。冒頭の第1丁に「式日之事」としてその最初の4条を書き、それに続いて本来冒頭に出すべき誓女縁起と「院京之事」2条を出し、それから式日之事の前の4条に続くあとの条文を出している。本巻を綴るときに、誤って途中の1紙を最初に持ってきたというようなものではない。表題に「誓女式日之事」とあり、一般にこれが式日と呼ばれることから、「式日之事」の最初の4条を冒頭に書くような誤りをおかしたものであろう。この4条を配置替えすれば、土底本・高田本と同じ内容のものであることが分かる。土底本との因果関係は必ずしも明らかでない。





同 卷 尾 奥 付 (1)



同 奥 付 (2)

なお、この本は判読に困惑するような文字がまま見受けられる。決して能筆の書とはいえないが、そのため後に朱点を加えている。上稲田の庵主荒木勝光師が読めなかったというのも、無理からぬことであろう。

資料 I : 替 女 式 目 上越市上稲田佐野家蔵本

(表 題)

替 女 式 目 之 事

式 目 之 事

一、仲問者、以一老壹四十年ニして可為頭ト、尤一派之内、年高無之候ハ、四十年ニたらず共可統之、尤頭たるべき身ハ、一派之願吟味有可致事成、あやまって一人ニて取さばき、下々のあやうき亭、慈悲不実成則は、大祖之諸願成就ならず

一、一老ハ中老ニお之字ニて可呼事、尤初心かた名ニて可呼也

一、仲問ニて不行式有之候ハ、年落之罪ニ有之候、五年七年十年、其つみ之しなをきはき、右之年ニ取立可返事

一、一派を背き、派ニ師匠を取候ハ、右之師匠ニ掃院共、年数ヲけつり掃ス

謹而以ニ、人王五十二代嵯峨天皇第四ノ夜女ニテ相模ノ姫宮、替女一派之元祖トならせ玉ふ事、忝モ下賀茂大明神、末世ノ盲人ヲふびんニ思召、忝モ尊ノ腹ニヤトラセ玉ヒ、仮ニ胎内ノ御月シヒテ御誕生マシマス、父天王母后、神社仏閣御祈誓有之ト云々、本々大願成ノ就種ナレハ、更ニ甲斐アラス、相模ノ姫宮七歳ノ御歳、夢中ニ、紀伊国那智山如意輪観音御夢枕ニ立セ玉フ、若ハ末世ヨノ女人盲人ノ可トナラセ玉フ可キ下賀茂大明神庇化ニテ渡セ玉フ、諸芸ヲ本トシテ、世渡ヲ民間ニ下リ、イトナミツカセ玉フベキ相友ヲサツケトノ徳ニヨリ、則五派ト定メ、ミヤクワン派、カンワ派、クニ針問派、ゴセン派、ヲミノ派弟子五人是ヨリ友トシテ諸芸ヲハケムベシト、既ニ御夢覺サセ玉ヒ、父母御物語、父帝母之コト難有徳有トテ、則子ツゲノ中之ヤクワンク二人ノ弟子、一条姫宮、播磨ノ国玉府ヨリ国司ノ御子、下野ノ城主之姫君、ヲミノ派ト申也、五人ノ御弟子カツコウノ友トシテ、コトカナチウ芸共徳ニヒラキ、十五歳ヲ経テ中老分ス、官録有之、尤初心ニテ弟子ヲトル事、内ニテ修行ニ出サヌ前ナレハ苦シカラス、但シ中老ヨリ弟子モロウトモ、修行ニ出ル

事、嵯峨天皇ノ御定、院宮ノ徳ナリ、廿七歳ヲ経テ老宿ト号スナリ、但シ誓女ノ宿ニ入レハ賤キ家ニ行ス、武士百姓町人ハ売買ニヨルヘシ、且寺修験門徒神主、是ニハ出ヘキ也、若作法背ク者コレ有ハ、髪ヲ切、竹杖預ケ、其科ノ品ニヨリ、一則ヲ追ヒ、或ハ十里廿里外ニ流罪可有之事也、但シ理タツニハ、当道ノサハキヲ得ベト云云

#### 院 宣 之 事

一、信心ノ本尊如意輪観世音ハ、妙音菩薩ニテ渡セ玉フ故ニヨリ、信心ノ徳妙音菩薩、弁財天、下賀茂大明神常ニ可祈者也、世渡守護ノ神ニテ渡セ玉フ、ヲロンニ心得ナハ、立所ニ御野可有之者也

一、世渡リハ、武七、所ノ庄屋、名主、在家ニ至ル事、嵯峨天皇ノ勅諭、日本修行御思ノ徳ナリ、信心スヘキト云、依テ院宣如件

年寄年数とす可し

一、弟子取後日ニ定ラサシテ師を極め候者之事、先約速江相帰シ、願を以、時之宜敷ニ随ヒ、もらひ受へき事、尤其あらそひハ老人をすて候ハ、賀茂大明神之神罪可有之事

一、約速の弟子を連れ、三年已上世渡り仕候者、先約速江老年ニ付金壹分ツ取出シ貴諸可申事

一、嵯峨天皇、誓女能の三字を改、誓女かせく事御定也

一、際取の年貢、月数を以老ノ武百文、五派の年貢、勅定を以御定致置事

一、師匠終リ、年かゝる者ハ、組ニテ拾年回宿を極め、年つもり候ハ、右之師匠の跡を継ヘシ、又ハ他派の弟子たり共、其組遠方或ハ慈悲を以、是を取立可申候

一、在々所々庄屋名主一宿并かせき之事、極実れんみん之余リ、是を可受事、私之事ニあらず、亦も嵯峨天皇ノ勅諭ニテ是を極候事

右之条相守、朝夕信心いたす可者也

武洲忍領ノ河越播磨派ニ伝之者也

嘉永四辛亥年

五月之写書 □□□發吉  
之書

上.稲田村

利正一所持

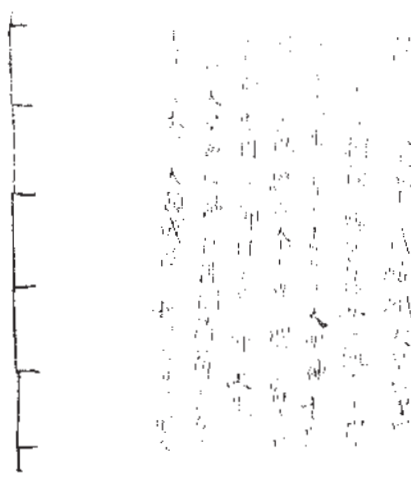
資料Ⅱ：誓女式目 大湯町土底浜柳沢家藏本

(表 題)

誓 女 式 目

謹而以レハ、人王五十二代嵯峨天皇第四ノ女ニテ相模ノ姫宮、誓女一派ノ元祖トナラセ玉フ事、辱モ下賀茂大明神、末世ノ盲人ヲ不便ニ思召、忝モ尊ノ腹ニ宿トラセ玉ヒ、仮ニ胎内ヨリ御目シヒテ御誕生マシマス、父大皇后、神社仏閣御祈誓有之トイヒ候、本ヨリ大願成就ノ種ナレハ、サラニ甲斐アラズ、相模ノ姫宮七才ノ御年、夢中ニ紀伊国那智山如意輪観音枕ノモトニ立セ玉ウ、君ハ末世ノ女子盲人ノ司トナラセ玉フ可キ下賀茂大明神応化ニテ渡ラセ玉ふ、諸芸ヲ本トシテ世渡リヲ民間ニ下リ、當ツカセ玉ふヘキ相友ヲサツケトノ告ニヨリ、則五派ト定メ、ミヤクン派、カシワ派、クニハリマ派、コセン派、ヲミノ派弟子五人、是

警女式目



『警女式目』 大澤町上底浜柳沢家藏

同 卷 頭

ヲ友トシテ諸芸ヲハケムヘシ、既ニ御夢サメサセ玉ヒ、父母御物語リ、父帝母后難有眷アリトテ、則子ツケノ中ノ約束二人ノ弟子、一条姫宮、<sup>(德)</sup>協摩之国主府ヨリ国司之御子、下野ノ城主之姫君ヲフミノ派ト申也、五人之御弟子カ通行ノ友トシテ、諸芸其徳ニヒラキ、十五歳ヲ経テ中老ト号ス、<sup>(三)</sup>宜録有之、尤モ初心ニテ弟子ヲトル事、内ニテ修行ニ出サヌ前ナレハ苦シカラス、但シ中老ヨリ弟子ヲ賈トモ修行ニ出ル事、嵯峨天皇ノ御定院宣ノ徳ナリ、廿七歳ヲ経テ老宿ト号スナリ、但警女ノ位ニ入レハ賤家ニ行ス、武士百姓町人ハ売買ニヨルヘシ、且寺修験門徒神主是ニハイムヘキ也、若作法背ク者之アラハ髪ヲ切、竹杖ヲ預ケ、科ノ品ニヨリ所ヲ追ヒ、或ハ十里二十里外ニ流罪可有之事也、但シ理タタブンハ当道ノサバキヲ得ヘント云云

院 宣 之 事

- 一、信心ノ本尊如意輪観音妙音菩薩ニテ渡らせ玉ふ故ニヨリ、信心ノ徳妙音菩薩、弁財天、下賀茂大明神常ニ可祈誓者也、世渡守護ノ神ニテ渡らせ玉ふ、ヲロンカニ心得ナハ、立所ニ御誓可有之者也
- 一、世渡リハ、武士、庄屋、名主、在家ニ至ル事、嵯峨天皇ノ勅諭、日本修行御恩ノ徳也、信心スヘキト云、依テ院宣如件
- 年寄年数トス可シ

式 目 之 事

- 一、仲間者以一老宿四十年ニして一派之頭トす、尤モ一派之内年高無之候得者、四十年ニたらず共可統之、尤も頭たるへき身ハ、一派之願吟味可致事也、あやまつて一人ニテ取捌き、下々のおやうき事、慈悲不実なる時者、大祖之諸願成就ならず
- 一、一老より中老<sup>五</sup>おの字ニテ可呼事、尤も初心かた名ニ而可呼也
- 一、仲間ニ而不行届きし事有之候ハ、年落の罪ニ有之候、五年七年拾年、其罪乃品を捌き、右之年ニ取立可返事
- 一、一派を背き、他派江師匠を取候ハ、右之師匠<sup>五</sup>帰リ候共、年数けつりかいす事
- 一、弟子取後日ニ外へ師を極メ候者之事、先約束ト相済シ志願を以、時の宜敷に随テもらいうけへき事、尤も其誦ハ一人をすて誤得共、賀茂大明神之神誓可有之事
- 一、約束之弟子を連れ、三年已上世渡仕候、先やくそくに徳ケ年ニ付金巻歩ツム取出貰受可申事
- 一、嵯峨天皇、警女能の三字を改、警女かせく事御定也

一、ひま取の年貢、月敷を以て武百文、五派之年貢勅定を以て御定致置事  
 一、師匠終り年輕き者へ、緋ニ而拾年同宿をもとめ、年つもり候ハム右之師匠のあとを継べし、又者他派之弟了たり共、其継の遠方或は慈悲を以、これを取立へく候  
 一、在々所々庄屋名主一宿并かせき之事、極実憐愍之余り、これをうくへき事、拙之事ニあらず、忝も嗟嘆天皇之勅院ニ而是を極る事  
 右之条々相守り、朝夕信心致へき者也

(略)  
 武州忍領与河越攝摩派立伝之者也

嘉永四年辛亥  
 十二月

越後国頸城郡  
 下七坂村  
 松重所持

### Ⅲ 糸魚川瞽女

#### 1. 概 観

越後から越中へ国境を越える上で重要な拠点であり、大町へ通ずる信州路の起点ともなっている西頸城郡の中心の町糸魚川に、瞽女の家が2軒存在していた。江戸時代から明治時代にかけて、ともに浜町に居を構えていたが、度重なる大火に遭い、難を避けて明治の末に郊外の大堂と上刈に移転した。そして、昭和時代までながく稼業活動を行っていたのである。

瞽女の家はともに日黒姓を名乗っていた。師匠が弟子をもらい請け、瞽女に養成し、家督を相続させる形式をとるものであった。そして、現在確認しうる範囲では、瞽女の出身地は糸魚川の町ではなく、在方の根知や西海・中谷内・青海などの農山漁村であった。いわば、西頸城郡内で高田より近い生活圏内にある地域では、瞽女を志す者はこの糸魚川浜町の日黒家に弟子入りするのが一般であったと言えよう。

このように、瞽女の家が糸魚川の町中にあるについては、稼業をなす上で都合がよいからという理由もあるが、糸魚川は江戸時代に1万石の親藩が置かれ、その陣屋町として栄え、殊に享保2(1717)年から松平家が領主となっており、盲人の救済策として藩の保護があったとみてよいであろう。浜町は今の町名では新屋であるが、一にこれを瞽女町と俗称してきたのは、この2軒の日黒家があったためである。

ところで、西頸城は比較的狭小な地域であるから、そうした関係もあって、瞽女になった人はそれほど多くないようである。江戸末から近代にかけて、この2軒の日黒家に入った瞽女の数は、確認されるものわずか7人である。しかも、現在にいたっては生存者が一人もいない。したがって、糸魚川瞽女の組織の仕組みや修業階梯、稼業活動の実態をは握することはなかなか困難となっているが、これまでの調査で知り得たことを中心に紹介することとしたい。

便宜上、浜町から上刈へ移った日黒家をA家、浜町から大堂へ移った日黒家をB家とし、それぞれの師弟系譜による歴史をたどることとする。

## 2. 師弟系譜と事歴

### (1) 目黒A家

この家は、旧藩時代から明治時代にかけて、現在の糸魚川市新屋24番地の猪又米穀商店の北隣、同23番地にあった。当時は、この町を浜町と称していた。しかし糸魚川は大火の多い町であって、目黒家は、明治10年の火災に類焼、同24年に正覚寺の土蔵が出火した際も衣類・道具等を焼却、また同37年8月の火災にも類焼、そして更に同44年4月の大火にも類焼した。よって、度重なる災難に遭遇し、盲目の身では危険であるからと、郊外の上刈区北端206番地へ移転したのである。旧松木街道（現市道糸魚川大野線）に面した西側で、今の大字上刈230の笹原一造氏（建設業合名会社等原組社長）家（もとはかじ屋）の敷地を借りて家を建てたという。

この目黒家の家督相続者として、また瞽女の師匠として、現在確認される最も古い人は、根知村（現糸魚川市大字上野）梨ノ木部落の船木伊兵衛から出た目黒ヨトという人である。このことは、新屋の米穀店猪又家に所蔵される『家の歴史』（同家2代猪又勝次郎筆）に明記されている。後に本文を紹介するが、同記によると、ヨトは享和元（1801）年4月4日に生まれ、明治9（1876）年2月4日に病死し、法名を照巻大師と号した。享年は数え年76才である。ヨトは、芸をもって生計とした盲人で、実子がなく、早川谷根から養子もらったが、離縁し、一人でいたが、明治4年、71才のとき、もと南西海村（現糸魚川市）大字粟倉出身の当時36才の盲人猪又キンを養女にもらったという。ヨトの若い時代のことは一切伝わっていない。

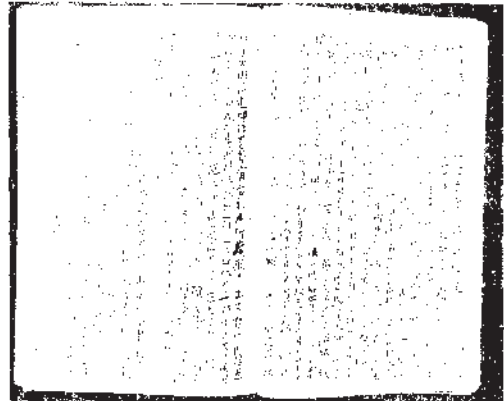
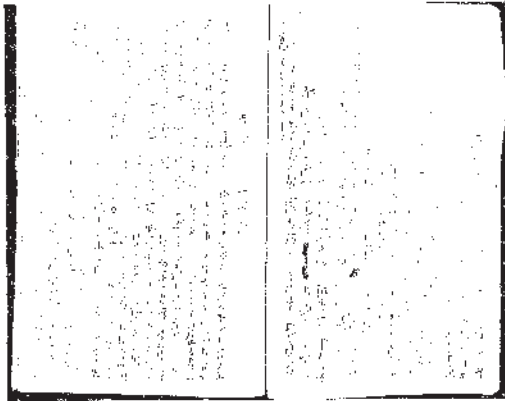
梨ノ木の「伊右エ門」家は、当主が6代日船木清繁氏である。その母ヤイさん（明治38年生まれ）は18才にして船木家に嫁いだのだが、船木家の先祖に瞽女さんが出たこと、その人が糸魚川から実家に来るたびに米1升ずつ持たせてやったということを知り伝えているが、その人の名も分からない。ただ、そのために、しゅうとばあさんから瞽女たちが来たときは大切にもてなしてなしてやってくれとよく言われていたから、浜町のヨトの家の跡を継いだ瞽女たちが巡業に来たときは、その都度泊めてやったという。

伊右エ門の4代目勇次郎の娘で、糸魚川市大字米海沢に嫁いだ小竹シエさん（明治23年生まれ）も、実家の瞽女の名は知らないが、糸魚川に大火事がある度に、瞽女として町へ行ったことを親が心配していたというし、また、浜町で何か振る舞いをしたとき、実家の人が呼ばれて行ったが、お茶を入れて出してくれたらしい、というような話を伝えている。

梨ノ木の「伊右エ門」家は、初代伊右エ門の俗名を甚十郎といい、根知の別所から来た人であるが、文政12（1829）年4月、行年62才で没した。明和5（1768）年の生まれである。現在の船木家の家屋は、この初代伊右エ門が梨ノ木に移ったときに建てたものというから、180年はたっている



目黒ヨトの生家：糸魚川市大字上野梨ノ木の船木家（撮影/48.5.12）



『家の歴史』所載「長女キシー代記」（猪又勝次郎筆）

糸魚川市新屋 猪又家蔵

古い家である。2代目の伊右エ門は、その死亡時の香典見舞帳によれば、俗名伊右エ門、明治7年5月、76才で没しているから、寛政11（1799）年生まれである。このようなことから、ヨトは初代伊右エ門の娘で2代目伊右エ門の妹ということが分かる。

ヨトは、兄が明治7年5月に没したとき香典を包んでおり、その香典帳に「錢九百六拾文 浜町 替せ」と記載されている。しかしその2年後、兄と同等で享年で浜町に病死したのであった。さらに、その後間もなく、明治12年8月、2代目伊右エ門の妻シゲが77才で死去したが、そのときの香典見舞帳に「金拾銭・五文日帳式丁 浜町 時清」とある。時清はトキセと読み、キンの誓女名であったが、浜町の目黒家では、ヨト亡きあと、跡を継いだキンがお参りに来たことを物語っている。

かくして、江戸末期に誓女として活躍した目黒ヨトの出自と生没年については、一応理解されたが、その師匠が誰であるのか、どのような芸歴をたどり、稼業活動をしたのかは一切不問である。浜町は昔から料理屋町であるから、町のお座敷に呼ばれて唄を売り、また在方回りに門付け・宿願の興行をしていたことは想像できるものである。

ヨトの晩年に、養女に入ったキンは、倉粟の猪又「八右衛門」家の出身で、茂右エ門の長女であった。この人については、新屋の猪又米穀店の2代目勝次郎が記した『家の歴史』に詳しい。猪又米穀店は粟倉の「八右衛門」の分家である。分家の初代は、茂右エ門の二男八蔵という人で、嘉永6年に生まれ、大正2年61才で没した。しかし、八蔵には実子なく、兄茂吉の子勝次郎を養子に迎えたのである。勝次郎が18才、明治32年のときであった。この『家の歴史』は、勝次郎が生家粟倉の猪又八右衛門家の因縁等につき、実父茂吉、伯父八蔵、叔母キンの3名より、古くからの伝言を聞いて、これを後代者の参考にと沿革史をつづったのである。その中に「長女キシー代記」の一項がある。叔母キン本人から直接聞いた事が主体となっているから、その一代記は詳細を極めている。誓女の家、目黒家の歴史を知る上で誠に貴重な資料であるから、全文を紹介することにしたい。

### 長 女 キ シ ー 代 記 猪 又 勝 次 郎

同女キシー、亡茂右エ門ノ遺子ニシテ、母ノ体内中父死亡ス、天保七年四月九日出生、而シテ四歳ノ時、<sup>(眼)</sup>眼病ニ罹リ、盲トナル、七一歳迄ハ生家ニテ、子守飯焚キ他家事ヲ手伝フ、同女ハ符来芸ヲ以テ身ヲ立ツル方心止マス、<sup>(経)</sup>全年旧曆五月出家シ、高山ニ至リ師ヲ求ム、日浅キ内ニ実母迎イニ行、遂目的ヲ達セス、帰家ノ止ムナキニ至ル、然レ共初志ヲ思ヒ留ムルコトヲ得ス、明年六月、殊ニ多忙ノ養蚕時ヲ見計リ、追手ヲ遣クルメメ出家、一端同村清左エ門方ニ身ヲ留ムルコト二日間、其時実母ハ全家ヘ行、又逃亡セント話サルヲ聞キ居、而シテ夜中戸谷越ヘヲナン、高谷根ヲ経テ梶尾敷ニ出デ、此処ニテ送リノ人夫ヲ雇ヒ、日指ス信州大町

へト歩ヲ進ム、其当時ノ順路ハ今日ノ路程ト全々異ナリ居リ、糸魚川原山大野中山ヲ経テ、仁王臺ニ出テ、根小畷小滝山<sup>(山)</sup>之防ト曰ヲ取テ、千回ニ迄到着シ、此処迄ノ送り賃銭貳百匁ト定メシモ、少々安キ故ヲ以テ五十匁ヲ増シ、貳百五十匁ヲ与ヘ（今日ノ貳銭五厘）、雇夫ヲ戻シ、単身大町ニ着キ、高田出身ニシテ一時糸魚川ニ在住、後大町へ移住セシ常盤津ノ師匠<sup>(匠)</sup>（おきゆ）ノ元ニ行、教ヲ求メシモ、親ノ承諾無故教ヘス、致シ方無ク四ヶ月程食客トナリ居、十一月帰郷シ、改メテ、明年二十三才ノ時、前記師匠ノ元ヘ父ト同行シ、弟子入レナシ、茲ニテ学ブオートケ年、其レヨリ松本ニ出テ、当時來松シ居リシ江戸ノ人ニテ、名高キモクラ太夫ト云師匠<sup>(匠)</sup>ノ元ニ行キ、入門シ、二ケ年学ヒ、奥義ヲ極メシ、許可ヲ得テ松本池田ノ兩処ノ嗜好者ニ教フルコト八箇年、而シテ参十四歳ノ時、糸魚川ヘ戻リ、麻及養蚕ノ仲買商人タル横町ノ印ト云方ヘ全宿借家シ、常盤津ノ師ヲナス、<sup>(匠)</sup>當時糸魚川四郎八方ヘ清元ノ師匠要滝ナルモノ、及ヒ余田町出羽ト云家ヘ正滝ト云ル師匠米リ米、依而兩師匠ニ付キ清元ノ修業ヲナン、各宴会等ニ御座敷ヘ呼客ニ応シ居リシ処、当町新屋町二十三番ニ、根知村梨子ノ木村船木伊兵ヱノ生テテ、享和元年四月四日生日黒ヨト（明治九年二月四日病死、法名照啓大姉）ト云ふ、矢張芸ヲ以テ生計セル盲人、実子無ク、一度早川谷根ヨリ養子セルモ離縁シ孤獨人アリ、其所望ニテ、卅六歳ノ時養女トナル時ハ明治四年タリ、而シテ四十三歳ノ時、青海村（今日ハ町）宇寺地小野永右エ門二女、安政元年六月九日生キセト云フ者ヲ養女トシ（宇地家号ふろや）、爾來青年男女ニ教ヘ、尚ホ在方廻リヲナシ、相当有福ニ家計ヲ送ル、尚ホ一生ノ遺囑トシテ大ナルハ、明治十年横町ノ出火城ノ川迄、明治卅七年八月三日新屋町広瀬ヨリ出火横町西端迄、明治四十四年新屋町東浦神社（諏訪）附近市村伍兵ヱ納屋出火寺町東端迄ノ大焼火災ニ、類焼ノ厄ニ罹リ、尚ホ明治廿四年正覺寺出火ノ時、全寺ノ土蔵ニ入レ置キシ衣類道具焼却セラレ、四回ニ亘ル火難ニ逢ヒ、而シテ明治四十四年四月廿日類焼後上刈区北端二〇六番地ヘ転住建築、在住中、大正八年五月廿九日、享年八十三才デ没ス、本名日黒キセ、法名感啓知照妙通大姉、手次寺ハ善導寺ナリ

右叔母死亡ノ時ハ、自分儀北小谷村大字大綱共有林下山ノ木小屋敷ニ於テ、参十余名ノ人夫ヲ入、製炭不在中、知ラセトシテ浜町北村金右エ門氏來ル時、恰度大綱村横川善太郎方ニ宿泊在宅中、直チニ帰家シ会葬、日下ノ家計豊タカナラシ故（現ノ主キセ七十七歳）、昭和六年四月廿九日揚読経ヲ営ム、小生布施中金四円ヲ手伝ふ、小生口露戦争負傷セシ時、盲人ノ身年氏神ヘ禱願ヲ掛ケ、叔母ノ恩忘ルベカラサル次第、報恩ノ為め卅三回忌迄ハ法要務メサセ度次第 以上

日黒ヨトの養女に入った猪又キンの経歴については、以上の記載に詳しいから、これを再びは述べない。ただ、キンがヨトの養子となったのは明治4年、36才のとき（ヨトは71才）であったが、それ以前の若い時代に、信州大町や松本に行き、常盤津の師匠についてその芸を習い、自らも師匠の看板を下げたし、明治2年、34才で糸魚川にもどってきて、今度は清元の師匠に師事した。キンの諸芸に対する熱情が深く、芸域の広いことを物語っている。一般に、警女の行方明芸は、長唄・端唄・常盤津・清元・新内・義太夫のサワリなども含む多彩な歌曲内容となっているが、キンの芸歴にはそうした諸芸の警女への移入、包摂の事情が知られて興味深いものがある。しかし、キンと養母ヨトの付き合いはわずか4年余である。しかもそれは、ヨトが70才を過ぎた晩年であるから、ヨトの修得した警女芸がどれほどキンに伝えられたかは疑問である。

ヨトは明治9年2月、76才で病没し、日黒家の跡を継いだキンは、明治11年、43才のとき、青海村（現在青海町）宇寺地小野永右エ門の二女キセを養女に迎えた。キセは安政元（1854）年6月の生まれで、日黒家に養女に入ったときは25才であった。それ以来、青年男女に芸を教え、また二人で在方回りの稼業を続けたらしい。

ここで、浜町の日黒家と猪又米穀店の関係を述べておかなければならない。猪又家の初代は、先にも述べたように粟倉の八右エ門家茂右エ門の二男八歳である。キンが長女で、明治4年浜町日黒家の養女となり、長男が茂吉で八右エ門の跡を継いだ。八歳は嘉永6（1853）年に生まれているから、姉キンより17才年下であった。猪又



米穀店当主4代目啓次氏の妻ウメさん（やはり粟倉八右エ門の出身で、茂吉の長男重吉の長女）の話によると、八蔵は粟倉の九右エ門に婿入りしたことあり、子供をもうけたが病氣になって実家に帰った。しかし、実家の嫁との折り合いが悪く、浜町の姉キンが世話して同家の隣に家を建て、田町から妻をもらい、米屋を開店したのであるという。

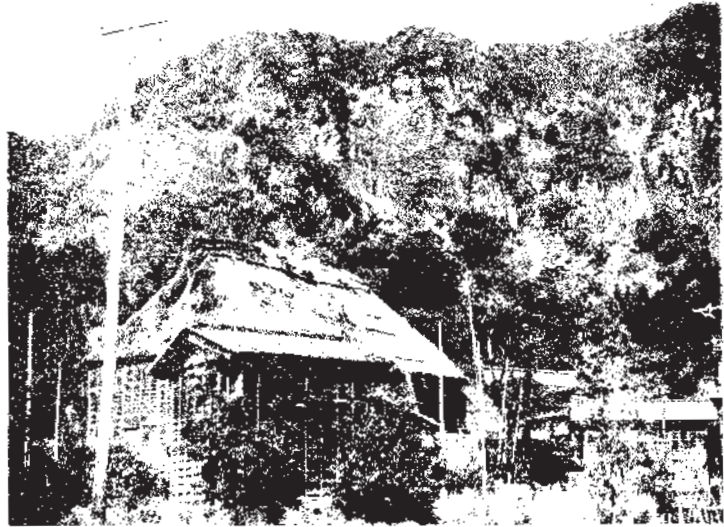
浜町に家庭を持った八蔵には、不幸にして子供ができなかった。それで跡継ぎに両姪子をもらったが、その男姪子は兄茂吉の三男勝次郎であった。明治32年の春、勝次郎18才のときであった。

浜町の目黒家、猪又家は、ともに明治37年、44年の大火に類焼したが、44年の災難を契機に、勝次郎は目黒家を上州に移してやった。筈原かじ屋に敷地を借り、新しい家を建て、その棟梁を笠原家に依頼したのである。ときに、警女キン（芸名トキセ）は76才、猪又八蔵は59才、勝次郎は30才であった。猪又家は浜町の従来地にとどまったが、家の構えを土蔵造りとして万全を期した。そのお陰で、昭和7年12月21日の大火の際猪又家は焼失しなかったのである。

目黒キンの素拙については、なお米海沢の小竹シエさんがある程度記憶している。同女が娘盛りのころというから明治末期であろうが、そのころは糸魚川に劇場が出来たばかりで、粟倉出身の警女など2・3人の警女さんがそこで興行していた。高い舞台に上がって、浄瑠璃・義太夫を語っていたが、粟倉の人は声がよい人であった。他の警女は粟倉の人の弟子ではなく、どこの人が分からないという。



糸魚川市新築の猪又米店 右隣に目黒家があった (撮影/48.5.12)



目黒キンの生家：糸魚川市大字粟倉の猪又家 (撮影/48.5.12)

また、猪又ウメさんによると、同女がまだ子供で実家における時代のことであるが、姪女を迎えたキセともう一人の警女が信州路へ旅稼ぎに行くとき、キンが一緒についてきて八右エ門に泊まることしばしばあった。キンはもう老齢で商売に出歩かず、粟倉の実家に迎えてきてもらっていたわけであるが、二人の警女が旅に出たあと、キンが浜町に帰るときは、ウメさんの父重吉がよく馬に乗せて送り届けていたという。

キンは、大正8年5月29日、83才の生涯を閉じた。

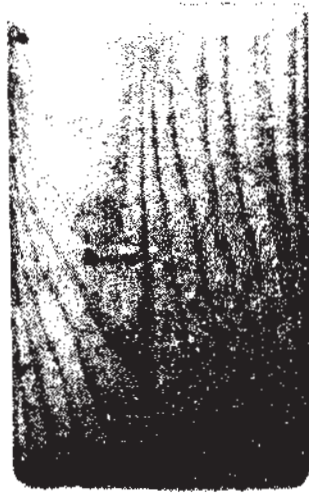
キンの養女となった寺地のは小野

キセ（芸名イト）は、キン一代記にあるように、安政元（1854）年6月9日に生まれたが、17・8才ころ目が悪くなっただけ。そして明治11年に、25才のとき日黒家の養女に入ったのである。しかし、キンの養女となったことが、このとき初めて弟子入りしたことを示すものかどうかは分からない。目を患って間もなく弟子入りしたのかも知れぬ。ともかく、親子の縁を結んだキンとキセは、二人で警女商売を続け、明好きの男女に芸を教えたり、また巡業の旅に出かけていたが、明治の後期と思われるころ、キセには二人の弟子が入門した。といっても、一人は手引きである。警女は青海町須沢の「松沢伝四郎」家から出たキン（明治18年生まれ）で、手引きは同山海の「上谷太郎兵衛」から出たタキ（明治24年生まれ）である。

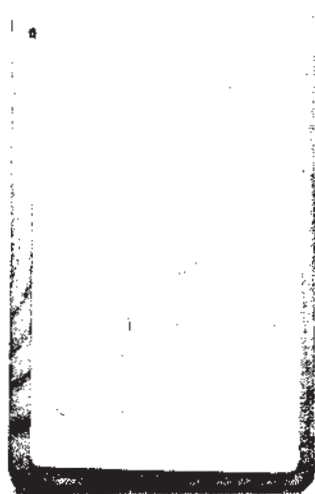
須沢の松沢家は、今は新潟市に移転してしまったから、キンの若いころのことは知り得ない。タキについては、田海上谷家の女主人モミさんによれば、タキは小さいとき目が悪くなかったが、子供のうちに須沢のおキンの家にもたれ、キンに手引きとして使われていた。キンとタキが日黒家に入ったのは、かなりの年になってからであるという。タキが日黒家に入っても、晩年まで松沢姓を名乗っていたのはそのためである。そのようなことを考えると、おキンが日黒家に入って、キセの弟子となる以前に、ほかに師匠があったかも知れぬ。なお、その辺の事情は明確でない。いずれにしても、明治の末期には、浜町の日黒家はキン・キセ・キンの3代の警女、および手引きのタキの計4人家族であったと思われる。

上列の日黒家最後の人・タキの晩年の面倒をみた山崎権平氏の家に、トキセ・キセ・キン・タキ4人の位牌と香典帳が残っている。大正8年5月29日、トキセが死亡した際の香典帳には、日黒家菩提寺の清崎の善導寺に差し出した色代（この地方では、葬式に際して死者と血のつながる人や近しい親類縁者が黒装束の着物の襟に白布をつけて焼香したが、その焼香銭を色代と称し、寺に差し出した。）の記帳に、新屋町猪又勝次郎・粟倉猪又八右エ門・寺地小野七治郎・大堂の警女日黒ハツとともに、当の日黒家3人キセ・キン・タキの名が見える。

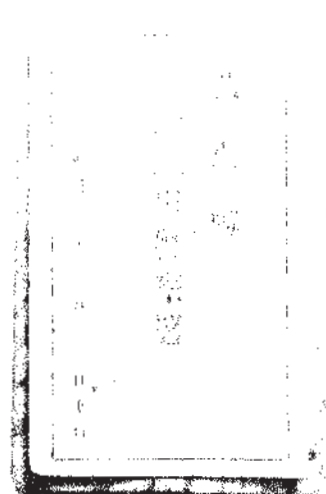
キセの生家、寺地の小野フサエさん（大正2年生まれ）によれば、キセは盲目であったがきれい好きの人であり、また裁縫なども自分で針のミズを通してやっていたという。しかし、芸は優れなかったらしい。米海沢の小竹シエさんによれば、同女がまだ嫁がずに実家の村にいた時代よくイト・キン・タキの3人が巡業に来たが、イトは目が立派なつづれようで器量は悪くはなかったが、声はものにならず、明はだめな人であったという。芸に対する熱心さもなく、弟子を持っていたが教える力もなかった。大親方のキンが常々、イトが弟子のキンに芸を



上谷タキの警女唄遊芸鑑札



糸魚川市上列 山崎家紙



同 裏

仕込むだけの力量がないことを嘆いていたというし、それで年老いたキンがキンに稽古をつけることがよくあったという。キセに芸の才能がないということは、おそらくキセが年ごろになって失明し、かなりおそくなってからこの社会に足を入れたことと関係があるであろう。それに対して、弟子のキンは親師匠より数段芸がうまかったらしい。シメさんによれば、目は生まれつき両目で、見られないような目であるから、陰で聞かなければいけない風さいであったが、唄は段物でも口説でも浄瑠璃でも上手で、声のよい人であったという。

そのおキンが昭和4年11月6日、45才で亡くなった。キンの親師匠は76才の高齢であったがまだ健在であった。あとに残されたタキは、そのとき39才、二人の生計を立てねばならず、遊芸の鑑札を受けることにした。タキは、若いとき目が少し悪くらいでキセ・キンの手引きをしてきたわけであるが、25・6才ごろから次第に悪化してきたという。二人の手を引いているうちに、ある程度の芸を覚えるようになっていたし、家におるときに幾分稽古をつけてもらっていたようである。糸魚川警察署から唄の遊芸鑑札を受けたのは、キンの没後わずか40日後の12月17日であり、その鑑札が今も山崎家に遺品として保存されている。鑑札は巡業商売に常時携帯するものであるから、2枚の合わせ版にはさみ、擦り切れないよう配慮がしてあり、これを小袋に入れてある。幸い、タキはまだ目が幾分見えたから、このとき以来一人旅の稼業が始まるのである。

昭和6年4月29日、目黒家の戸主であったキセは、78才で、師匠キンの十三回忌の湯洗経を営んだ。タキは41才であった。このときの法事に、猪又勝次郎が寺への布施のうち金4円を助成したことは「長女キン一代記」に述べてある。稼ぎ手がタキ一人となつては、実際に目黒家の家計はもう余裕がなかったのである。そして、昭和10年11月4日に、キセが82才で没した。タキ45才であった。タキの戸籍は上谷姓であったが、若いときにキンにもらわれたので、これまで松沢姓を名乗ってきたが、ここにいたって初めて目黒家を継いだ。その後、昭和16年5月にキセの二十三回忌、キセの七回忌法要をつとめている。

笠原一造氏によれば、タキは一人になつても、亡くなる4・5年前の昭和33・4年まで贅女商売に出歩いていたという。春・秋の2回出かけたが、それほど遠くの旅はできなかった。次第に視力が弱り、明かりぐらい見えたものが、晩年には全然見えなくなり、商売にも出られなくなった。最後は市の扶助を受けていたが、笠原家では、家で仕事をしている山崎権平夫婦を目黒家に住ませ、世話をしてもらうこととした。タキは山崎夫婦の子供のお守りぐらいはしていたという。そして昭和38年3月29日、タキは73才で亡くなった。

これで、幕末から近代にかけて続いた糸魚川の贅女の家の1軒、目黒A家の家督相続が中絶したのである。上刈の家は板葺平屋の小さなものであったが、タキ亡きあと潤もなく取り壊され、今は跡形もない。

この目黒家の跡を継いだ者は、ヨト・キン・キセ・キン・タキの5人が確認されたが、稼業の上で最も充実したのは、キンとタキが入家し、目黒家が4人となっていた明治時代後期から、キンが亡くなる大正中ごろまでであったと思われる。この時代には、師匠キセ・弟子キン・手引きタキの3人組の巡業グループが成立し、西頸城の農山村から遠くは信州路を大町方面まで、旅を続けていたといわれている。

### 糸魚川贅女目黒A家系譜

辰野須ノ木 旧姓鶴木	西海業金 旧姓猪又	当地 旧姓小野	須賀 旧姓松原	旧姓 旧姓上谷
ヨト	——キン(芸名トキセ)——	キセ(芸名イト)	——キ	——タ
享和元~明治9.7才	天保7~大正9.83才	安政元~明治10.82才	明治18~昭和4.45才	明治24~昭和8.73才

### (2) 目黒B家

目黒A家が浜町にあった時代、その隣にもう1軒の目黒姓を名乗る贅女の家があった。ここは、戸主として今井村(現在糸魚川市)中谷内から出たトメと、明治の中ごろに養子縁組して入家した根知村(現在糸魚川市)井口生まれのハツという二人の贅女が住んでいた。そして、先の目黒家と同様、糸魚川町の度々の大火に焼失し

町の郊外大堂に移ったが、移転はこちらの方が早く、明治37年8月の焼失を契機とするらしい。大堂の日黒家と上刈の日黒家はほんの数米しか離れていない近いところにある。浜町時代の縁故から、日黒A家がB家の近接した土地を借りて家を建てたらしい。

トメの生家は、中谷内の松田家で、屋号を「新兵衛新屋」と称した。同村松田勇家の分家である。初代新兵衛、2代金之丞、3代新兵衛（婿養子）、4代仁太郎、5代政治（婿養子）、6代当主淳と家系が続いている。政治氏（明治24年生まれ）とその妻モトさん（明治26年生まれ）によれば、トメは2代金之丞の娘で、3代目新兵衛の妻の妹であったという。政治氏は、大正3年、24才で今井村日本から婿入りしたもので、モトさんが4代仁太郎の娘で、家の跡を継いだのである。

この日黒家の旦那寺清時の善導寺の過去帳によると、トメは昭和13年1月7日、79才で没している。萬延元（1860）年の生まれであった。政治・モトさんによると、トメは全盲の人であった。小さい子供のころに目をつぶし、養女に進んだらしいが、師匠が誰であったかは分からない。浜町の家に師匠がいて、弟子入りしたのかも知れないという。ともかく、トメの若いころのことは伝わっていない。

モトさんは、幼いころ、孫じいさんの3代新兵衛の背中におんぶされて、何度か浜町の日黒家に連れていってもらった記憶がある。明治30年前のことであろう。自分の家から出たおトメさんと、根知の井口から来たハツさんの二人がいたという。浜町におる時代、この日黒家は通称「隣り管女さ」で通っていたという。先に述べた日黒家の隣りの管女という意味であろう。モトさんが行った時代、浜町にはこの隣り合った2軒以外に管女の家はなかったという。

ハツは、根知村井口の安田家の出身である。しかし、安田家は今は死に絶えて跡形もない。後年日黒家に養子として入家した日黒作治郎氏によれば、ハツは明治14年に生まれ、名をトメと称したが、日は生まれたときから盲目であったという。いつ師匠の弟子となったか分からない。幼いころであろう。入門したとき、親師匠と同じ名だったから、師匠はトメにハツという名をつけてくれた。すなわち、ハツが管女名であった。師弟関係からさらに戸籍上の親子関係に発展し、ハツが跡を取るようになったものであろう。

トメの唄は芸者もかなわぬほど上手で、三味の腕もよかったといわれるが、そのトメがハツに芸を仕込み、やがては二人で商売に出歩くようになった。しかし、二人とも全盲であったから、だれか手引きを使ったに違いない。

松山モトさん、政治氏によれば、明治44年の糸魚川の大火のときには、すでに大堂に移っていて、この火災に難を免れたのであるという。したがって、37年8月の焼失により、その直後大堂に移ったものであろう。大堂は、現在新山という町名となっており、通称新鉄区という。鉄砲町ともいった。板葺きの古い家を買って入ったという。

大堂に移った二人は、稼業を続けたが、手引きには近くの上刈の車大工「小島屋」の娘チヨを頼んだ。チヨは明治27年ごろ生まれ、日はそれほど悪くないが、頭が悪く、管女になれないで、手引きだけをしていたという（月岡ユノ女話）。

上刈の日黒家とは、依然として付き合いをしていたが、大正8年5月、トキセが没したとき、大堂の日黒家では日黒ハツの名で香典に色代を添えている。ハツは数え年39才、トメは60才であった。このころはもうハツが戸主となっていたであろうし、トメは商売に出歩かなくなっていたと思われる。トメが家で留守居し、ハツと手引きのチヨ二人だけで商売に出ている時代が何年かあったという。

大正の末年にいたり、ハツは管女稼業をやめて按摩になった。糸魚川寺町の按摩の親方のところへ習いに行ったという。その当時、もみ医はゴボウサといって、男の盲人が多く、女で按摩をするのは少なかった。ハツは、管女唄はもう世間で好まれないうして、これに見切りをつけて按摩の道に進んだのであった。昭和に入ると、手引きのチヨも日黒家を出て、按摩師に嫁いだ。

チヨが日黒家を離れるのはほぼ時を同じくして、昭和2年に、ハツは大野の親戚から作治郎氏を養子にもらった。作治郎24才、ハツ47才、トメ68才であった。作治郎氏は、その当時のハツについて、言でありながら、まだ私の妻がきていなかった日黒家で、御飯やお汁などを炊いてくれたし、勘のよい人で、糸魚川の町に一度手を引いて連れて行ってやると、その後は自分一人で行くほどであった、と言っている。

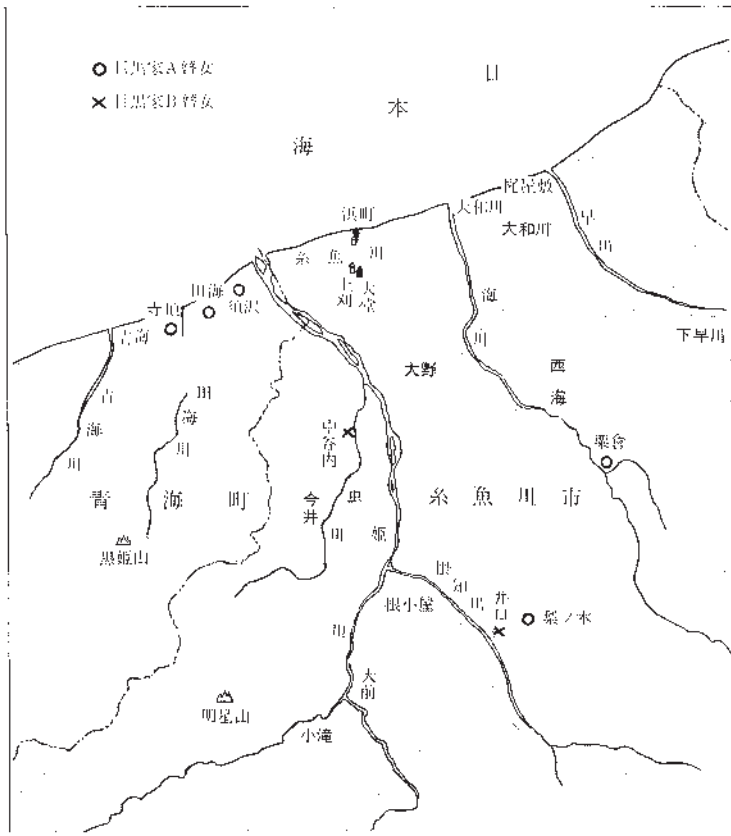
その後間もなく、作治郎氏はいとこの妻をめとり、ブリキ屋を開いた。が、依然としてハツは按摩をやっていた。そして、昭和10年11月23日、ハツは親師匠より早く、数え55才で没し、親師匠もまたその2年ばかり後、昭和13年1月7日、79才の生涯を閉じたのである（善導寺過去帳）。

このように、日黒B家は、明治から大正にかけて活動した替女がわずか2世代二人しか確認されない。日黒A家よりもさらに小規模の人数で、最少限のグループ巡業であったと言える。A家が昭和に入っても、タキ女が30年代まで稼業を続けたに対し、B家は、大正末をもって替女を廃業したのである。しかし、A家と違って、B家は、ハツが婿養子を入れる配慮をしたから、今日も日黒家として立派に存続している。

糸魚川替女日黒B家系譜

今井中谷内 旧姓松田  
トメ  
高延元～昭和13.79才

根知井口 旧姓安田  
トメ（芸名ハツ）  
明治14～昭和10.55才



糸魚川替女出身地図



### 3. 集団の特性と巡業地

このように、糸魚川の町に目黒を名乗る瞽女の家が2軒あって、糸魚川と生活の上で密接に結びつく近在の農山漁村から、瞽女を志す盲女が入家し、家督を相続し、稼業のグループを形成していた。いずれも、糸魚川の町内に戸主としての親方が家を構え、弟子をわが子として養成してきた点は、同じ上越地区の高田瞽女と共通した面を持っていると言えよう。ただ、高田瞽女仲間においては、家数も人数も多く、何軒か寄って組を作り、その組がいくつか集まって座を構成し、親方のうちの長老が座元となって一派を取り仕切ったのであるが、糸魚川瞽女にはそうした強固な自治組織としての座の制度はなく、単一的で基礎は弱かった。

瞽女の家で確認されたのはわずか2軒であり、しかもこれが皆どのような関係にあったか、ということ是不分である。両家が浜町に隣り合って存在し、しかも同姓の目黒姓であるから、本家・分家の間柄にあったかも知れぬが、明言できない。近代の歴史からみると、盲人同士で同じ稼業に携わる身として、互いに助け合い合っていたらしいが、弟子の交換・交流をしたわけでもなく、両家が一緒のグループになって巡業したという話も聞かない。別の系譜に属する家のようにも見えるのである。ちなみに言うなら、目黒という姓は、目の玉が黒くなる、すなわち晴浪になりたいという願望のもとにつけられた呼称のように思う。

糸魚川瞽女には生存者がおらないから、弟子入り修業の災態や年あきぶるまい、妙音講などがどのように行なわれていたか、その事情をつかむことができない。実見した人も、伝聞している人もいないようである。しかし、いずれにしても、両家ともに弟子は多くないし、他にはばかる仲間がいたわけでないから、稽古ごとは別として、旋はそれほど厳しくなかったと思われる。むしろ、弟子に逃げられては困るような状態であった。なぜなら、稼業ができなくなるし、跡目相続も危ういからである。

人数が少なくても、瞽女の守り本尊妙音菩薩だけは祭っていたと推測される。大堂の目黒家は今は家を新築したが、なお床の間に木版刷りの奥州金華山弁天曼荼羅(縦94.5cm、横37.2cm)・西国三十三観音図(縦39.4cm、横20.5cm)・呉道了図の3幅の絵図が掛けてある。弁天や観音が瞽女の崇拝・信仰の対象であったことは、瞽女の縁起譚にもうかがわれ、妙音講の本尊になっていることは周知のところである。作治郎氏が目黒家に入家した当初よりこのように飾ってあり、トメ・ハツの二人は毎晩お水や御飯をあげて参拝していたという。二人で瞽女の商売をしていた時代、それでも定まった日を決めて、簡単なお祭りをしていただのではないと思われる。その人数からして、お講といわれるほどおおげさのものではなかったであろう。したがって、どこの瞽女仲間にも伝えられている式目なども、保存されていたには違いなからうが、これが妙音菩薩の祭りに朗読するというようなことはなされていなかったものと思われる。

上列の目黒家の妙音講については、その存否が分からない。笠原一造氏は、妙音様の祭りに会ったこともないし、タキが死んだとき、掛け軸や書き物などはなかったという。

それでは、糸魚川瞽女の稼業はどのように行われていたか、その災態はなかなか把握できないが、巡業地やその時期を中心に述べてみたい。

この2軒の瞽女たちは、浜町が料理屋街であったから、その辺を主体とする町うちの宴会に呼ばれ、お座敷の余興に唄・三味線を盛んに披露したらしいが、キシ女のように、明治時代、劇場に出演して美声を張り上げる瞽女もいたわけである。しかし、大方は、春から秋にかけ、地方巡業の旅に出たのであった。その巡業地は、糸魚川近在から海岸に沿う青海・梶屋敷方面、内陸部に入って西海・早川谷の村々、姫川沿いの大野・今井・根知谷・小滝から、さらに松本街道をさかのぼって信州大町・松本方面を訪れたらしい。

目黒A家の巡業については、明治時代末期のこととして、小竹シエさんの記憶に残っている。同女がまだ嫁に行かず、梨ノ木の生家における時代、タキがキセ・キンの手を引いてよく巡回してきた。目黒家の先祖師匠ヨトの出た家であるから、ヨト亡きあともその因縁で旅宿を依頼していたのであった。また、同家のヤエさんは大正11

年に船木家に嫁入りしたが、それからしばらくの間はキンとタキの二人が来て泊まっていったけれども、その後はタキ一人となったという。梨ノ木には、春の田植ころと、秋で柿の実が盛りのころの2回やってきたという。

上刈の笠原一造氏（明治44年生まれ）によると、氏の子供のころ、隣りの日黒家の贅女は冬うちは家にいたが、春になるとキセ・キン・タキの3人で門付けに出かけ、お盆の前に帰り、しばらく休んで盆後にまた出かけ、雪の降る前には家にもどっていた。お盆に帰らないときは、信州大町方面へ行ったが、松本まで南下したかどうかははっきり聞いていないという。しかし、寺地の小野フサエさんによれば、キセは松本まで行ったもので、その道すがら泊まる宿が決まっていたという。

おタキ一人になってからは、次第に目がかすんできて遠くへは行けず、根知を回り、小滝に行く程度で、巡業の範囲は狭く、お盆に帰ったが、秋にはまた同じところを回っていたという。それでも、田舎での唄に対する報酬はお米が多いようで、1回の旅稼業で米が1俵くらい上がったらしく、2斗ぐらいままとると、タキはこれを袋に入れて家に送りつけてきた。といっても、家にはだれもないから、送り先は笠原氏あてであった。初めは馬車で、後には自動車便で届けたという。小豆を若干送ってきたこともあった。一旅で1升や2升くらいはままとったらしい。

宿をとって田舎を門付けして歩いたのは、春・秋2回であったが、そのほかに正月は家から出かけて上刈近在を商売に出かけた。これを「春語り」と呼んでいたかどうかは分からないが、その形態の稼業であろう。

大堂の日黒家も、明治時代のことは分からないが、大正時代には信州路に足を入れていた。作治郎氏の聞き伝えでは、中土までは確実に行っていたが、その先のことは分からないという。県内は、上刈の日黒家の贅女とはほぼ同じ地方を巡っていたらしい。春・秋2回巡業に出たことも同じい。

中谷内の松田政治さんは、大正3年松田家に嫁入りし、それ以来トメ贅女と付き合いようになった。トメ・ハンの師弟が、いつも中谷内部落の祭り時期にやってきて、昼は村中の家々を門付けし、夜は松田家を宿として唄の興行をした。端唄・長唄・段物・口説・常磐津・清元・新内、ドドイツ・沓分・広大寺のようなはやり唄でもなんでも唄っていたという。当時はほかに楽しみがなく、大勢が集まって聞いたという。しかし、明治末からこの地方にも、大きなラッパのついた蓄音機がはやってきたので、次第に贅女の唄を聞くものが少なくなり、贅女を重宝にしなくなってきていた。それで、おトメは蓄音機が大きらいであったという。

糸魚川贅女の巡業圏は決して広い地域だとはいえない。糸魚川からわずかばかりの距離にある海岸漁村、姫川や海川・早川流域の農山村がその稼ぎ場である。頸城平野の直江津・高田方面に足を伸ばした形跡は今のところつかめていない。高田贅女の縄張り区域を、あえて侵すようなことをしなかったのかも知れぬ。しかし、高田贅女はこの糸魚川地方にもよく訪れていた。大体において、糸魚川の贅女は人数も少なく、小集団であり、糸魚川近在を巡ることでこと足りたのであろう。それはまた、この地域が、贅女稼業に適した、贅女を迎え入れる温床の地であったことを示すものであろう。

それにしても、糸魚川贅女は難路を越えて信州に入った。松本街道は、旧幕時代には越後から信州に塩や海産物を運び、信州からは農産物を運んできた重要な輸送路であった。塩の運搬具ボックスは有名である。糸魚川と信州大町・松本とは、いろいろな面で結びつきが深かった。両者の交流は激しく、贅女キセが若くして常磐津の彦学に大町・松本に出かけたことに、その片りんをうかがうこともできる。糸魚川贅女もまた、信州人の唄好き、盛んな養蚕業に支えられて、信州入りをしげくしたのである。



## 結 語

警女組織の沿革や機構、稼業の実態を明らかにすることは、現状ではきわめてむずかしい。組織が崩壊して久しいからだけではない。盲人であるから、伝承を後世に残す確率が低い。文字・記録にいたっては、紋切型の縁起・式月以外はほとんどなく、彼女らが直接手を染めることはない。しかるに、第三者では全くあいまの域を出ない。猪又勝次郎が書留めた「長女キン一代記」などは、全く異例に属するのである。警女が存命ならばある程度のことは聞けるが、すでにほとんど世を去ってしまった。たとえ警女の経験者がいたにせよ、彼女らは警女社会の衰退期に仲間入りしたものであるから、古い伝えを知らないか、あるいは忘失してしまったものが多い。

大きな組織ならば、まだしも調査は比較的容易に進む。しかし、小さい仲間となると判断・推考にいたるまでの適切な資料がなかなかつかめない。私が本稿で取りあげた中越地方の三条組、上越地方の上底組・西野島組・田麦組・糸魚川警女などはまさしくそれで、問題の解決を遺憾ながら今後を持ち越さねばならない。そうした制約はあるが、これまでの調査報告から、ある程度これらの警女組織の実態・特色ともいうべきものは捉えられたのではないかと思う。これを要約して結語としたい。

視点を明治以降に置いた場合、三条組はその擁した員数からいうと、県内では長岡組・高田組・刈羽組に次ぐ、ほぼ第4位、あるいは第5位に当たる集団であったと考えられるが、長岡警女のような特定の警女屋も警女頭もおらず、その組織構造は刈羽組のそれと類似性が濃厚である。出世する年あき警女の生家で、その警女の年あきぶるまいと併修して仲間全体にかかわる妙音講を聞く点は全く同じである。しかし、三条組の妙音講は、三条組以外の講員も含むお講組で維持・運営されてきた点、今後の研究は要するが、特殊性を持つ点であると言えそうである。総体的にみて、長岡警女のような大組ではなかったし、中心がなく基礎もしっかりしておらず、規律・懲罰も厳しくなく、儀礼的方面も形式化し、各師弟系譜の連係も弛緩を来し、組織が早く弱体化したようである。したがってその巡業圏域も、小集団であるから、県内・県外とも特定の小地域を占めるのみであった。

目を上越に移すと、西頸城・東頸城の浜警女・山警女も、これと対比すべき高田組は、高田の町に居を構え、座という強力な自治制度を保って結束してきたが、これらは員数も少なく、組織というにはあまりにも小さな師弟系譜集団で、山舎警女の域を出ない。中越の長岡組に対する下組警女のような、同じ立場にあったものと言える。しかし、それはそれなりに地域的な特色を有し、これらが高田町の郊外に宿をとり、巡業の拠点とするとともに、妙音講・名ぶるまいを行ってきたことは、高田警女を敬遠した意図があったかも知れぬが、別派としての独自性を物語るものであろう。その歴史は、三条組以上に知られなくなっているが、警女たちが自分の生家で家族の一員として生活し、弟子を養成したらしく思われるので、このあたりは高田警女と異なるようである。高山警女は、親方が必ず高田の町に自分の家を構え、そこで弟子を受け入れ、養育し、家督を相続させるのである。むしろその方式は、中越から下越にかけての警女組織との類似性が指摘できる。諸方に散在する警女組織の特色であろう。ただ、生存者からある程度のことが聞けた上底組について言えば、この組は、入門したとき親方から警女名をもらい、一人前の芸の修得ができた後、本格的な出世名をもらい、名ぶるまいの祝いをするが、これらは高山警女と共通したものである。これが高山組の影響か、模倣したものか、あるいはこの組独自に備わったものか、数ある警女集団の発生と展開の問題の一環として今後研究する必要がある。

糸魚川警女は、その出身地が農山村であるが、本拠を町に置いたと考えることができ、親方が家を構え、家督を弟子に相続させていた点は高山組と共通している。ただ、生存者が一人もなく、この組の修業年次や妙音講がどのようであったか知るつてがない。小人数ながら、その行動範囲は西頸城の農山村一帯に及び、なお松本街道を伝って昔から交通の盛んな長野県奥深く巡業の旅を続け、独自の活動を示している。

越後警女は、江戸時代に城下町、陣屋町として栄えたところに、自治組織のしっかりした集団があったように

思われる。藩主の保護がその背後にあったからであろう。幕藩時代の伝統が近代まで及んでいることを示すもので、長岡組・高田組・糸魚川警女などがその例である。一方、在方農山村部には、それに属しない警女集団が散在し、独自の組織を維持してきたが、人的にも組織的にもその中心となる核が不足し、散漫性を否定し得ないもので、仲間の掟も早くくずれてしまったようである。刈羽組・三条組・浜警女・山警女などがそれである。

下越地方には未調査の警女組織がまだいくつかあったことが確認されている。今後も追究し、少なくとも近代における越後警女の全貌とその特色を明らかにしたいと思う。各組織の発生、相互の関連性の問題、さらに広く日本的立場で越後警女組織を論ずることは、その後に期したいと思っている。

### 註

- 1) 「長岡警女の組織と生態」(『長岡市立科学博物館研究報告』第7号、昭和47年、鈴木昭英)  
「刈羽警女」(『長岡市立科学博物館研究報告』第8号、昭和48年、鈴木昭英)
- 2) 小林ハル女よりの聞き書きは「阿賀北の警女問書Ⅰ～Ⅲ」(『蒲原』第32～34号、昭和48年、佐久間惇一)にもあるので参照願いたい。
- 3) 「警女の民間信仰」(『日本民俗学』第85号、昭和48年、鈴木昭英)
- 4) 「唄と踊りを興行した四郎丸警女」(『長岡郷土史』第12号、昭和49年、鈴木昭英)
- 5) 前掲拙稿「刈羽警女」
- 6) 高田組警女については「高田ゴゼ」(『頸城文化』第14号、昭和35年、市川信次)、「高田のゴゼ」(『高田市文化財調査報告』第2集、昭和34年、高田市文化財調査委員会)、「警女の道」(『小原流挿花』第22巻第5号、昭和47年、市川信次)、『警女—盲日の旅芸人』(昭和47年、齋藤真一、日本放送出版協会発行)等を参照願いたい。
- 7) 「越後警女溺死一件」(『近代民衆の記録』4・流民、昭和46年、市川信次、新人物往来社発行)

昭和49年3月25日印刷  
昭和49年3月31日発行

(非売品) 発行部数 500部

長岡市立科学博物館研究報告 No. 9

編集兼発行者 鈴木昭英

発行所 長岡市立科学博物館(長岡市悠久山公園内〒940)

印刷所 北洋印刷(新潟県西蒲原郡巻町 電話(2)2345番)